

松 ノ 尾 遺 跡 16

保 育 園 建 設 に 伴 う
古墳・平安時代等の発掘調査報告書

2 0 2 0

甲斐市教育委員会

松 ノ 尾 遺 跡 16

保 育 園 建 設 に 伴 う
古墳・平安時代等の発掘調査報告書

2 0 2 0

甲斐市教育委員会



巻頭写真1 調査区遠景（南東から荒川扇状地を臨む、矢印は松尾神社）



巻頭写真2 調査区遠景（北から甲府盆地を臨む）



巻頭写真 3 調査区全景（合成写真 右が北）



巻頭写真 4 2号円形周溝 主な出土遺物

序 文

甲斐市は、平成16年（2004）に竜王町・敷島町・双葉町が合併して出来たまちで、令和元年（2019）9月に市制施行15周年を迎えました。合併後も人口が微増し続けており、要因として考えられることは、県都甲府に隣接し交通の利便性の良いことがあげられるでしょう。そのため、開発によって生じる埋蔵文化財調査も増加の一途をたどっております。

現在、市内には220箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていますが、とくに市中央部の茅ヶ岳南麓や市東部の荒川扇状地に集中しています。この中には、居住域と墓域がセットで発見された弥生時代の「金の尾遺跡」や、山梨県最古の登窯跡である白鳳期の「天狗沢瓦窯跡」など、県の歴史を紐解く上でも重要な遺跡が点在しています。

今回報告します「松ノ尾遺跡」の第16次発掘調査は、甲斐市中下条地内の保育園建設工事に伴い行われました。調査区はもともと幼稚園が建っていた場所ですが、以前は隣接する松尾神社の境内地でした。神社の旧境内地を調査するという例は少なく、新たな調査成果を得られるだろうと想定して調査をしたところ、古墳の存在を思わせる周溝や、かつての神社施設の柱穴と思われる穴を検出しました。また、荒川扇状地で調査を行うと必ず検出されるかつての水田耕作土と床土が一切検出されず、調査区が古代から特別な場所として使用されていた背景を知ることができました。

先にも述べましたとおり、甲斐市では頻繁に開発が行われ、埋蔵文化財の保護が急務となってきております。今後は調査で得られました成果を後世に伝えていくとともに、学校教育や歴史研究、生涯学習の資として多くの方々に幅広く活用していただければ幸いです。

最後に、ご指導、ご協力いただきました関係各位に感謝申し上げます。

令和2年3月

甲斐市教育委員会

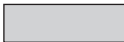


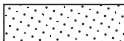
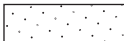

教育長 三 澤 宏

例 言

1. 本書は、山梨県甲斐市中下条に所在する松ノ尾遺跡第16次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は保育園建設工事に伴い実施された。調査面積は約750㎡である。
3. 発掘調査及び整理分析調査期間
試掘調査 平成26年8月5日～同年8月11日（園庭部分）
平成29年3月9日～同年3月31日、平成29年5月9日～同年5月26日（園舎等解体後）
発掘調査 平成29年10月17日～平成30年2月16日
整理分析調査 平成30年9月7日～平成31年3月29日、令和元年4月1日～令和2年2月28日まで断続的に行った。
4. 調査組織は次のとおりである。
調査主体者 甲斐市教育委員会
調査担当者 長谷川 哲也（甲斐市教育委員会）
調査事務局 甲斐市教育委員会 教育部 生涯学習文化課 文化財係
発掘・整理分析調査協力員（平成29年度～令和元（平成31）年度、敬称略・五十音順）
青柳 正史・秋山 高之助・伊井 實・飯沼 源治・笠井 治・小林 求・斉藤 功記・佐藤 真紀・醍醐 三郎・高添 美智子・瀧口 晴彦・立花 重光・田中 ひとみ・堤 吉彦・手塚 松雄・羽中田 勲・日向 充雄・深澤 友子・古屋 秀雄・望月 厚子・望月 典子・森沢 篤美・箭本 千尋・横内 博
5. 報告書作成にあたり、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略）
坂本 美夫・新津 健・中込 司郎・鈴木 麻里子・畑 大介（甲斐市文化財保護審議委員）、末木 健・室伏 徹（山梨県考古学協会）、久保田健太郎（山梨県教育庁学術文化財課）、小林 健二・一之瀬 敬一（山梨県立考古博物館）、熊谷 晋祐・北澤 宏明（山梨県埋蔵文化財センター）、佐々木 満（甲府市教育委員会）、高野 高潔（昭和測量株式会社）
6. 本書の執筆及び編集、遺構・遺物の写真撮影はすべて長谷川が行った。
7. 遺構測量と平面図作成、出土遺物の出土位置記録は疾測量株式会社（代表取締役：石井猛雄）に委託した。
8. 出土遺物（第28図-86）の接合・実測は、昭和測量株式会社（代表取締役：小林日登士）に委託した。
9. 出土金属製品の保存処理等は、公益財団法人山梨文化財研究所（理事長：冲永佳史）に委託した。
10. 重機による表土剥ぎ及び埋戻しは、三枝興業（代表：三枝哲雄）が行った。
11. 松ノ尾遺跡第16次発掘調査において得られたすべての資料は一括して甲斐市教育委員会に保管してある。
12. 遺物の時期確定は、『山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）』を準拠としている。
13. 調査の概要については、その他の出版物等で一部公表されているが、本書と異なる場合は本報告をもって訂正する。

凡 例

1. 座標は世界測地系に準拠した。また、標高は東京湾平均海水面水準である。
2. 遺構堆積土及び土器の色調は、農林水産省農林技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』に準拠している。
3. 本書の遺物実測図に用いたスクリーントーンは、次のとおりである。

	赤彩		黒色加工		須恵器
	陶磁器		擦り面		瓦
4. 各挿図の縮尺は、遺構1/40、土器1/3、石器・石製品1/2を原則とし、それぞれにスケールを付した。
5. 遺物の番号は、本文・挿図・観察表で統一し、調査区全体を通して1番から順に番号を付加した。
6. 遺構平面図中の数字と黒点は、遺物番号と出土位置を表す。
7. 出土遺物観察表の計測値欄中、（ ）内数値は推定を表し、残部の計測は数字の頭に「残」と記した。
8. 本書で使用した地図・空中写真は、国土地理院ホームページの治水地形分類図「甲府」、同院の地図・空中写真閲覧サービスから「甲府（1948）」、国土地理院刊行の2万5千分1地形図「甲府北部」、甲斐市都市計画地図をそれぞれ一部加工して使用した。

本文目次

序文／巻頭写真／例言・凡例／目次

第1章 調査の経過と概要	1
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	6
第3節 松ノ尾遺跡の概要	8
第4節 松尾神社の概要	13
第3章 遺構と遺物	
第1節 基本層序	14
第2節 遺構と遺物	15
第4章 まとめ	23

写真目次

写真1 平成26年度試掘状況	1	写真8 報告書挿図編集	2
写真2 平成29年度試掘状況	1	写真9 調査区周辺の様子	4
写真3 表土剥ぎ 掘削状況	2	写真10 昭和30年頃の松尾神社	13
写真4 測量調査委託 実施状況	2	写真11 幼稚園建設直前の様子	13
写真5 土器接合作業	2	写真12 出土状況	30
写真6 遺物実測委託 実施状況	2	写真13 取り上げ後状況（北から）	30
写真7 出土品デジタルトレース	2		

表目次

第1表 Pit A 一覧表	40	第3表 出土遺物観察表	60
第2表 Pit B・Pit C 一覧表	41		

図版目次

第1図 周辺地形図	3	第21図 1号円形周溝出土遺物①	43
第2図 旧河道と遺跡の立地	5	第22図 1号円形周溝出土遺物②	
第3図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡	7	2号円形周溝上層出土遺物①	44
第4図 調査区位置図	9・10	第23図 2号円形周溝上層出土遺物②	45
第5図 調査区全体図	11・12	第24図 2号円形周溝上層出土遺物③	46
第6図 基本土層図	14	第25図 2号円形周溝上層出土遺物④	47
第7図 1号円形周溝	26	第26図 2号円形周溝上層出土遺物⑤	
第8図 2号円形周溝①	27・28	2号円周溝下層出土遺物①	48
第9図 2号円形周溝②	29	第27図 2号円形周溝下層出土遺物②	49
第10図 2号円形周溝③	30	第28図 2号円形周溝下層出土遺物③	50
第11図 1号竪穴建物跡①	31	第29図 2号円形周溝下層出土遺物④	
第12図 1号竪穴建物跡②	32	及び一括出土遺物	51
第13図 1号竪穴状遺構	33	第30図 1号竪穴建物跡・1号竪穴状遺構出土遺物①	52
第14図 廃棄土坑	34	第31図 1号竪穴状遺構出土遺物②	53
第15図 1号土坑・1号落込み	35	第32図 廃棄土坑・1号落込み出土遺物	54
第16図 2号及び3号落込み	36	第33図 1号～3号落込み・1号石組み出土遺物	55
第17図 1号及び2号石組み	37	第34図 1号及び2号石組み・遺構外出土遺物①	56
第18図 ピット群①	38	第35図 遺構外出土遺物②	57
第19図 ピット群②	39	第36図 遺構外出土遺物③	58
第20図 遺構外出土遺物出土位置	42	第37図 遺構外出土遺物④	59

写真図版目次

図版 1	調査前風景（平成 26 年度） 本調査前風景（平成 29 年度） 遺構検出状況	図版 7	1 号竪穴状遺構 遺物 (114) 出土状況（西から） 1 号竪穴状遺構 遺物 (114) 出土状況（北から） 廃棄土坑 検出（南から） 廃棄土坑 遺物出土状況（東から） 廃棄土坑 完掘（南から） 1 号落込み 完掘（南から） 2 号落込み 完掘（南西から） 3 号落込み 完掘（北西から）
図版 2	1 号円形周溝 遺構検出状況（北から） 1 号円形周溝 検出面出土遺物 清掃風景 1 号円形周溝 完掘（東から） 1 号円形周溝 完掘（南東から） 2 号円形周溝 作業風景（北から）	図版 8	1 号石組み 完掘（北東から） 2 号石組み 完掘（南東から） ピット群 完掘 石材（173・攪乱から出土） 石材（174・攪乱から出土）
図版 3	2 号円形周溝 遺物（86）出土状況（東から） 2 号円形周溝 遺物（86）出土状況（北から） 2 号円形周溝 遺物（87）出土状況（西から） 2 号円形周溝 遺物（60）出土状況（試掘調査時） 2 号円形周溝 溝底（北から） 2 号円形周溝 溝底（東から）	図版 9	1 号円形周溝・2 号円形周溝上層出土遺物 (2・6・7・8・10・13 / 18・19・21・22・23・24・27・28)
図版 4	2 号円形周溝他 検出作業風景 2 号円形周溝 作業風景 2 号円形周溝 南側 遺物（38）出土状況（東から） 2 号円形周溝 南側 遺物（38）出土状況 2 号円形周溝 南側 完掘（西から） 2 号円形周溝 南側 溝底（南から） 2 号円形周溝 南側 検出作業風景（西から） 2 号円形周溝 南側 検出（南から）	図版 10	2 号円形周溝上層出土遺物 (20・25・26・29・30・31・32・33・34・35・36・47)
図版 5	2 号円形周溝 完掘（東から） 2 号円形周溝 南側 完掘（東から）	図版 11	2 号円形周溝上層・下層出土遺物 (38・46・50・51・54・55・56・59・60・62 / 63・64・65・70)
図版 6	1 号竪穴建物跡 検出（試掘・西から） 1 号竪穴建物跡 完掘前（南から） 1 号竪穴建物跡 完掘（南から） 1 号竪穴建物跡 完掘（南西から） 1 号竪穴建物跡 炉跡 完掘（西から） 1 号竪穴建物跡 周辺（西から） 1 号竪穴状遺構 完掘（南西から） 1 号竪穴状遺構 遺物 (112) 出土状況（南西から）	図版 12	2 号円形周溝下層・一括出土遺物 (66・67・68・69・71・72・73・74・77・78・86・87・88 / 89・92)
		図版 13	1 号竪穴建物跡・1 号竪穴状遺構・廃棄土坑出土遺物 (93・94・95・96・97・98・99・100・101 / 102・103・104・109・110・111・112・114 / 119・121)
		図版 14	落込み・石組み・遺構外出土遺物 (123・124・125・126・127 / 129・130・131・133 / 134・135・136・137・138 / 142・143・144・146・150・151・152・153・154・155・156)

第1章 調査の経過と概要

1. 調査に至る経緯

現在の甲斐市域の過去の人口増加率をみると、昭和50年（1975）の34,986人に対し、昭和60年（1985）に54,291人、平成7年（1995）に66,628人、平成12年（2000）に71,706人、平成22年（2010）に74,732人と、人口は確実に増加している。令和元年（2019）12月現在の人口は75,835人であり、市域の人口は昭和50年当時と比較して約2倍の増加となっており、近年は微増が続いている。人口が増加しているということは、水田や畑地として利用している、あるいは利用していた土地を宅地として開発することであり、かつての農村風景の多くは画一的な住宅地となり、市域の一部にはスプロール化と思われる部分も看取できる。開発する土地が埋蔵文化財包蔵地に該当かどうかの照会件数や文化財保護法第93条に基づく届出件数も、年によって多少の増減はあるものの増加傾向にあり、それに比例し包蔵地内における工事立会いや試掘件数も増えている。とくに分譲地を造成するにあたり、恒久的建造物である道路を造成することが多いため、必然的に試掘調査の件数も増加し、このことは本調査の増加にもつながっている。

民間開発が増加する中、本報告は保育園建設に伴う本調査が行われたものである。平成25年度、市立松島保育園舎の老朽化に伴い園舎建替の話が浮上した。新園舎建設予定地となる市立しきしま幼稚園敷地が、埋蔵文化財包蔵地「松ノ尾遺跡」に該当していることを担当課である子育て支援課へと伝えた。平成26年6月24日付けで担当課から市長名で文化財保護法第94条に基づく通知があり、同年8月5日～11日にかけて園庭部分の試掘調査を実施した。結果、古墳時代の溝跡や溝状遺構を検出し、古墳時代後期および平安時代の土器片なども出土したことから、工事が具体的になった時点で市教育委員会と協議を行うように回答した。その後、幼稚園舎が解体されたことをうけ、平成29年3月9日～31日・同年5月8日～26日に旧園舎部分等の試掘調査を行った。その結果、旧しきしま幼稚園敷地において竪穴建物跡、溝などが検出された。特に溝は平成26年度の試掘調査で検出された溝と同一遺構と思われ、出土遺物も古墳時代後期の遺物が中心であった。以上のことから申請者である甲斐市長宛に本調査が必要であることを回答した結果、平成29年7月14日付で甲斐市長から発掘調査の依頼が甲斐市教育委員会教育長宛に提出され、同日収受した。同年9月12日の定例市議会に補正予算案が提出され、9月21日に市議会で補正予算案が議決された。

2. 調査の方法と経過

本調査は平成29年10月17日から始まった。調査対象区域は旧しきしま幼稚園の園庭部分を中心である。園舎があった場所は園舎基礎などによって遺構が破壊されている箇所もあったが、ほとんどの遺構は良好に残存していた。表土剥ぎは重機を用いたが、包含層からは手作業での掘削を行い完掘した。遺構のセクション図・エレベーション図・出土遺物の平面図は手実測および写真実測で行い、縮尺は1/20を基本とした。遺構測量と遺物の取り上げ、UAVによる空中写真撮影は疾測量株式会社に委託し、発掘調査は平成30年2月16日まで行った。



写真1 平成26年度試掘状況



写真2 平成29年度試掘状況

3. 整理・分析作業の経過

平成30年度は報告書刊行に向けて膨大な出土遺物の整理・分析作業を開始し、これらの作業は主に文化財整理室で行った。実測図のトレースは『Adobe Photoshop CC』、『Adobe Illustrator CC』にてデジタルトレースし、拓本の挿図編集・版組も同ソフトを用いて行った。それと並行し、発掘調査現場での情報をもとに遺構の図面や出土遺物の検討を行い、齟齬がないよう留意し本報告を記述した。これら一連の作業を終え、令和2年3月末に報告書の刊行となった。



写真3 表土剥ぎ 掘削状況



写真4 測量調査委託 実施状況



写真5 土器接合作業



写真6 遺物実測委託 実施状況



写真7 出土品デジタルトレース



写真8 報告書挿図編集

第2章 遺跡の環境と概要

第1節 地理的環境

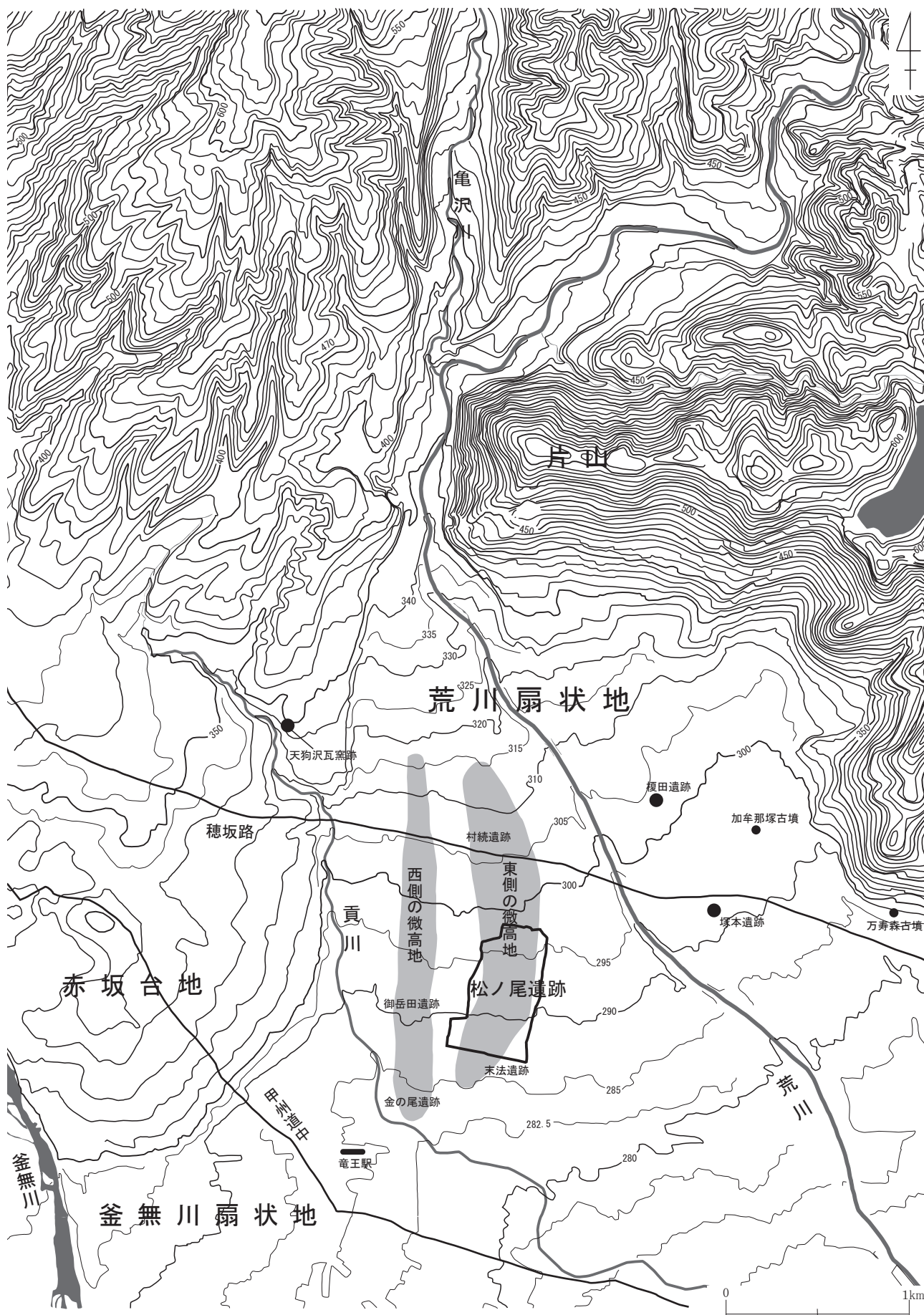
1. 地理的位置と環境

本市は甲府盆地の北西側に位置し、東側は甲府市と昭和町、西側は韮崎市と南アルプス市に接している。平成16年9月1日に双葉町・敷島町・竜王町の3町が合併して甲斐市となり、現在の市域を構築している。面積は71.94km²、人口は令和元年12月末現在およそ7万5千人である。

市域は標高千数百mの山岳地から、丘陵、扇状地などバラエティに富んだ地形である。市域はおおよそ4つのエリアに分類することができる。市の北部は茅ヶ岳^{かやがたけ}（1704m）や曲岳^{まがりたけ}（1642m）、太刀岡山（1259m）、黒富士（1633m）など、標高千数百mを超える山々が点在する「山岳エリア」。地質は主に凝灰岩や凝灰角礫岩で構成されており、南流する亀沢川によって急峻な段丘崖を構築している。また、荒川の上流である国特別名勝御岳昇仙峡付近は花崗岩で構成されており、山を隔てて大きく地質が異なる。

市の中央部分は茅ヶ岳の火山活動によって形成された台地が広がる茅ヶ岳南麓の「丘陵エリア」で、赤坂の地名にもみられるとおり、褐色で粘性が非常に強い火山灰層が主を占める。武田信玄が行ったとされる治水施策において（『甲斐国志』）、分流した御勅使川の流水をぶつけた高岩もこのエリアに含まれる。

市の南部は南アルプス鋸岳を源流とする釜無川（富士川）によって形成された「釜無川扇状地エリア」で、北西から南東にかけてゆるやかに傾斜する。竜王信玄堤や竜王河原宿が立地するのもこのエリアである。現在、域内は開発等によって一見平坦に見えるが、国土地理院の「治水地形分類図」や米軍撮影の空中写真を確認すると、旧河道が幾筋も確認できる。そのため、地質の主は砂礫層である。また、江戸時代



第1図 周辺地形図

市の東部は、甲府市との境を流れる奥秩父山系の金峰山を源とする荒川によって形成された「荒川扇状地エリア」で、かつて大部分は水田として利用されていたが、現在はほとんどが宅地となっている。このエリアは甲斐市域のほか、甲府市千塚や山宮なども含まれ、扇状地上には旧河道の痕跡が浅い谷状に残っており、古い集落は微高地上に立地している。扇状地の西縁は荒川と貢川によって形成された段丘崖で、この段丘上に天狗沢瓦窯跡（山梨県指定史跡）が立地している。そして、今回報告する松ノ尾遺跡は「荒川扇状地エリア」に属している。

松ノ尾遺跡が立地する荒川扇状地エリアは、山岳エリアの地質の影響を多大に受けた地質であり、上流の花崗岩、デイサイト、輝石安山岩、粘板岩などの碎屑物から成る。この扇状地上に立地する遺跡の地山は、にぶい黄褐色をした砂礫層ないし礫層で、遺構検出面は粗粒砂や中粒砂から成る砂礫層である。礫層の検出は場所にもよるが、砂礫層の地山を除去すると大小の円礫で構成された礫層となることが多い。その円礫は、赤茶色に風化した非常にもろい花崗岩が主である。

片山

牛 匂

大久保

荒 川

境

山宮町 (甲府市)

羽黒町 (甲府市)

天狗沢

龍 地

湯 村 山

島上条

中下条

千 塚 (甲府市)

湯 村 (甲府市)

赤 坂 台 地

調査区 →

大下条

長 塚

慈照寺

竜王新町

竜 王 駅

竜 王

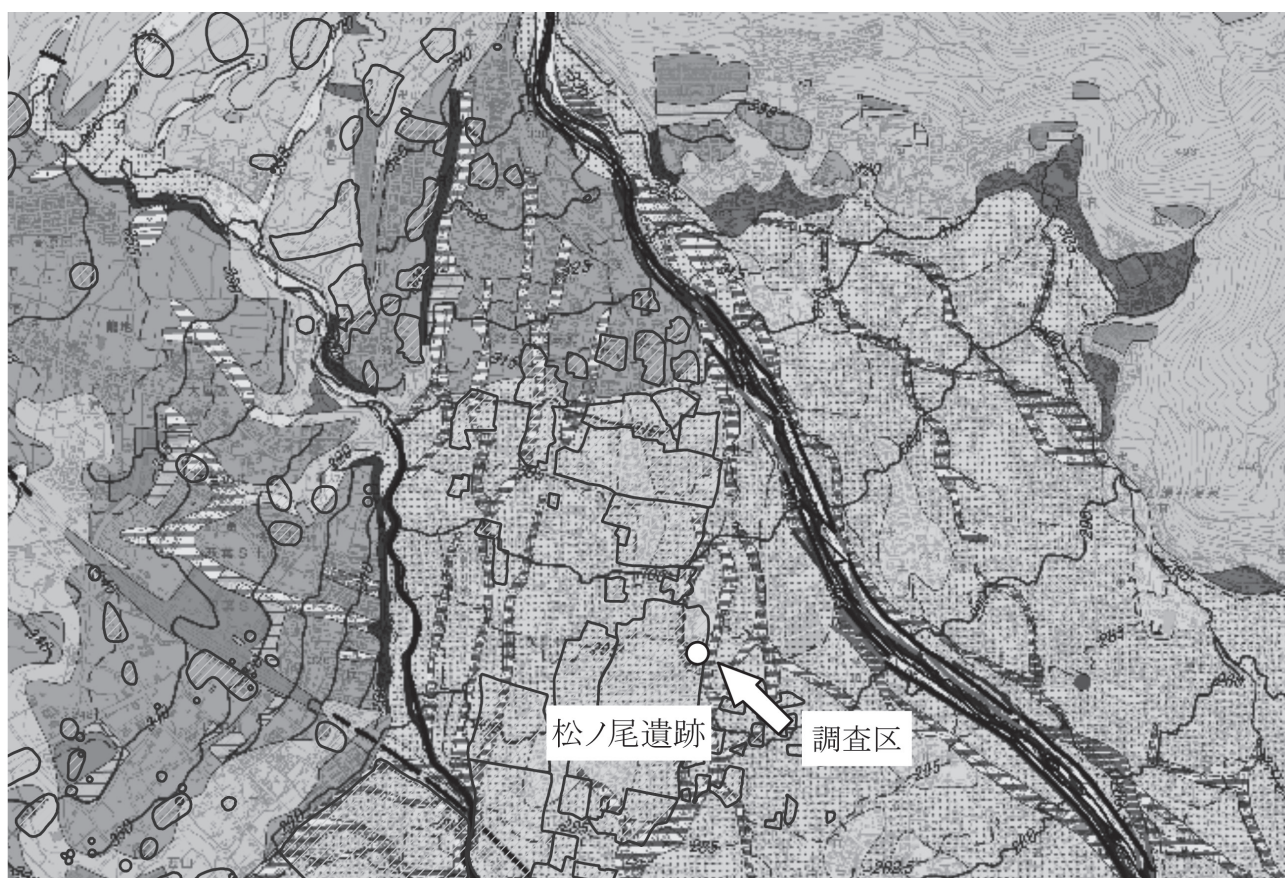
池 田 (甲府市)

(国土地理院 地図・空中写真閲覧サービスから「御嶽昇仙峡」(USAM662-94 / 1947) を一部抜粋・加筆)

層の地山（遺構確認面）を検出し、遺構完掘時に地表下100cm以上を掘削したにも関わらず礫層は検出されなかった。一方で御岳田遺跡第8次調査では、地表下約100cmで礫層を検出し、砂礫層を検出した部分はおくわずかであった。

遺跡ごとに微妙に地山の質が異なる理由として、以下のことが考えられる。荒川扇状地エリアの地山である砂礫層および礫層は、当然ながらほとんどが荒川によって形成されたもので、扇状地の流路の特質として網状流路を形成していた。そのため、河道の流量や川幅等によって堆積状況が細かく異なり、地山に砂礫層がほとんどなく礫層となる場所は、旧河道の中でも水量が比較的豊富な河道であったといえるだろう。このことは遺跡の立地にも少なからず影響していると思われる。国土地理院ホームページに公開されている「治水地形分類図」(https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/fc_index.html)のうち、松ノ尾遺跡が該当する「甲府北部」を閲覧すると、扇状地の地形の特色どおり網状流路が目立つ。当然ながら正確に全ての旧河道を復元しているわけではないので、取り扱いには注意が必要であるが、上述の図に荒川扇状地域の遺跡地図を重ねると、旧河道を避けるように多くの遺跡が立地していることが看取できる（第2図）。図に示されている旧河道以外にも、松ノ尾遺跡をはじめ、御岳田遺跡や金の尾遺跡でも調査時に旧河道と思われる礫層が検出されているため、幾筋も流路があったことは容易に想像がつく。

また、扇状地上の遺跡の立地は、旧河道を避けるように遺跡（太枠部分）が分布していることが見て取れる。扇状地上にはわずかな起伏や微高地がいくつか存在する。この起伏は日常生活を送る上で気にすることはほとんどないが、遺跡の立地を考える上では非常に重要な要因となる。旧河道によってつくられた起伏・微高地は、大きく分類して「東側の微高地」と「西側の微高地」が存在する。この名称は我々が便宜上使用しているだけで正式名称ではないが、甲斐市域の荒川扇状地の遺跡立地を述べる上で欠かせない用語となっている。東側の微高地には松ノ尾遺跡や村続遺跡、西側微高地には金の尾遺跡や御岳田遺跡が立地し、東西の微高地や、同じ微高地でも場所によって検出される遺構の時期にも若干の違いがあることが、これまでの調査によって判明している。詳述は避けるが、微高地の南端で古い時代（縄文・弥生・古墳初頭）の遺構が発見されやすく、微高地の北方へ進むにつれて新しい時代（古墳後期・平安）



第2図 旧河道と遺跡の立地

（国土地理院 地図・空中写真閲覧サービスから治水地形分類図「甲府北部」を一部抜粋・加筆）

の遺構が発見されやすい傾向が見られる。このことは、荒川扇状地の開発が南端から始まり、徐々に北方へと開発の手が入っていったことを示唆していると思われる。

調査区の現状は、西側は荒川から取水している二ノ堰（水路）、東側は一段低い地形であり、いうなれば遺跡の際である。過去に今次調査区の北東側隣接地（現在はマンション）を試掘調査したが、そこでは大小の円礫が出土し旧河道の様相を呈しており、遺構等は検出されなかった。このことから、現在のところ今次調査区が松ノ尾遺跡の東端ラインの一部であるということがわかる。

第2節 歴史的環境

松ノ尾遺跡と周辺の遺跡（第3図）

以下に主な遺跡を挙げながら、周辺の遺跡を概観することとする。主要地方道敷島田富線（県道25号線）のやや東側、埋没谷をはさんだ東側微高地は、西側微高地よりも濃密に遺跡が分布する。松ノ尾遺跡は東側微高地の南部のほとんどを占める遺跡で、平安時代中期の住居跡から出土した銅造仏形坐像（県指定有形文化財）がともに著名である。また、平成27年度の調査では、周溝墓の溝から弥生時代末期から古墳時代初頭に属すると思われる残存高84.3cmの複合口縁壺が出土した（松ノ尾遺跡第15次調査）。また、東側微高地には、金峰山金桜神社（甲府市御岳町）への登拝路である「御嶽道」が南北に貫入しており、道沿いには石造物が多いことも特徴の一つである。

便宜上の「東側の微高地」の遺跡を北から概観する。甲府盆地周辺部の古墳では北限に位置する大塚古墳（大塚遺跡）が位置し、そこから南へ下ると、平成27年度の本調査で石室の基底部が発見された大庭遺跡および大庭古墳が位置する。石室内からは、計23個の水晶製切子玉や等、古墳時代後期の良好な資料が得られ、甲府盆地北西部の当該期を研究する上で重要な調査となった。さらに南下をすると、甲斐市立敷島中学校周辺に行き当たる。山宮地遺跡は中世の土壌墓が多数検出され、仏具を含む銅製品類17点が一か所からまとまって出土している。隣接する村続遺跡では、8世紀後半から12世紀代にかけての住居跡が37軒検出された。遺物は瓦や緑釉陶器、貿易陶磁器、銅製小仏像の台座が出土しており、周辺の同時代の集落遺跡とは出土遺物の様相が異なる特徴的な遺跡である。主要地方道甲府韮崎線（通称：山の手通り、穂坂路）をこえた先にある不動ノ木遺跡では、試掘調査での確認にとどまるが、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての焼失住居跡や、平安時代後期の土師器片などが出土している。不動ノ木遺跡をこえると今回報告をする松ノ尾遺跡に行き当たる。概要については次節で詳述する。東側微高地南端部の末法遺跡は古墳時代前期から中期を主とした集落遺跡であるが、第2次調査では管玉の未成品1点のほか珪化凝灰岩のチップがまとまって出土している。このことから玉造りに関係する集落である可能性が疑われている。

次に「西側の微高地」の遺跡を北から南に概観する。山梨県最古（縄文時代早期）のミニチュア土器が出土した石原田遺跡、古墳時代後期の集落遺跡の原腰遺跡が最初に立地する。山の手通りを渡ると、縄文時代前期末や中期後半の縄文土器片や黒曜石の剥片・チップが多量に出土した金ノ宮遺跡がある。遺跡名である金ノ宮は、現在天狗沢瓦窯跡の東隣に鎮座する金山神社が、戦国時代頃まで鎮座していたことに由来するという。南下すると日ノ詰遺跡となるが、調査履歴がなく詳細は不明な遺跡である。さらに南下すると令和元年度までに10度の本調査が行われた御岳田遺跡、そして山梨県を代表する弥生時代後期の遺跡である金の尾遺跡となる。御岳田遺跡は管玉の未成品が第6次調査で出土しており、東側微高地南端の末法遺跡と同様、古代の玉造に関する遺構が付近に眠っている可能性が示唆されている。なお、玉類未成品の出土は、現在までに山梨県内では甲斐市でのみ出土していることを付記しておく。

東西の微高地以外には、7世紀後半（白鳳期）の登窯跡が3基発見された天狗沢瓦窯跡が段丘上に立地する。瓦の供給先は発見されていないものの、付近に古代寺院や役所（巨麻郡衙）の遺構が存在する可能性が高いと推測されており、ここ数年は活発な議論が再燃している。天狗沢瓦窯跡に近接する赤坂台地上には古墳時代後期から終末期の古墳群である赤坂台古墳群が立地する。荒川扇状地付近（荒川右岸）の古墳は、万寿森古墳（甲府市湯村）や加牟那塚古墳（甲府市湯村）に代表される6世紀半ばから後半にかけての古墳で、赤坂台古墳群よりもわずかに古い古墳である。このことから、当時の人々が荒川右岸から次第に赤坂台地に古墳を築くようになったと考えられている。赤坂台古墳群は、中央自動

車道建設の際にかなりの数の古墳が調査された。なかでも竜王2号墳からは毛彫り馬具が出土していることが特筆される。現存する古墳は少ないものの、赤坂台古墳群は古墳後期から終末期にかけての古墳群ということで、次代の天狗沢瓦窯跡を造った人々との関連も考えられている。

以上をまとめると、市域を見渡しても荒川扇状地エリアには遺跡が集中しており、加えて調査件数も多いことから、資料も豊富である。荒川扇状地エリアは、市域の歴史解明だけにとどまらず、甲斐国の古代史を研究する上でも注目すべき地域と表現しても過言ではない。今後、調査件数の増加に伴い、さらに明らかになってゆくであろう。

第3節 松ノ尾遺跡の概要

本遺跡は前節で記したとおり荒川扇状地の東側微高地に立地しており、現況の土地利用のほとんどは宅地として利用されている。遺跡の発見は平成5年（1993）までさかのぼり、都市計画街路愛宕町下条線建設工事に伴う試掘調査によって発見された。令和元年度現在、今次調査を含め17度にわたる本調査が実施されており、市内で最も本調査件数の多い遺跡である。ここでは、報告書刊行済の第1次～第15次調査で得られた資料をもとに、時代ごとに概観する。

縄文時代

縄文土器は包含層などから普遍的に出土するが、竪穴建物跡は発見されていない。時期的には、縄文時代中期に属する土器片が多いようである。

弥生時代

これまで11軒の竪穴建物跡が確認されている。調査履歴からの分布域は第1次調査区である愛宕町下条線（甲斐松ノ尾通り）から北側を中心に散布的に検出している。第9次調査では長軸11.8m・短軸9mの楕円形をした大型住居跡を検出している。近接する金の尾遺跡は弥生時代後期前半の遺構・遺物が中心であるが、松ノ尾遺跡の遺構・遺物は、これまでのところ弥生時代後期後半から末葉にかけてのものが多く、南から北へ開発の手が伸びてきた証左とも考えられる。なお、弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけての竪穴建物跡も便宜上、弥生時代に含めている。

古墳時代

前期から後期にかけて遺構が存在するが、後期の遺物・遺構が中心である。3世紀後半を古墳時代に含めた場合、前期4軒、中期6軒、後期31軒の竪穴建物跡が確認されている。後期の検出数が群を抜いているが、この31軒は6世紀末から7世紀初めに属する竪穴建物跡である。検出数からもわかるとおり、6世紀後半から7世紀初頭の古墳時代後期・終末期（飛鳥時代）に本遺跡で最初の隆盛期を迎えている。その他、第15次調査では弥生時代末～古墳時代初頭に属する大型の複合口縁壺（大型赤彩壺・大廓式）が、周溝墓の溝底から出土した。

奈良・平安時代

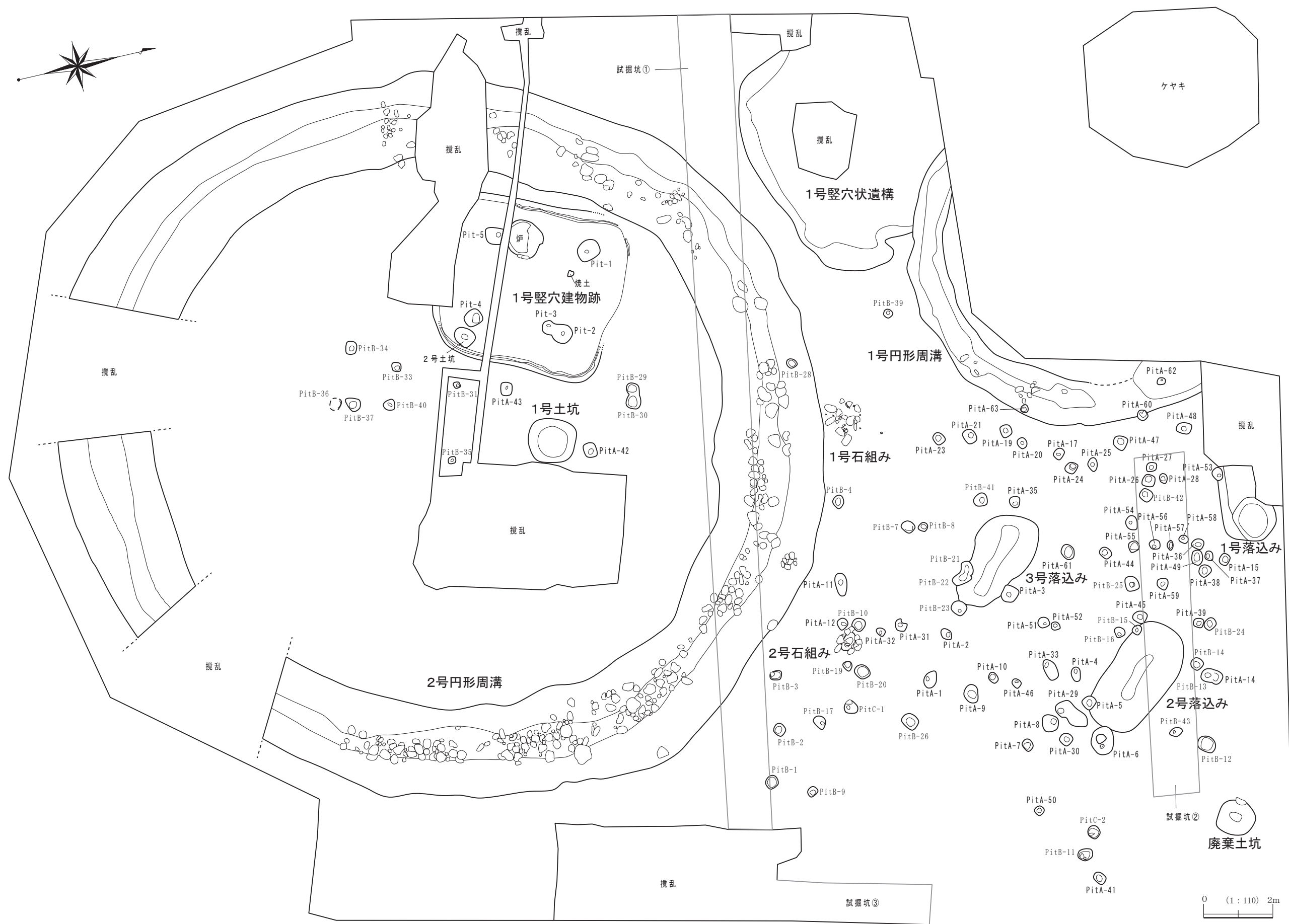
遺構・遺物と共に充実した調査成果を得ている時期である。特に平安時代中期および後期の竪穴建物跡の検出が顕著で、9世紀後半から10世紀前半が10軒、10世紀後半から11世紀前半が21軒、11世紀後半から12世紀代が24軒と、竪穴建物跡の検出数は各時代を通して平安時代が最も多い。特殊な出土遺物として、金銅製阿弥陀如来坐像（県指定文化財）2軀、塑像の螺髪、帯金具、円面硯、布目瓦片、緑釉陶器などが出土しており、通常の集落とは出土遺物の様相が異なる。このことから、寺院や官衙に関連する集落ではないかと考えられているものの、これを決定づける遺構・遺物は発見されていない。また、第2次調査では、遺構外からではあるが「狛□」と墨書された9世紀から10世紀前半に属する土師器が出土している。研究者の中では「狛寺」（＝巨麻郡の寺）と読むのではないかとする意見もあるが、□部分の墨書はかなり薄く、現段階での明確な判読は大変難しい。

平安時代以降

第9次調査では室町時代の土壙墓を55基検出している。また、1号溝は埋積土の状況から溝の北側に土塁の存在が推測され、館跡の可能性を教示している。



第4図 調査区位置図



第5図 調査区全体図

以上、本遺跡は古墳時代および平安時代の遺構・遺物が検出・出土する傾向が高いことが、これまでの調査で判明している。

第4節 松尾神社の概要

調査区は、隣接する松尾神社の旧境内地であるが、社会情勢等の影響によって昭和43年（1968）から平成28年（2016）までは幼稚園として利用されていた。写真9に調査区が黒い点のように映っている部分が、遷座前の松尾神社の社叢である。地元の方の話では、「昔の松尾神社は鬱蒼としていて昼でも暗かった。夜、友人たちと『拝殿まで一人で行く』という肝試しをやったが、とても怖かった」という話を伺った。その話を裏付けるように、『敷島町誌』（p 607）には「境内の森には樹令数百年の大ケヤキの外、多数の神木がうつそうとして森巖たるものであったが、昭和34年（1959）の台風で倒木多くこれを整理したので、今はさびしくなっているが、その後に若木が植樹されている。」とある。また、西隣には二ノ堰が南流しており、その水路工事の際に亀甲が出土しているのを見たという地元の方の話も伝わっている。

松尾神社の歴史については、『甲斐国志』（1814年成立、以下『国志』）および『甲斐国 社記・寺記』（1868年成立、以下『社記・寺記』）に詳しく記されている。神社の来歴について記述されている部分をそれぞれ要約すると、「天下条村の鎮守で、社地は方一丁（約9917㎡）あまり。延喜式に載っている山梨郡の松ノ尾神社はこの社のこと」（『国志』）、「当社は風土記延喜式等に載っている社で、いつ鎮座したのかは大変昔のことなのでよくわからない」（『社記・寺記』）とある。山梨郡および巨摩郡どちらに属するかは、当時の荒川の流路によるところがあり、『国史』がいう式内社かどうかの判別も議論が分かれている。

創建について先行研究では、京都松尾大社（西京区嵐山宮町）に残されている建久7年（1196）6月17日付の源頼朝書状（『鎌倉遺文』849号）中に「甲斐国志麻荘」と記述があることから、少なくとも12世紀後半までには松尾社領として当地が機能していたと考えられている。神社もその時期の前後に松尾大社から勧請されたのではないかと筆者は考える。現在の祭神は、松尾大社が大山咋神・中津嶋姫命（市杵島姫命）の2柱を祀っていることに対し（松尾大社パンフレット記載）、当社は大山咋命・若山咋命・大己貴命・少名彦命・中津嶋姫命の5柱を祀っている（山梨県神社庁 HP 記載）。なお、当社の本殿（市指定文化財・安土桃山時代）・拝殿は、松尾大社と同様に東を向いて鎮座している。

『国史』は松尾神社が文化3年（1806）に火災に遭ったことを記しており、その火災時に弘安年中（1278～1288）の鰐口が消失したという。『社記・寺記』は「神宝が多数あったが、元禄年中（1688～1704）に焼失してしまった」とあり、火災に遭った時期の記述にズレがある。鰐口については、『社記・寺記』は「弘安年中の鰐口があったが、寛政（1789～1801）の頃に何者かに奪われた」（要約）とある。これらの史料批判をすることはこの場では出来ないが、「①少なくとも最低一度は火災に遭っている」、「②弘安年中の鰐口が失われたということは事実」であろう。その他、『国史』には随神門の裏に応永6年（1399）・文安2年（1445）銘の石灯籠があると記述があるが、現在は行方がわからない。

以上のように、神社の創建については推測の域を出ないが、前述の古文書から12世紀後半には松尾社



写真10 昭和30年代頃の松尾神社（東から撮影）
（町政施行50周年記念 『あすへの飛翔』から）



写真11 幼稚園建設直前の様子（東から撮影）
（市教委所蔵写真）

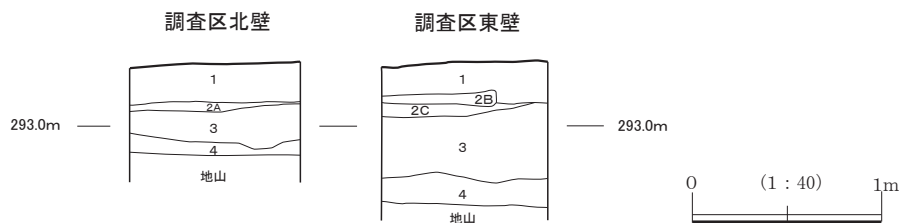
領志麻莊として機能していたことは確実である。火災に遭っているため詳細については不明な点も多いが、本遺跡や周辺地域の開発史を考える上でも重要な神社である。

第3章 遺構と遺物

検出された以降は以下のとおりである。円形周溝2基、竪穴建物（住居）跡1軒、竪穴状遺構1基、廃棄土坑1基、土坑2基（内、竪穴建物内1基）、落込み3基、石組2基、ピット群である。部分的にカクランの影響下にあるが、遺構は比較的良好に残存していた。遺構時期については凡例にも記してあるとおり、『山梨県史 資料編2 原子・古代2』『第2章 山梨県の考古学編年』をもとにしている。また、約50年来園庭として使用されていた部分は、歴代の園児たちが元気よく園庭で遊びまわったせい、表土直下は非常に硬くしまり、移植ゴテでの掘削に苦勞をした。

第1節 基本層序

層序は下記のとおりであるが、調査区北壁と東壁で地山検出面の高さが異なるのは、東側に傾斜しているためである。今次調査区における層序の特徴は、荒川扇状地の遺跡を調査すると必ず検出される耕作土（旧水田面）と床土が検出されなかったことである。なお、調査区の東に隣接する場所（現在は保育園施設）を、本事業に伴い試掘調査した際は、現地表面から約75cm下で旧耕作土と床土を検出している。このことから、水田として積極的に利用する以前から、この地が何らかの理由で水田化されなかったことを示唆している。



基本層序	土層名	色番号	説 明
1層	盛土層	—	
2A層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物を含む層 少量の焼土が混じる 粘性あり しまり強い
2B層	暗褐色土	10YR3/3	粘性あり しまり強い 炭化物を含み1mm大の白色粒子を少量含む
2C層	褐色土	7.5YR4/3	粘性あり しまり強い 焼土を多量に含む 炭化物を含む 1mm大の白色粒子を少量含む
3層	暗褐色土	10YR3/3	粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を含み5mm大の小礫を微量に含む
4層	—	—	3層と地山を含む層 粘性あり しまり強い
地山	にぶい黄褐色土	10YR4/3	粘性あり しまり強い 雲母を含む 細粒砂

第6図 基本土層図

第2節 遺構と遺物

1. 円形周溝

1号円形周溝（遺構：第7図、遺物：第21図-1～10、第22図-11～14）

形状・規模 調査区北西隅で検出。遺構は調査区外へと伸長するため、全体の規模は不明である。溝の検出規模は長軸10.2m、溝の幅は1m～1.4m、遺構の深さは最大約30cmである。溝調査区の北壁・東壁およびカクランに溝が切られる部分は、溝の立ち上がりがやや不明瞭である。溝が円形を呈していると仮定した場合、推定直径は約10.2mとなる。

遺物

【第21図-1～9】

遺物は主に溝の検出面および上層から出土した。1は近世に属する灯明皿の口縁部で美濃系の陶器。検出面から出土した。2は甑の底部で、底からの立ち上がりややゆるやかである。内外面にヘラ削りを施し、内面は横位ハケ目を中心となる。孔は径3.8cm。3も甑の底部、外面は横位ヘラ削りと縦位ハケ目、その後に縦位のミガキをわずかに施す。内面のミガキは縦位・斜位を中心に横位にも施し、外面に比べて丁寧なミガキである。図示していないが、内面には種子圧痕らしき小孔がある。4は甕の口辺部、外面に縦位ハケ目、内面は横位ハケ目を施す。5は甑の底部、内外面ともハケ目後にヘラナデを施している。甑の2・3・5とも6世紀末に属すると思われる。6はS字口縁の台付甕で、肩部に縦走するハケ目がみられることから4世紀半ば頃に属するだろう。7・8は甕の底部で、被熱の影響か全体的にもろく、小破片を接合してようやく形となった。7は6世紀前半に属するか。8は外反して立ち上がるため、球胴形の甕と思われる。9は甕の胴部上半から口辺部である。器面調整が4と同一であり、同時期のものであろう。

【第22図-11～14】

11は直径20cmを超すやや大きめの甕の口辺部で、器形は球胴甕だろう。内外面とも不明瞭なヘラナデを施している。12は他の甕に比べ頸部から口唇部にかけての屈曲が弱く、甑の可能性もある。外面は縦位ハケ目、内面は横位ハケ目を施す。13は甕の胴部以下で、輪積み痕が明瞭である。外面はハケ目後にヘラナデ、底部は部分的にヘラ削りを施す。内面はハケ目後にヘラナデ。14は黒曜石製の石鏃。

遺構時期 1号堅穴状遺構との切り合い関係、円形周溝という形状を考慮し、築造は古墳時代前期（4世紀半ば頃）までさかのぼるか。

調査所見 表土剥ぎの段階から遺物が多量に出土し、それらは3・4・7・8・10・11として載せた。被熱の影響か、もろく小破片であることが共通する。溝の下層から出土したS字状口縁台付甕の小破片（6）が1点出土していることから、遺構の原初は古墳時代初頭にさかのぼる可能性はあるものの、小破片1点のみでは流れ込みの可能性も否定できず、時期の確定は困難である。そのため、甲府盆地では古墳時代後期に円形周溝墓は消滅すること、そして後述する1号堅穴状遺構との切り合い関係から、遺構築造時期は4世紀半ば頃とした。ただし、主要遺物は古墳時代後期（6世紀後半から7世紀初頭）の遺物である。なお、地元の方（松尾神社関係者）の話として、神社移転前は本遺構と1号堅穴状遺構が検出された付近に本殿が鎮座していたとのこと。

2号円形周溝（遺構：第8図～第10図、遺物：第22図-15～23、第23図-24～第29図-92）

形状・規模 調査区中央から南にかけて検出。検出した規模は東西20.8m（EPA～EPA'）、南北約22m。周溝内側の直径は約15.7m。溝の深さは40cm～70cm前後、溝幅は3m前後である。溝の上層から下層最上層にかけて円礫が土器と共に出土した。

遺物 図化遺物は78点。遺物は溝の上層（検出面から溝の中層付近まで）と下層（中層付近から底まで）に分類してまとめた。上層出土遺物は15～62、下層出土遺物は63～88、遺構一括出土遺物は89～92である。出土遺物の年代は、古墳時代後期から終末期にかけての

遺物が主である。

上層出土遺物

【第22図 -15 ～ 23】

15・16は土師質土器の皿。16は煤痕が明瞭に付着しており、灯明皿であろう。底部は回転糸切り後、中心部分を回転ヘラ削り。17は脚高高台皿、内外面に横位ナデを施す。15～17は11世紀前半の土師質土器で、溝の検出面から出土した。18～23は全て坏。18は内外面に赤彩を施し、底部外面はやや丸みを帯びながら立ち上がる。外面口辺部に横位ナデ、内面に横位ミガキを施す。割れ口は摩耗している。口辺部は稜からほぼ垂直に立ち上がる。19の坏は、外面底部にヘラ削り、口辺部は横位のミガキを施す。内面の横位ミガキは摩耗しているため判別しにくい。割れ口も摩耗している。口辺部はやや外反する。また、図面上に描画していないが、うっすらと内外面に黒彩された痕跡が見られる。

20は内外面に黒彩を施し、内外面に丁寧な横位ミガキを施す。内面には×印状の線刻がある。底部は平底に近く、口辺部は底部から直接立ち上がっているかのように見える。平面図上の出土位置が周溝から外れているが、検出面では周溝上と認識したため、本遺構の出土遺物としている。21の坏は、内外面に不明瞭なハケ目のあとにミガキ、底部はヘラ削りを施す。底部からゆるやかに外反しながら立ち上がり、口辺部の稜は他の坏に比べ弱い。また、焼成が甘いのか被熱の影響なのかややもろい。22はほとんど摩耗しているが黒彩された痕跡が見える坏。外面口辺部に横位ミガキ、底部のヘラ削りを施す。19と同時期の坏であろう。23は内外面に赤彩した坏。外面口辺部に横ナデ、底部ヘラ削りを施す。内面はミガキとナデの痕跡が見える。口辺部の稜が明確である。

【第23図 -24 ～ 38】

24の坏は外面に赤彩、底部ヘラ削り、口辺部に横ナデを施す。内面は黒彩を施し、わずかに横位ミガキが看取できる。底部外面はやや丸底で、口辺部は垂直に立ち上がる。25の坏は外面底部にヘラ削り、体部下半から口縁部にかけて横位ミガキを施す。赤彩はヘラ削りより上に塗布されている。内面は赤彩と横位ミガキ。器厚は底と口縁部でかなり異なる。口辺部はやや外反して立ち上がる。26はやや赤彩がやや摩耗している坏。内外面に横位ミガキを施す。底部は平底に近く、弱く外反しながら立ち上がる。外面底部にヘラ削りの工具痕が複数ある。27は内外面に赤彩を施した坏。外面体部に横位ヘラ削り、内面は不規則なミガキを施す。器底から稜までは同様の器厚で立ち上がり、稜から口縁部はやや外反して立ち上がる。

28は底部が扁平で口縁部にかけて外反する坏。外面体部に横位ヘラ削りが認められる。上層から出土した他の坏に比べ、第21図-21と同様に焼成が弱いのかややもろい。29は内外面に摩耗した黒彩が見られる坏。外面底部はヘラ削り、体部は横位ヘラナデを施す。内面は摩耗しているがミガキ後に×印状の線刻を施している。底部は平底で外反しながら立ち上がる。30は高坏で、一部残存する坏部に黒彩が施されている。脚部は寸胴な棒状を呈し、裾部にいたって広がる。脚部外面には横位のヘラ削りと横位の工具痕がいくつか見られ、裾部は内外面とも横位ナデを施す。

31は高坏の坏部。内外面に丁寧な横位ミガキを施し、大きな坏身は稜を持つ。時期は4世紀半ば頃であろう。32は多孔の甗の底部小破片。小破片であるため孔の詳細は不明だが、少なくとも4か所の孔が確認できる。33の甗底部は検出面から出土した。外面にヘラ削り、内面にハケ目を施す。底部には径2mm大の孔が9か所、それ以外の孔が12か所ある。32・33の底部には木葉痕が確認できる。この2点を底部からの立ち上がりだけで時期を判断すると古墳時代中期中葉（5世紀後半）頃に属するだろうか。34（検出面から出土）・35は、32・33と比べるとやや大型の甗で、どちらも径2cm大の孔が1か所穿孔されている。34の外面はミガキ、内面にはハケ目後に指ナデを施す。35の外面は縦位ヘラ削り、内面は斜位ヘラ削りを施す。34・35共に底部には明瞭な木葉痕が確認できる。

36の甗は径約1cmの孔が穿たれ、胴部下半からの立ち上がりの勾配が垂直に近くなる。

外面はヘラナデ、内面はハケ目を施す。時期は5世紀後半から6世紀初頭に属するか。37は甑の把手と体部の一部である。一部ではあるが、内外面ともヘラ削り後に丁寧なミガキを施している。38はほぼ完形の甑で、溝の上層から臥位で出土した。外面は体部上半に縦位ヘラ削りを施したのち、横位ヘラ削りを施す。内面は縦位を中心としたミガキがあり、一部工具痕と思われる痕跡も看取できる。口辺部は内外面とも横ナデを施している。底部孔の径は3.4cm。

【第24図 -39 ～ 47】

39は甑としたが、口辺部の外反が弱い甕の可能性もある。外面は全体に縦位のハケ目を施し、下半には縦位ヘラ削りを施している。内面は横位ハケ目のあと、縦位に細長いミガキを施している。40の甑は内外面に丁寧なミガキが施され、把手も残存する。外面の一部に、ミガキ前に施したハケ目を確認できる。41・42は木葉痕のある甕の底部。41は底部が高台状を呈して内側に屈曲したあとと立ち上がる。43（検出面から出土）・44はいわゆる大廓系の複合口縁壺の口縁部で4世紀初頭に属する。43の外面はハケ目後に棒状浮文を貼付し、3条残存している。内面は黒色加工後にミガキを施しているが、ほとんど摩耗している。44も外面ハケ目後に棒状浮文を貼付しており、4条が残存している。内面は横位ハケ目を施す。43の胎土は全体的ににぶい橙色で、43は白色系の胎土である。

45はS字状口縁台付甕の口縁部。口縁部に刺突文がないが、肩部に横走するハケ目の有無は、この破片から判断するのは難しい。4世紀半ばから5世紀前半に属するだろう。46は有段口縁を持つ壺。外面口辺部に横位ナデで施した沈線状の線が一周し、内面には指頭痕が確認できる。形状から乱雑に判断すると、4世紀代の北陸地方や中国地方に系譜が求められるか。47は口縁部がわずかに外反する埴。外面は体部上半に縦位ヘラ削りを施したのち、下半は横位ヘラ削りを施す。内面は指頭痕が見られ、輪積み痕も明瞭である。口辺部は内外面ともに横位ナデを施す。

【第25図 -48 ～ 57】

48・49は球胴形の甕の口辺部と底部で、どちらも5世紀半ばから後半に属すると考えられる。48は外面頸部以下にハケ目がみられ、内面にはハケ目後に横位ナデを施す。49の外面底部にはわずかに煤痕が認められるほか、内外面とも調整はハケ目、ヘラナデ、指頭痕が確認できる。50は内外面のハケ目が明瞭に認められる長胴甕。底部には木葉痕あり。51は内外面のヘラナデが明瞭な長胴甕。50に比べ、体部中央付近の膨らみが強いので、6世紀後半代に帰属するだろう。52・53は集合沈線文を施した、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器。54は検出面から出土した小型手捏ね土器で、形状から判断すると時期は古墳時代後期に属するか。55は外面に赤彩と横位ミガキを施し、内面は黒彩を施したと思われる。器形は小型の埴に似た土器である。56は外面に赤彩とミガキ、内面は口辺部のみに赤彩を施した臙状の小型丸底土器。自立はするが安定しない。55・56は小型ではあるが丁寧な印象を持つ作りである。日常品とは考えにくく供献用の小型土器であろう。57は須恵器の小型臙の胴部破片。円孔部は推定1.35cm。頸部が垂直に近い形で立ち上がったのちに外反するだろう。時期は陶邑編年のⅡ段階6形式前後と思われる、7世紀前半に帰属するか。

【第26図 -58 ～ 62】

58は須恵器小型臙の口頸部で、刺突文が施されている。59は完形に近い須恵器蓋で、外面上部は回転ヘラ削り痕が認められる。時期は7世紀初頭、陶邑編年のⅡ段階5形式前後と思われる。60は須恵器の脚（高台）付小型臙で検出面から出土した。体部中位に最大径を有し、円孔は体部上半に位置し、刺突文が円孔を中心に体部を一周する。時期は7世紀前半、陶邑編年のⅡ段階6形式前後であろう。61は灰釉陶器の長頸壺と思われる。高台は貼付高台。雑駁ではあるが、時期は10世紀前半から11世紀前半だろう。62は検出面のカクランから出土した丸瓦（男瓦）破片。凸面の調整は横位ナデ、凹面は布目痕が明瞭に観察できる。下半にある布目の間隔が広い部分は、布が伸びてしまっている部分である。拓本には表れていないが、模骨痕も存在する。また、破片から玉縁の有無は不明である。

下層出土遺物

【第26図 -63 ～ 69】

63は底部が平底に近い坏で、体部に稜は見受けられない。器面調整は横位ナデが中心である。64は内面に黒彩が施された坏。内外面にミガキ、口辺部に横位ナデを施す。底面から婉曲しながら立ち上がり、口辺部はほぼ垂直を呈する。また、底部だけが肥厚している。65の坏は、外面は稜より上半に赤彩を施し、内面は赤彩を施すも底面は摩耗している。口辺部は外反して立ち上がる。66は第22図-27と器形が近似している坏。外面に赤彩、体部下半にヘラ削りを施し、内面は黒彩、口辺部には若干のハケ目調整痕が確認できる。全体が肥厚しており、稜は有段とも言えるぐらいに明確。第26図-80と隣接して出土した。67底面は内外面に赤彩とミガキを施した坏。外面底部はヘラ削りを施し、外反しながら立ち上がる。68は底面から口辺部まで円弧を描きながら立ち上がる坏。口唇部もわずかに内湾する。外面に赤彩、内面に黒彩とミガキを施す。上層・下層からそれぞれ出土した土器片が接合した。69は内外面に赤彩が施された坏。底部はほとんど丸味を帯びない。外面体部下半にヘラ削り痕あり。

【第27図 -70 ～ 81】

70は内外面赤彩の坏。外面体部下半はヘラ削りとミガキ、口辺部には横位ナデを施し、内面はミガキを施す。底面は丸底に近く、口辺部まで外反しながら立ち上がる。71は上層と下層の中間付近、礫と礫の間からやや傾いた臥位で出土した高坏。外面に縦位ヘラ削り痕が認められる。内外面の脚部と口辺部にヘラ調整を施す。72は内外面に赤彩が施された高坏。E P Dのベルト内下層から出土した。脚部に縦位ヘラ削り痕、内面底部にミガキが看取できる。脚部はラッパ状に開く。73の高坏は、脚部に径1cmほどの穿孔が3か所ある。外面はハケ目後に、穿孔より上半はナデ調整を行っている。脚部の棒状化は顕著ではないが穿孔があるため、時期は4世紀後半に属すると思われる。74は柱状部がほとんど見られない高坏。内外面ともヘラナデで器面調整をした痕跡がある。焼成もやや甘い。帰属時期は6世紀前半だろう。

75は外面を赤彩した壺。口辺部は外反し、内外面にミガキを施す。時期は5世紀半ばと考えられる。76は甗の把手。77は小型手捏ね土器。外面体部に指頭痕があり、内面はヘラ調整をした痕跡が認められる。帰属時期は古墳時代中期（5世紀前葉から6世紀前葉）だろう。78は壺のミニチュア土器。外面体部ハケ目後にヘラで丁寧に調整をしてある。79は外面に櫛状工具による疑似縄目を施した弥生土器の壺小破片。時期は弥生時代後期後半、東遠江系（菊川式）の土器だろう。80は台付甕の脚部。外面にハケ目を施す。81は甕の体部下半。内外面にヘラナデを施し、指頭痕も看取できる。

【第28図 -82 ～ 86】

82は集合沈線文を施した縄文土器。前期終末期に属するか。83は須恵器甕の頸部から口辺部。外面にヘラ描き斜文を施す。陶邑編年のⅡ形式4段階ないし5段階に属するか。84は須恵器直口壺の口辺部。時期は83と同様と思われる。82は須恵器蓋。陶邑編年Ⅱ形式6段階に属するだろうか。86は溝底から約15cm上層から出土した大型の壺で、やや南側へ傾くものの、ほぼ正位で出土した。台状の底部から立ち上がり、体部半ばに最大径（約46.5cm）が求められる。外面は斜位ヘラナデによる調整痕を施す。頸部から上は破片が1点だけ出土したのみであることから、人為的に打ち欠いた可能性も考えられる。器形から、天竜川水系の4世紀後半頃の土器にその出自を見いだせるか。周溝築造時に設置したものか、伝世品を設置したかは定かではない。

【第29図 -87・88】

87は甕、外面体部に縦位ハケ目、下半にヘラナデを施す。内面は横位ハケ目がわずかに確認できる。底部には木葉痕あり。溝底から約15cm上層より出土した。88は内外面のハケ目が明瞭な長胴甕で、小破片を接合したもの。胴部に最大径が求められる。

周溝一括出土遺物

【第29図 -89 ～ 92】

89は外面に赤彩、内面に黒彩を施した高坏。外面の器面調整はヘラ削りとミガキ、内面はミガキ後、見込み底部に△状の線刻が、目視で27ヵ所確認できる。90は高坏脚部。26図 - 72と同時期だろう。91は須恵器甕もしくは長頸壺の頸部。外面には波状文を施している。時期は6世紀代と考えられる。92はカクランから出土した丸瓦（男瓦）破片。胎土や凸部横位ナデ、凹部布目痕が第26図 - 62と似る。

遺構時期 溝底から出土した第28図 - 86を根拠とすれば、4世紀後半頃に円形周溝を築造したと考えることが自然だろう。しかし、出土遺物は上層出土遺物も下層出土遺物も古墳時代後期の遺物が圧倒的に主を占めるため、遺構時期は6世紀後半から7世紀初頭と考えられる。

調査所見 検出面はガラス破片や氷菓子（氷菓子）の容器、棧瓦などが出土する部分もあり、部分的にカクランによる影響を受けていたが、残存状況としてはかなり良好であった。調査区西壁から伸びる細長いカクランは、1号土坑に隣接したカクランへと続く。カクランの新旧は細長いカクランが新しく、1号土坑隣接のカクランの方が古い。溝からは、上層と下層の境界付近にかけて円礫が多数出土し、礫と礫の間からも土器が出土した。その状況から、溝の中に土器と共に投棄されたと考えられる。また、その規模と形状から後期古墳の周溝である可能性も考えられるが、石室に関わる遺構が見つからず、古墳の周溝とはあえて明言しない。なお、市文化財保護審議委員の中込司郎氏によれば、松尾神社が現在地に遷座する前、本遺構が検出されたあたりは地表面が少しだけ盛り上がっているように見えたという。

2. 竪穴建物跡

1号竪穴建物跡（遺構：第11図・第12図、遺物：第30図 -93 ～ 101）

形状・規模 2号円形周溝の内側で検出。南北約5m、東西約4.7m。北壁は削平による破壊、南側がカクランによって破壊されているが、おおむね全体を調査できた。周溝は全周しないものの、深さ約10cm程度である。西壁寄りに設けられた炉は枕石を伴い、浅く掘り込まれていた。焼土は炉から離れたPit- 1付近で検出した。床面は地山が極細粒砂であるためか、硬化面は確認できなかった。Pit- 1、Pit- 2、Pit- 4、Pit- 5が柱穴であろう。全体が浅く、深さは10cm程度である。2号土坑は長軸約60cm、短軸約50cm、最大深度約40cm。竪穴建物内のピットよりも、深度が深く、土層堆積状況も明確であった。

遺物 遺構は浅いものの、時期の特定に非常に有効な遺物が出土した。93は高坏の坏身。外面に横位のミガキが施されている。94は複合口縁壺の口辺部。本遺構から出土した破片と、隣接する2号円形周溝の上層から出土した破片が接合した。調整痕はやや摩耗しているものの、頸部にハケ目、口縁部に横位ミガキが確認できる。95は櫛描波状文を持つ土器片。96は台付甕の脚部。外面にハケ目、内面はヘラ調整および指ナデを施す。脚部は内側に折り返しが認められる。97も台付甕の脚部。調整痕は96と同様。98・99はS字状口縁台付甕の口縁部。98は外面頸部に横走するハケ目が若干認められる。100は刻み口縁を持つ甕の破片。101は遺構内のカクランから出土した丸瓦（男瓦）。凸面に横位ナデ、凹面に布目痕が残る。推定内径は15cm程度。

遺構時期 出土遺物は少ないものの、96～99の出土遺物、および遺構の平面形態と規模から古墳時代初頭（4世紀半ば）に属するだろう。

調査所見 試掘調査時に本遺構のほとんどの範囲が検出された。いわゆる黄色い砂質土の地山に黒い覆土が伴っており、松ノ尾遺跡の中でも本遺跡の竪穴建物跡の検出状況としてはかなり易しい部類に入る。また、94の複合口縁壺が、本遺構出土の破片と2号円形周溝上層出土の破片が接合したことは、本遺構廃絶後に溝内に流れ込んだ、もしくは部分投棄されたと考えられる。このことから、2号円形周溝の築造時期は本遺構よりも新しいことは明確である。

3. 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構（遺構：第13図、遺物：第30図-102～104、第31図-105～118）

形状・規模 調査区北西隅に位置し、1号円形周溝に切られる。検出規模は南北約5.5m、東西約7mで、調査区外に伸長するため全体の規模は不明である。深さは最大で約30cmだが、北西へ向かって浅くなる傾向がある。隣接するケヤキへの影響を考慮し、樹根が現れた部分の掘削は行わなかった。

遺物 第30図-102～104は土師質土器小皿。102は正位で検出面から出土し、煤痕らしき痕跡が口唇部に一部確認できる。103も検出面から出土した。104は上層から出土している。第31図-105は土師器坏の底部で、外面に横位ミガキ、内面は黒彩を施したのちに全体にミガキが確認できる。底部は糸切痕をヘラ削りで一部のみ粗雑に消している。7世紀代の佐久地域の影響を受けた土器だろうか。106・107は土師質土器の脚高高台。106は脚部のみだが、上面に坏部の糸切痕が確認できる。107は埴に該当し、坏部内面に墨書かどうかは判然としないが、黒色痕が認められる。108は灰釉陶器の坏で、内面全体に釉薬を塗布する。109は土師質土器の脚高高台坏。口縁部に一部煤痕が認められる。

110・111は土師質土器の脚高高台埴。111は検出面から出土した。112は検出面下10cmから出土した、脚部下半欠損の小型器台。内外面に赤彩およびミガキを施す。円孔は推定1cm程度。113は灰釉陶器の甕。外面に施釉、内面は頸部に施釉あり。114は内外面に赤彩と丁寧なミガキを施した小型台付甕。南壁付近、検出面より約10cm下層から臥位で出土。出土時、脚部は欠損していた。115～118は下層から出土した遺物。115はS字状口縁の台付甕口辺部。外面頸部から口縁部には刺突文、頸部以下は斜位ハケ目後に横走するハケ目が確認できる。内面はヘラナデを施す。116・117は沈線文を施す縄文前期終末期ないし中期初頭に属する縄文土器口縁部。118は黒曜石製の石鏃。

土師質土器および灰釉陶器は遺構の検出面および上層から出土しており、おおむね11世紀代に属する。それ以外は、112の小型器台は古墳時代前期の4世紀後半、114の小型台付甕は弥生時代後期末葉、115は古墳時代初頭の4世紀初頭前後に属すると思われる。

遺構時期 1号円形周溝に切られることから、古墳時代前期（4世紀半ば）頃以前に築造されたと考えられる。

調査所見 上層からは、11世紀代に属する土器以外に、4世紀代の小型器台（112）や弥生時代後期末葉の小型台付甕（114）も出土している。4世紀半ば以前の出土遺物がほとんどなく、1号円形周溝との新旧関係と下層出土のS字甕破片（115）から遺構時期を推測したが、遺構時期の決定打には欠けている。加えて遺構の平面形態も不整形で、遺構の築造時期については混然としている。

4. 土坑

廃棄土坑（遺構：第14図、遺物：第32図-119～122）

形状・規模 調査区北東隅で検出。長軸・短軸共に約105cmで、ほぼ円形を呈している。深さは最大約35cmを測る。

遺物 いずれの遺物も完形品ではない。119は内外面にハケ目が施された台付甕。キザミ口縁をもつ。外面のハケ目は、脚部は縦位、体部は横位、頸部は横位・縦位のハケ目が認められる。内面脚部に横位のハケ目、口辺部は横位ハケ目を施し、指頭痕も認められる。120は小型甕で、外面に縦位ハケ目、内面は横位のミガキが施されている。121はやや大型の高坏。内外面に赤彩およびミガキが施されている。内面脚部には横位ハケ目が認められる。割れ口がかなり摩耗している。122は刻み口縁を持つ甕で、体部中央に最大径を持つ。外面体部に斜位ハケ目、頸部に縦位ハケ目を施す。内面のハケ目は体部下半と口辺部が中心で、体部上半はヘラ調整および指頭痕が確認できる。

遺構時期 出土遺物から弥生時代後期末葉と思われる。

調査所見 土坑に土器と礫を投棄したような状況が認められたため廃棄土坑とした。検出面から中

層付近に土器と礫が集中して出土している。土器の様相は弥生時代後期末葉で、1号竪穴状遺構出土の小型台付甕（第31図-114）と同時期であろう。特に高坏（第32図-121）は遠江系の影響が顕著に見受けられる。

1号土坑（遺構：第15図）

形状・規模 1号竪穴建物の東に位置する。長軸約138cm、短軸約128cmで隅丸方形を呈し、深さは約50cmを測る。断面形状は底からほぼ垂直に立ち上がったのち、中層付近から外反した形状である。

遺物 出土遺物なし

遺構時期 不明

調査所見 検出面はにぶい黄褐色土の細粒砂（1層）で硬くしまっていた。

2号土坑（1号竪穴建物跡の遺構図を参照）

5. 落込み

1号落込み（遺構：第15図、遺物：第32図-123～125、第33図-126～128）

形状・規模 調査区北端で検出。カクランに部分的に壊されているが、長軸約2m15cm（SPA - SPA'）、短軸約1m50cm（EPA - EPA'）。深さは約20cm、最大で約40cmを測る。

遺物 第32図-123～125、第33図-126・127は土師質土器。123は皿、底部のヘラ削り痕が明瞭。一段低い円形状部分の下層から出土した。124・125、第32図-126は脚高高台小皿。内面に渦巻き沈線状のハケ目が認められる。124は123と同様の下層から出土した。127は脚高高台坏ないし碗の脚部。128は須恵器の破片で、3段の刺突文が確認できる。器種は小型甕か。

遺構時期 出土遺物から平安時代中期（11世紀前半）と考えられる。

調査所見 平面図上で円形の土坑と切り合うような形状で表現されているが、これは検出面では認識できなかった土坑の可能性がある。この土坑らしき部分から出土した皿（123）は11世紀後半に属する器形をしているため、1号落込みを切って造られた土坑であった可能性が高い。

2号落込み（遺構：第16図、遺物：第33図-129～132）

形状・規模 隅丸長方形を呈し、底からゆるやかに立ち上がる。長軸約3m45cm（EPA - EPA'）、短軸約1m80cm、深さは約35cmを測る。Pit A - 5・6、Pit B - 15に切られる。

遺物 129～131は土師器坏。129は丸底で外反しながら口縁部まで立ち上がる。外面底部にヘラ削り痕と思しき調整痕が確認できる。内外面の口辺部はナデ調整を施す。割れ口の摩耗が著しい。130は平底で外反しながら立ち上がる。外面体部下半ヘラ削り、内面はナデ調整を施す。131は外反して立ち上がり、内湾する坏。外面は横位ヘラ削り後にナデ調整。内面は黒彩を施す。割れ口の摩耗が著しい。遺構の底から約10cm上層で出土した。132は弥生時代後期の土器、口辺部破片。折り返し口縁の外面には1cm大の浮文、内面に結節縄文を施す。また、推定径3mmの円孔が2か所認められる。

遺構時期 出土遺物から古墳時代後期（7世紀初頭）と考えられる。

調査所見 ピット群が検出された面よりも、10cmから20cmほど下層で検出した。遺構の性格は不明である。

3号落込み（遺構：第16図、遺物：第33図-133）

形状・規模 やや不整形な隅丸長方形を呈する。長軸は約2m90cm（EPA - EPA'）、短軸は1.5m前後、深さは約50cmである。

遺物 133は土師器小型壺で、上層から出土した。内外面ともヘラ削りで調整を行っている。

遺構時期 古墳時代中期（5世紀半ば）であろう。
調査所見 2号落込みと同様、検出面はピット群が検出された面よりも、10cmから20cmほど下層で検出。同様に遺構の性格は不明。

6. 石組み

1号石組み（遺構：第17図、遺物：第33図-134～138、第34図-139）

形状・規模 2号円形周溝北側の溝端で、1m四方にまとまって礫が検出された。
遺物 第33図-134～138は土師質土器である。134は小皿、底部糸切り痕にはヘラ整形の痕跡が認められる。135は脚高高台付の小皿。内面にはロクロ回転中に指の腹でナデを施したような渦巻状の痕跡あり。136の高台付皿は、内面に線状のミガキを丁寧に施したあと、花卉状の暗文が施されている。器形から考えると、灰釉陶器の模倣であろう。137は脚高高台皿。内面には135と同様の渦状の調整が認められる。138は内面に煤が付着した壺。第34図-139は羽釜破片。

遺構時期 出土遺物から平安時代中期～後期（11世紀後半）とした。

調査所見 遺物は礫と礫の間から主に出土した。当初は竪穴建物跡のカマドではないかと考え、石組み周辺で硬化面や壁面の立ち上がりがないかを詳細に探したが検出できなかった。そのため、本遺構は石組み遺構とした。11世紀後半の遺物が主である。

2号石組み（遺構：第17図、遺物：第34図-140～141）

形状・規模 70cm四方にまとまって礫が検出された。

遺物 140は土師質土器の脚高高台付皿。セクション図中の土器が140にあたる。141は土師質土器の脚高高台付壺。

遺構時期 出土遺物から11世紀後半と考えられる。

調査所見 1号石組みと同様、カマドの可能性を考えたが、竪穴建物跡に付属するカマドではないと判断した。石組みに囲まれた内部は、浅く掘り込みがあったが、火床面は検出されなかった。覆土は炭化物を少量含むのみである。

7. ピット群（遺構：第18図、第19図・第1表、第2表）

ピット群は西から東に緩やかに傾斜した位置に立地しており、覆土や形態から2種類に分類して記録した。Pit Aは深度が深く、覆土に粘性があり、しまりが強いもの。Pit Bは深度が比較的浅く、粘性があり、しまりが非常に強いものを基本として記録した。Pit Cも分類したが、Pit Bと大差がないため、Pit Bの一覧に掲載してある。なお、掘立柱建物跡は明確に検出できなかった。第19図上段のエレベーション図は、掘立柱建物跡と推測されるピット群である。その他、土層堆積状況が他の検出されたピットよりも特異なものにかぎり、セクション図を掲載した。

8. 遺構外出土遺物（遺物：第34図-142～148、第35図-149～157、第36図-158～169、第37図-170～174）

【第34図-142～148】

142はかわらけの灯明皿。2号円形周溝の遺構検出面より10cmほど上層の遺物包含層から出土した。口縁部にわずかに煤痕が認められる。底部は静止糸切痕あり。土器の年代は17世紀後半から18世紀前半か。なお、土器の出土位置からさらに10cm上層は、ビニール紐や近代の棧瓦などが出土する高さである。143は土師質土器小皿で、1号円形周溝の東、西から東へと浅くくぼんだ黒色土中から出土。底部は回転糸切痕が認められる。時期は11世紀後半に属する。144は灯明皿で、見込み部にはトチン痕が認められる。江戸時代後期の志戸呂窯産であろう。145は貼付高台の灰釉陶器壺。高台は外反する。10世紀前半代に属するか。146は小型の甗（ミニチュア土器）で、正位で出土した。底部の円孔は径8mm。全体が丁寧に作られている印象を受ける。出土地点は西から東へと傾く地形で、落

込み状の覆土と地山の境界であった。時期は形状から古墳時代後期に属するか。147はS字口縁台付甕の口辺部。外面頸部から肩部にかけて斜位ハケ目、肩部からはハケ目が薄く交差する。口縁部内外面とも横位ナデ調整、体部内外面とも指頭痕が明瞭である。肩部に横走するハケ目が認められないことから、時期は古墳時代前期（4世紀後半から5世紀前半）であろう。148は地山直上から出土した羽釜片。内外面にナデ調整痕がわずかに認められる。時期は11世紀代か。

【第35図 -149～157、第36図 -158～169、第37図 -170～174】

149は須恵器蓋の口辺部。150は土製紡錘車。151は周溝検出面付近から出土した円孔のある土製品。152は試掘坑②、地山検出面から出土した石製紡錘車。中心に径8.5mmの円孔あり。153は地山検出面から出土した石製紡錘車。154は地山検出面から出土した砥石。155・156は1号円形周溝東の黒色土中から出土した砥石。157は黒曜石製の石鏃。

第36図 -158～169は銭貨。遺構外や地山検出面のほか、カクランからも出土している。寛永通宝が主であるが、165は北宋銭の治平元寶、167は文久永寶、168は50銭硬貨。

第37図 -170～172は鉛玉で、やはり遺構外や地山検出面付近から出土している。173・174は、1号円形周溝の北側、調査区北西端のカクランから出土した矢穴を持つ石材。ガラス瓶などのゴミと一緒に埋められていた。調査区内のカクラン以外にも、地山にも多数の重機の爪痕が残っているため、神社が移る時に重機によって埋められたものであろう。矢穴は10cm程度で、矢穴と矢穴の間隔は15cm程度である。近代のものであろうか。なお、158～174の詳細については遺物観察表を参照のこと。

第4章 まとめ

今次調査で確認した遺構を列記すると、円形周溝2基、竪穴建物跡1軒、竪穴状遺構1基、廃棄土坑1基、土坑2基（竪穴建物内1基）、落込み3基、石組み2基、ピット96基（Pit A57基、Pit B・C39基）である。過去に得られた松ノ尾遺跡の調査成果とは異なる調査成果を得ることができ、市域の新たな歴史を解明することができた。順を追って記述する。

円形周溝について

今次調査の遺構で目をひくのは、2号円形周溝であろう。その検出規模（周溝外側の直径）は約22mで、周溝内側の直径は約15.7mである。周溝の大きさや出土遺物から「墳丘部が削平された円墳の周溝である可能性が高い」と考えたが、石室の痕跡を発見することができなかったため、遺構名は円形周溝としている。仮に2号円形周溝が上述のとおり古墳の周溝であった場合、周辺の同時期古墳（6世紀中葉～7世紀代）の大きさと比較すると次ページ表のとおりとなる。

単純に規模だけで比較した場合、2号円形周溝と直径が類似するものは大塚古墳、大庭遺跡無名墳、往生塚古墳が比較的近い。出土遺物からの比較は、大塚古墳と往生塚古墳は出土遺物が極端に少なく、遺物からの時期の推定が困難である。しかし、大庭遺跡無名墳（整理分析作業中）は、石室から土器の出土はほぼ認められないが、周溝からの出土遺物はおおむね6世紀末に属する須恵器が中心である。規模と出土遺物から簡易的に比較しただけであるが、2号円形周溝を古墳と仮定した場合、前述した3基の古墳と同時代の円墳の可能性が高い。

さらに、『国志』卷之四十六古跡部第九、「土屋氏ノ居址 島上条村」の項には、「^{すべりいし}（前略）^{すべりいし} 湊石塚は周回十六間、上に石を建つ、長さ九尺、横五尺、厚さ二尺なり。金石塚は周回十八間、建石の長さ一丈、横七尺、厚さ三尺。これを敲けば金声の余響あり。二基ともに石室の壊れたると見ゆ。碑類にはあらず。御正作と言う処に石室の存したるもあり、周回十七間許り。石室一基、境村舟塚（後略）」（句読点筆者）と、いくつか古墳と思われる記述がある。これらの古墳は、「現存しない、もしくは『国史』に記述のある名称で伝承されていない」ものであるが、2号円形周溝が検出された周辺に、江戸時代後期には古墳（石室）が存在していたことを知る事ができる記述である。記述からそれぞれの大きさを割り出す（円周÷ π ）

と、^{すべりいし} 湊石塚は直径約9.1m、金石塚は直径約10.3m、御正作の石室は直径約9.7mとなる。『国志』の記述から墳丘はほとんどが削られ石室が露出している状態と考えられ、上述の推定直径は石室の全長に比較的近いものだろう。なお、『国史』に墳丘形態に関する記述はないが、上述の石室を後期古墳の円墳の石室とした場合、周辺の大塚古墳などの墳丘直径と照らし合わせたうえで元々の墳丘直径を推測すると、直径16m前後の円墳であったと思われる。

近隣の同時代古墳

時期	古墳	墳丘直径	残存墳丘高	石室全長
6世紀前半～中葉	万寿森古墳（甲府市湯村）	約25m	約7m	14.2m
6世紀後半	加牟那塚古墳（甲府市千塚）	40～45m	推定7m	16.75m
6世紀後半～7世紀初頭	大塚古墳（島上条）	約16m	2～4.3m	8.8m
6世紀末～7世紀初頭	大庭遺跡無名墳（島上条）	約17m	-	約8m （確認範囲）
6世紀末～7世紀初頭	往生塚古墳（龍地）	約15m	約3.3m	7.5m
7世紀初頭	中秣塚古墳（竜王ほか）	約14m	復元墳丘高約2.3m	6.4m
6世紀末～7世紀初頭	二ッ塚1号墳（龍地・消滅）	約20m	約3m	9.1m
7世紀中葉	竜王2号墳（竜王新町・消滅）	約14m	約1.7m	5.75m

そして、大塚古墳・大庭遺跡無名墳・往生塚古墳の墳丘直径および石室全長と、『国志』に記述のある3つの塚の推定直径をふまえ、今次調査で検出した2号円形周溝を後期古墳の円墳だと仮定した場合、直径約15.7m、石室全長9m前後の円墳が松尾神社の旧境内に存在していたと考えられる。非常に雑駁な推測ではあるが、可能性として提示しておきたい。なお、3基の古墳と2号円形周溝との直線距離は、大塚古墳が約650m、大庭遺跡無名墳が約350m、往生塚古墳が約480mである。

調査区の土地利用について

前述のとおり、円墳が存在していた可能性がある今次調査区だが、ここで調査区の土地利用について、時系列に整理をしておく。まず、古墳時代初頭に1号竪穴建物跡・1号竪穴状遺構がつくられ、その後に2号円形周溝や1号円形周溝が築造される。2号円形周溝の帰属時期は6世紀後半から7世紀初頭の古墳時代後期としたが、溝底から4世紀後半（古墳時代前期）頃に属する大型の壺（第28図-86）が出土しているため、2号円形周溝の築造は古墳時代前期にまでさかのぼる可能性がある。その後、土師質土器が出土する1号落込みや石組みが11世紀前半頃に造られ、ほぼ時期を同じくしてピット群が造られたと思われる。また、調査区内では7世紀後半から10世紀後半にかけての遺構や遺物が確認されておらず、その間は人々の生活痕跡が不明である。第2章第3節でも触れたが、過去の調査結果から松ノ尾遺跡は6世紀後半から7世紀初頭の古墳時代後期・終末期（飛鳥時代）に最初の隆盛期を迎えており、9世紀から10世紀にかけての平安時代中期・後期の竪穴建物跡の検出数も多く、周辺では人々の活動は活発であったといえる。特に、第1次・第2次調査区ではそれが顕著にみられる。それらをふまえると、7世紀後半から10世紀後半にかけて、調査区内には人々の活動を制限する（させる）人工物や、利用制限をする意識があったと考えられるのではないかな。

ピット群について

ピット群は調査区北側に偏って検出された。検出面は2号落込み（古墳時代後期）および3号落込み（古墳時代中期）の検出面とは若干異なり、それらより10～15cm程度上層で検出している。このことから、ピット群はそれらの遺構よりも後代に造られたと考えられ、松尾神社の旧境内地という土地利用から、これらは柱穴と考えられるが明確な建物跡や年代を特定できるような遺物は検出できなかった。しかし、第2章第4節でも記述したとおり、12世紀後半には調査区周辺は松尾大社領志麻荘として機能していた（『鎌倉遺文』849号）ことは事実であり、この頃までに松尾神社が創建されていたことも十分考えられる。

明確な証左はないものの、ピット群は神社に関連する遺構であるととらえたい。

2号円形周溝と松尾神社の関係

古墳時代初頭以降は調査区内に竪穴建物が建設されておらず、古墳と仮定した2号円形周溝が造られている。後代、松尾大社を当地に勧請した際に墳丘が残存していたのかどうかは不明だが、古墳時代初頭以降は祭祀に関わる土地として開発に制限がかかっていたであろう。その理由として、今次調査区周辺は古墳時代・平安時代を通して大規模な集落が形成されていることが過去の調査で判明しており、それをふまえると今次調査区は開発対象地からは外されていたといえる。また、神社に関連する遺構ととらえたピット群の位置が調査区の北側に集中しているが、これは神社創建時に墳丘が残存していたために2号円形周溝の北側に建てられたためなのか、すでに墳丘は削平されていたが前代までの祭祀対象であった2号円形周溝を意識してのことなのか、神社を創建するにあたっての土地利用制限もうかがえる。ピット群の帰属時期は不明瞭ではあるものの、松尾神社は12世紀後半頃から昭和43年（1968）に幼稚園建設に伴って神社が隣地へ遷座されるまで、約770年間調査区内に鎮座していた可能性が高い。

繰り返しになるが、松ノ尾遺跡では古墳時代から平安時代を通して大規模な集落が形成される中、今次調査区は古墳時代初頭以降、開発対象から外れている。その理由として考えられることは、古墳の存在をにおわせる2号円形周溝や、神社に関連すると思われるピット群が検出されたことで、今次調査区は古くから祭祀に関わる土地として人々に意識され、長く開発の手が入らない「特別視」された土地であったと考えられる。以上のように、今次調査は周辺地域の歴史解明において、遺構や土地利用の面から松ノ尾遺跡の新たな知見を得られた調査であった。今後も鋭意調査研究をすすめたい。

【参考文献】

敷島町『敷島町誌』

山梨県『山梨県史』

甲斐市教育委員会『松ノ尾遺跡』各報告書

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真雄社 1995

大川 清ほか編『日本土器事典』雄山閣 1996

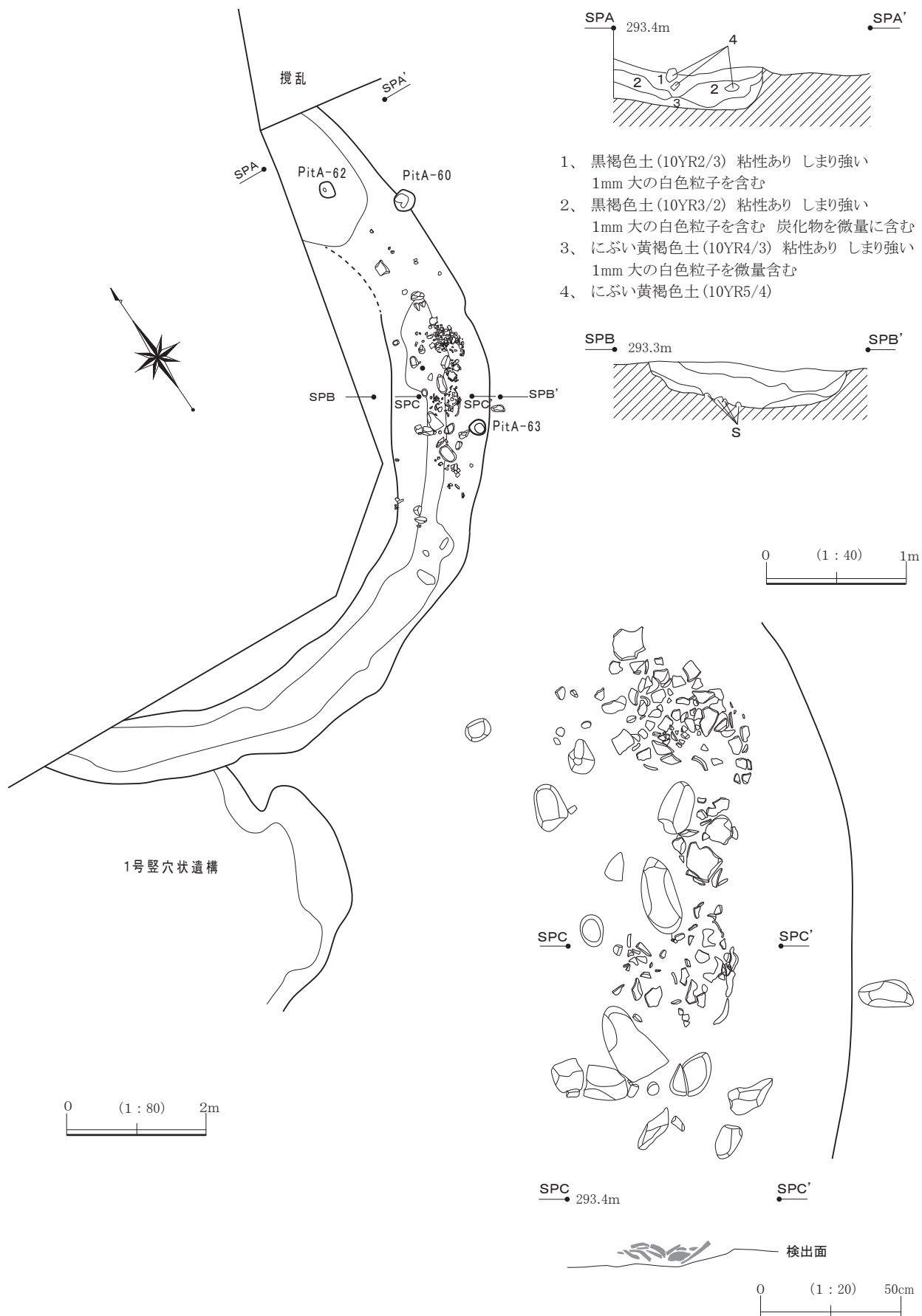
中村 浩『泉北丘陵に広がる須恵器窯 陶邑遺跡群』2013

東海土器研究会『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』2015

甲斐市教育委員会「大庭遺跡 現地説明会資料」 2015

一之瀬 敬一「甲府盆地の周溝墓／低墳丘墓」（山梨県立博物館・山梨県埋蔵文化財センター『研究紀要』33）2017

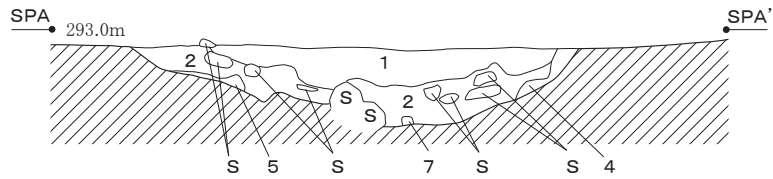
山梨県埋蔵文化財センター『輝け！やまなし古墳めぐりグランプリ』資料集 2020



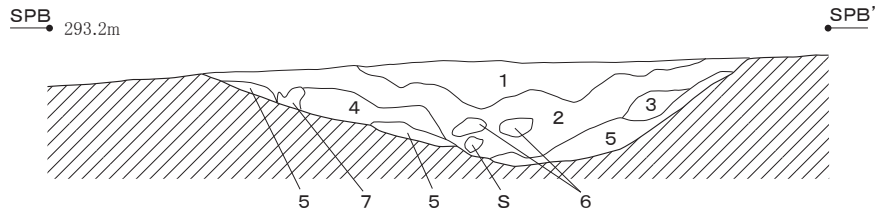
第7図 1号円形周溝



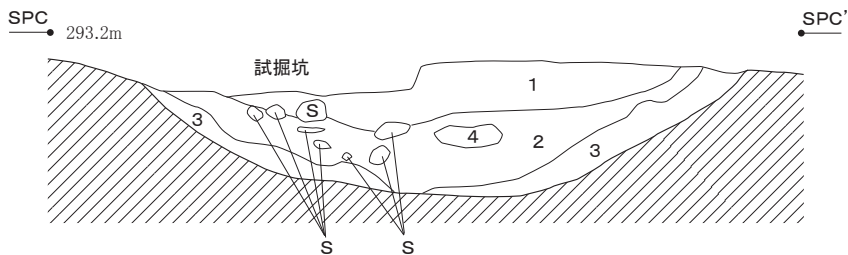
第8図 2号円形周溝①



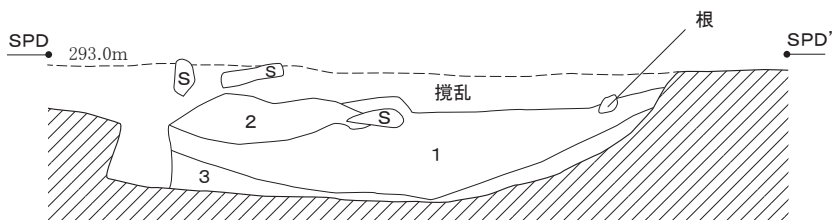
SPA の土説番号は SPB と同一



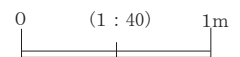
- 1、黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を含む
- 2、黒色土 (10YR2/1) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を含む
- 3、黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を含む
- 4、黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり しまり強い
- 5、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を少量含む 2層をまばらに含む
- 6、黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を少量含む
- 7、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり強い 4層が微量に混ざる 細粒砂



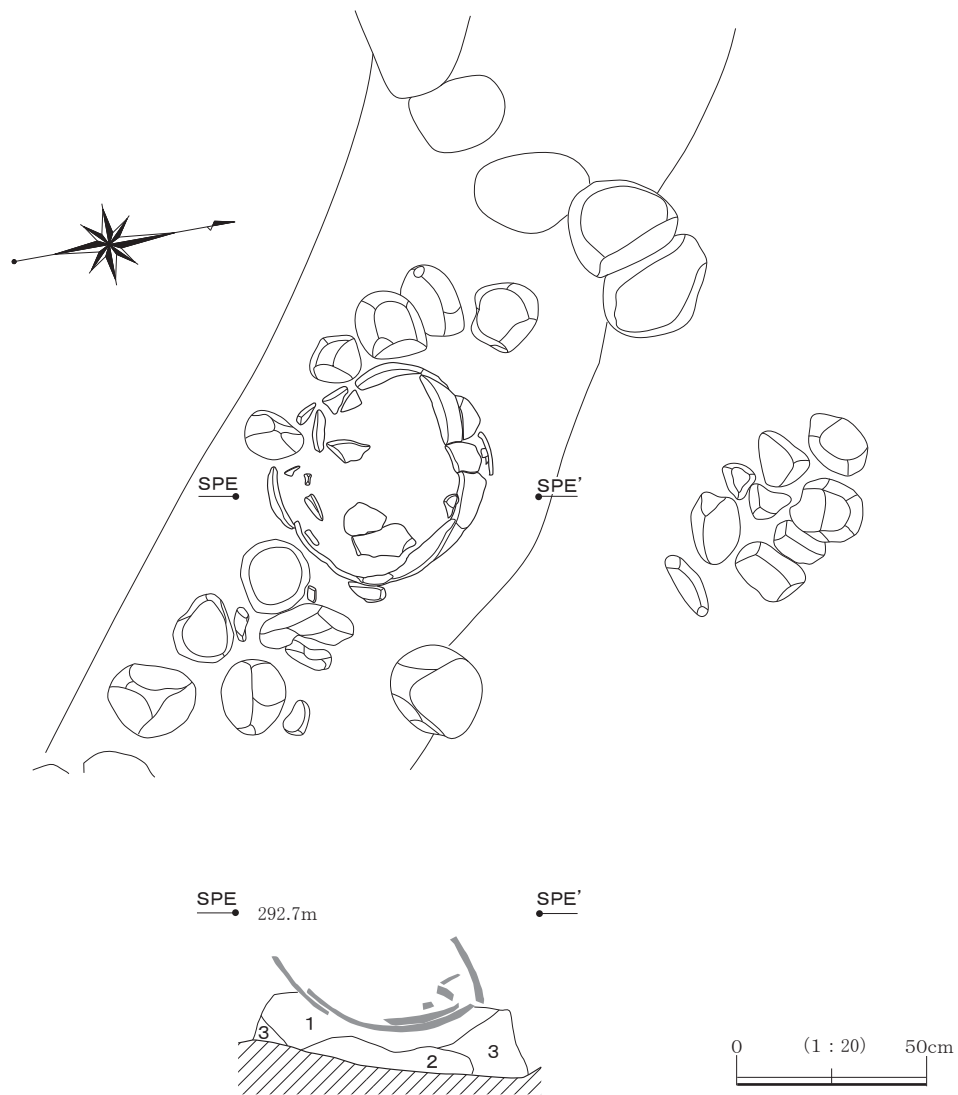
- 1、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を多量に含む
- 2、黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を含む 5mm 大の小礫を少量含む
- 3、暗褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり強い
- 4、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまりあり



- 1、黒色土 (10YR2/1) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子、5mm 大の小礫を含む
- 2、攪乱 地山の土と2層を少量含む
- 3、暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまり強い 地山をまばらに含む



第9図 2号円形周溝②



- 1、黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり しまりあり
- 2、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまりあり
- 3、1、2層を含む層 粘性あり しまりあり

第 10 図 2号円形周溝③

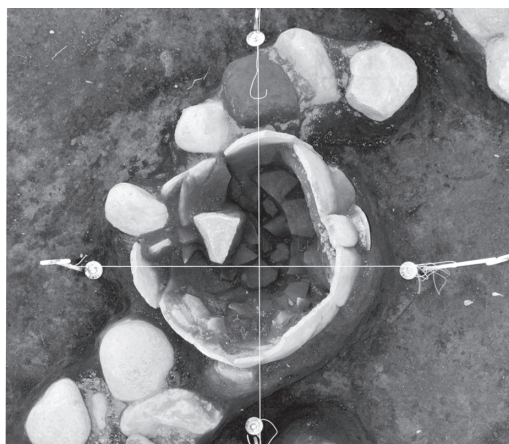
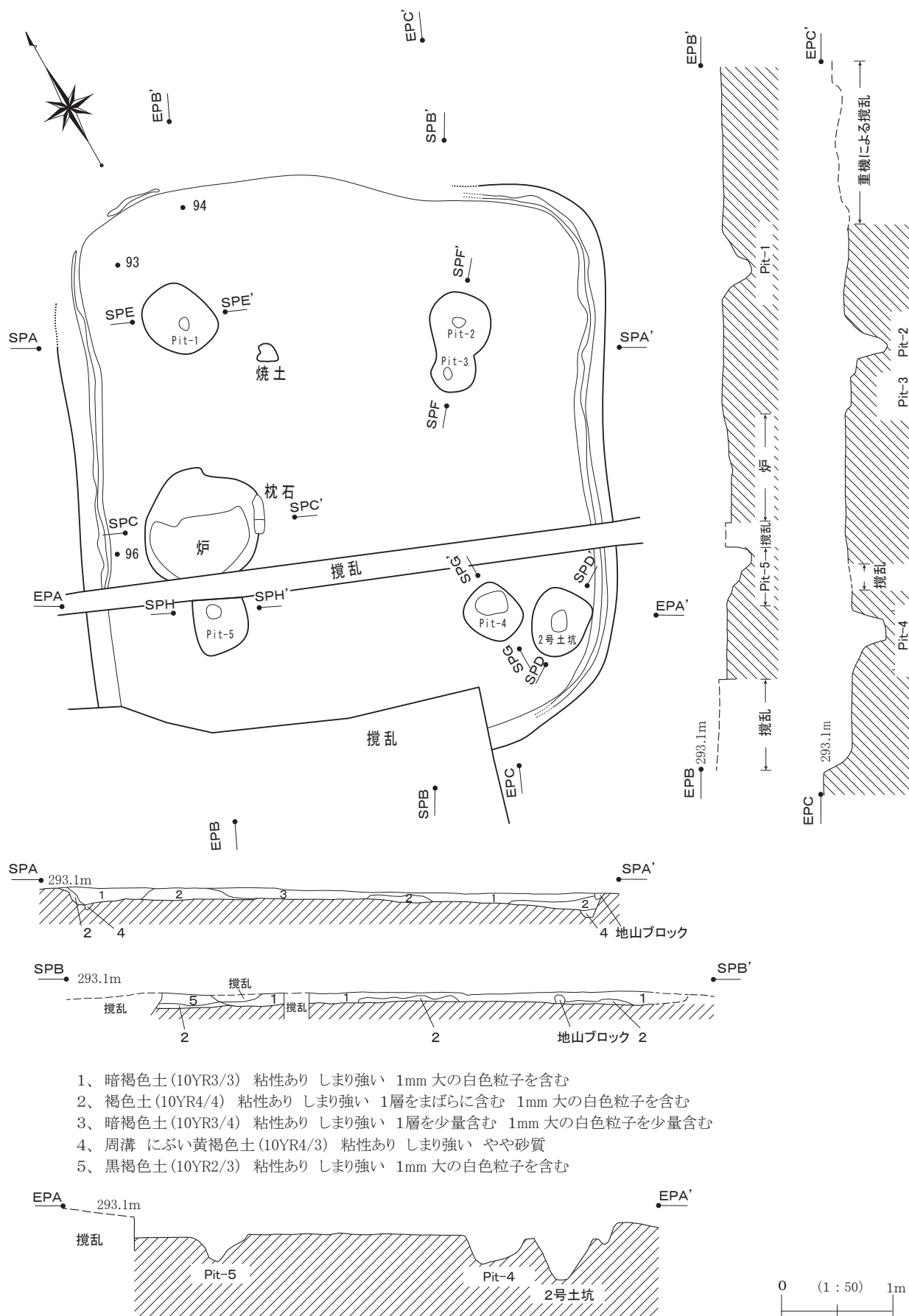
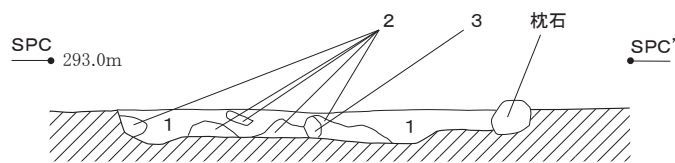


写真12 出土状況



写真13 取り上げ後状況（北から）

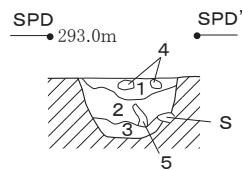




1 建物跡

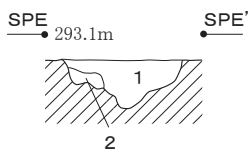
- 1、黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を少量含む
- 2、褐色土 (10YR4/4) 地山 粘性ややあり しまり強い 地山、金雲母を含む 極細粒砂
- 3、1、2が混じる層
- 地山 金雲母を含む 極細粒砂

0 (1 : 20) 50cm

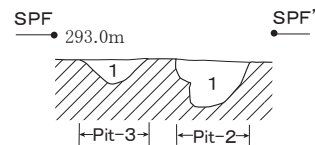


2号土坑

- 1、黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を含む
- 2、暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を少量含む
- 3、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり強い 極細粒砂
- 4、灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性あり しまり強い 細粒砂
- 5、2、3層の混じる層



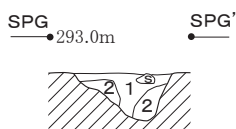
1 建物Pit-1



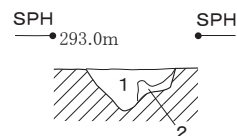
1 建物Pit-2
Pit-3

- 1、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 褐色土 (10YR4/4) をまばらに含む
- 2、褐色土 (10YR4/4) 粘性あり しまり強い 1層を少量含む

- 1 建物Pit-2 1、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり強い 褐色土 (10YR4/4) をまばらに含む
- 1 建物Pit-3 1、黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり しまり強い 褐色土 (10YR4/4) を少量含む



1 建物Pit-4



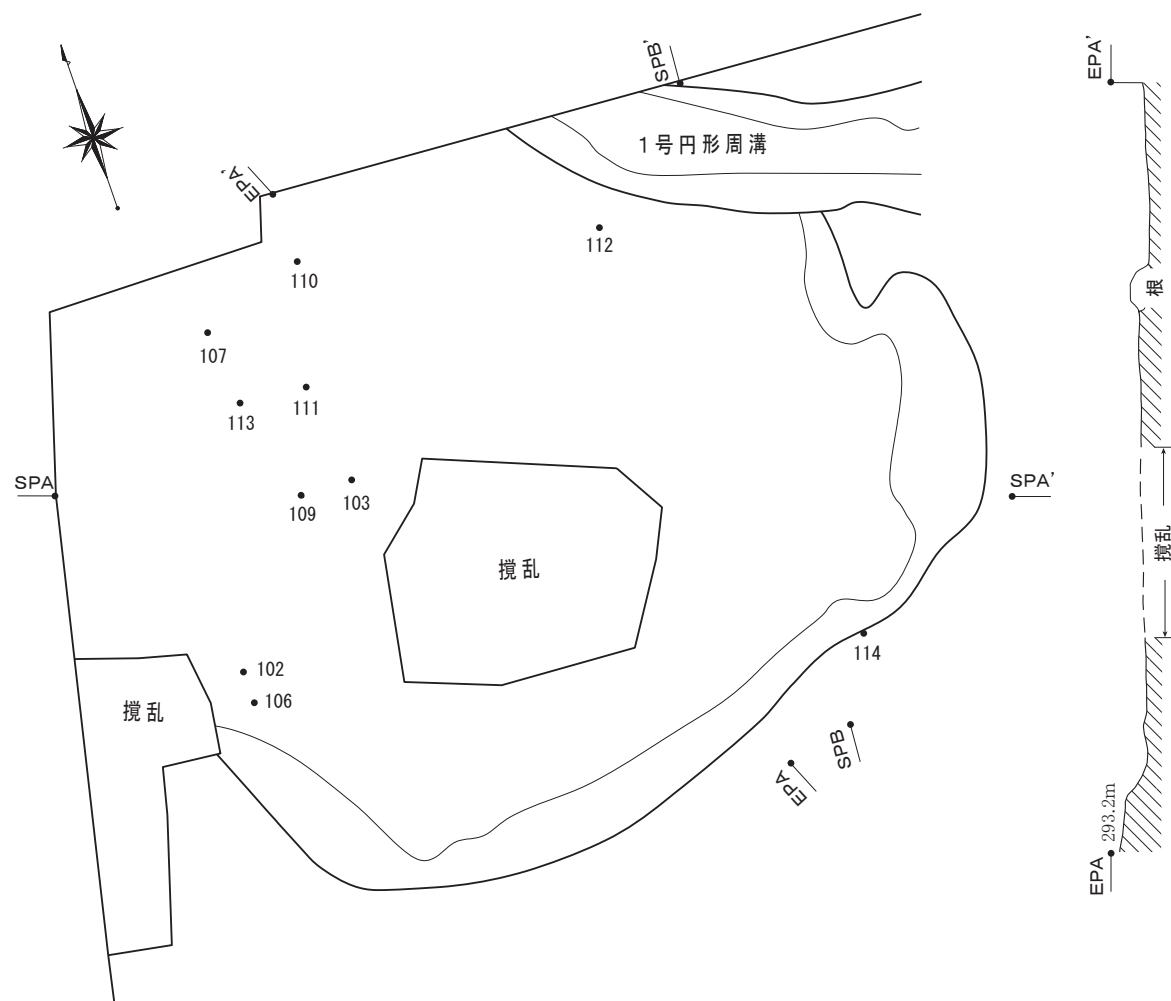
1 建物Pit-5

- 1、褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 2層を僅かに含む
- 2、褐色土 (10YR4/4) 粘性あり しまり強い 1層を僅かに含む

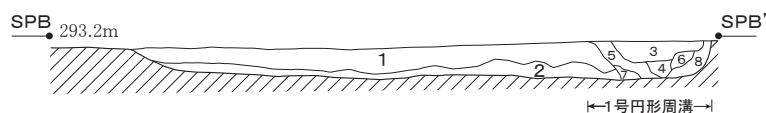
- 1、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 2層を僅かに含む
- 2、褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり強い 1層を僅かに含む

0 (1 : 40) 1m

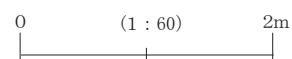
第 12 図 1号竖穴建物跡②



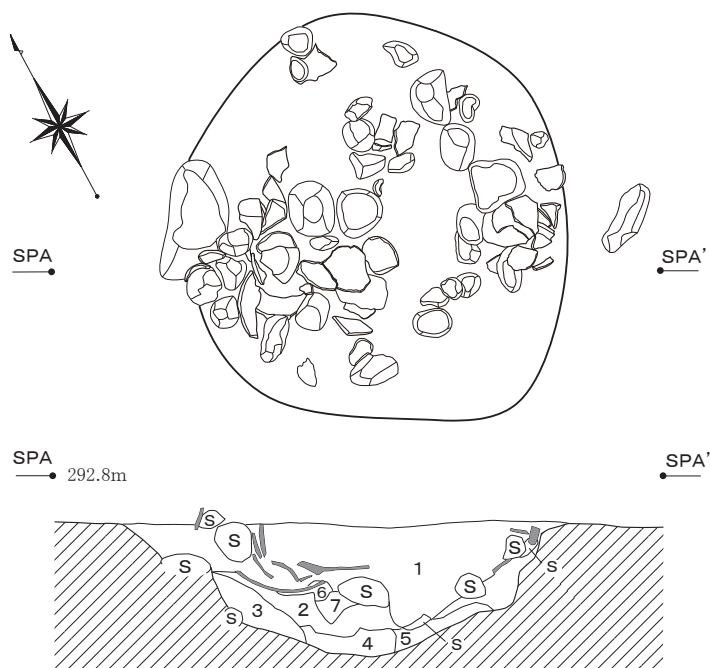
- 1、黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を多量に含む
- 2、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 灰黄褐色土 (10YR4/2) を含む
- 3、灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性あり しまり強い 5mm大の小礫を少量含む
- 4、黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を含む
にぶい黄褐色土 (10YR5/4) を含む



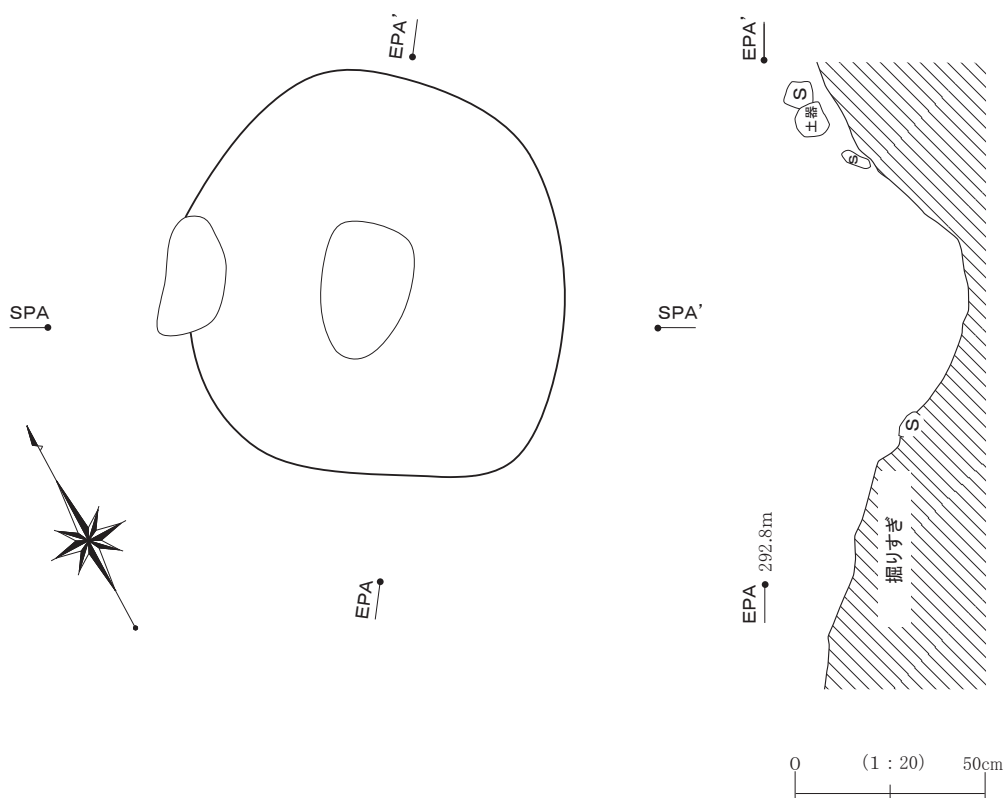
- 1、黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を多量に含む
- 2、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 灰黄褐色土 (10YR4/2) を含む
- 3、黒色土 (10YR2/1) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を含む にぶい黄褐色土 (10YR4/3) を少量含む
- 4、黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を含む
- 5、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を含む
- 6、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり強い 5層を少量含む 1mm大の白色粒子を含む
- 7、暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を含む
- 8、褐色土 (10YR4/4) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を含む



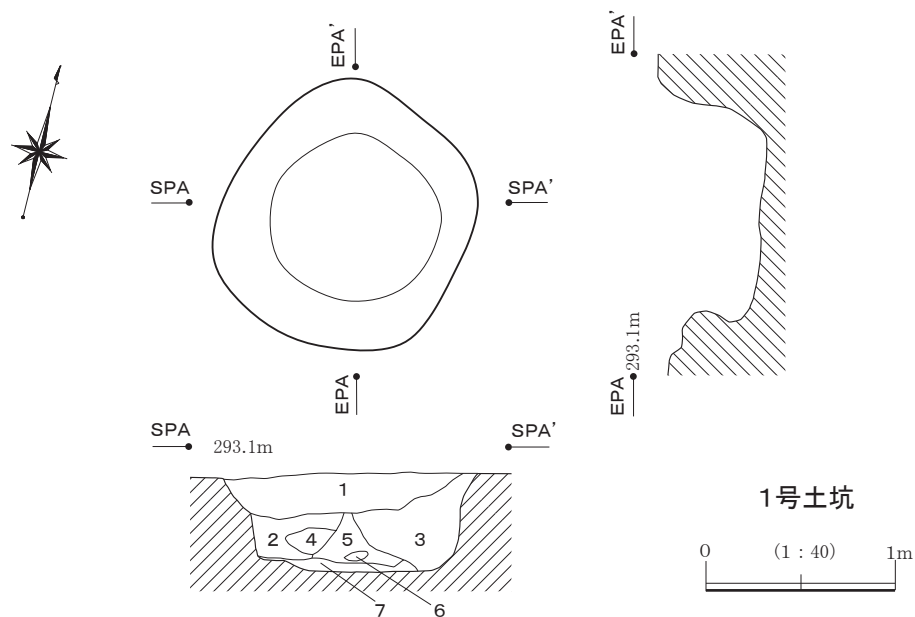
第 13 図 1号縦穴状遺構



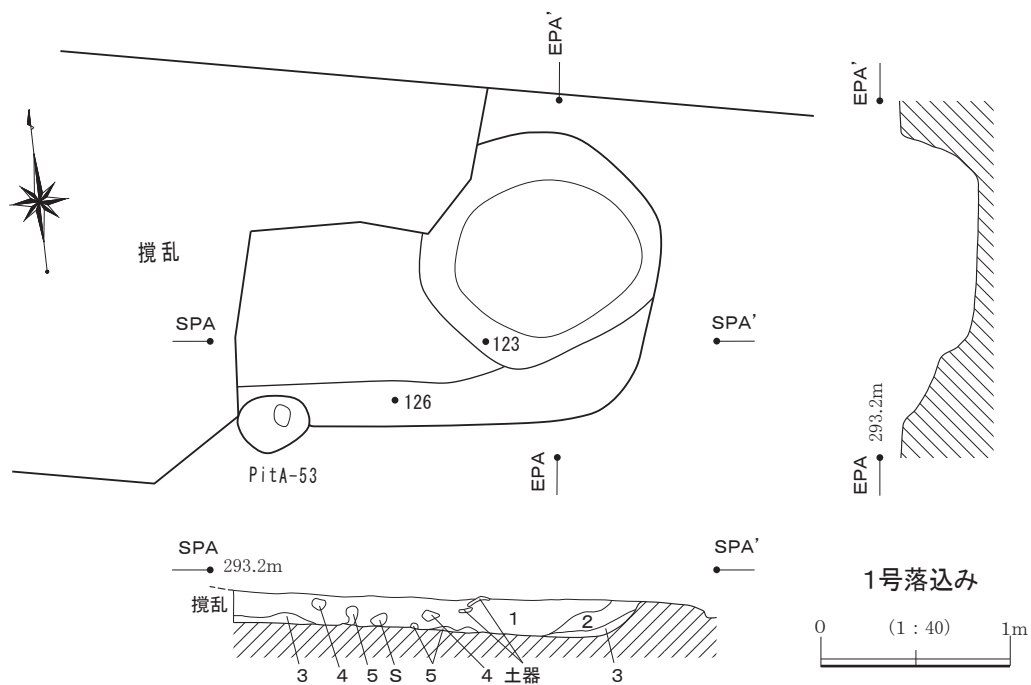
- 1、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまりあり 1mm 大の白色粒子を含む
- 2、黒褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまりあり
- 3、黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり しまりあり にぶい黄褐色土 (10YR4/3) をまばらに含む
- 4、黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり しまりあり にぶい黄褐色土 (10YR4/3) を多量に含む
- 5、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまりあり にぶい黄褐色土 (10YR4/3) を含む
- 6、にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 粘性ややあり しまり強い 焼土水分少なく乾燥している
- 7、6層と1cm大炭化物と4層が混じる 粘性あり しまりあり



第 14 図 廃棄土坑

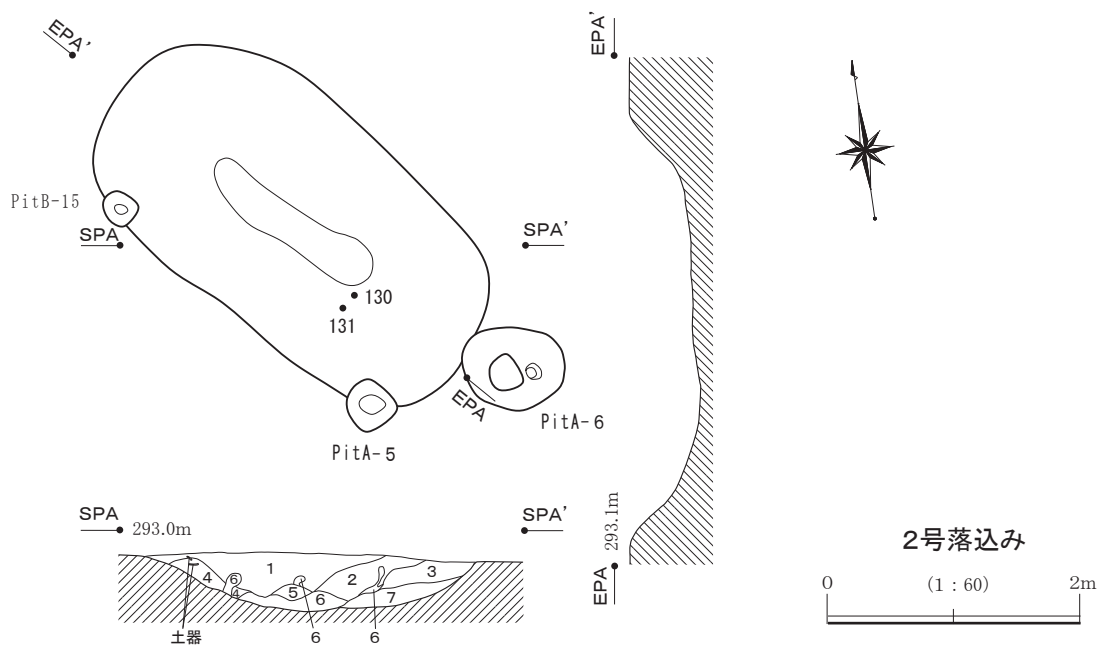


- 1、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり非常に強い
- 2、黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり しまり強い 炭化物を微量に含む 1層をまばらに含む
- 3、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 1層をまばらに含む
- 4、黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり しまり強い 1層を少量含む
- 5、黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり しまり強い 1層を少量含む
- 6、暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまり強い 1, 5層が混じる層
- 7、5層と地山 (にぶい黄褐色土) をまばらに含む層 粘性あり しまり強い

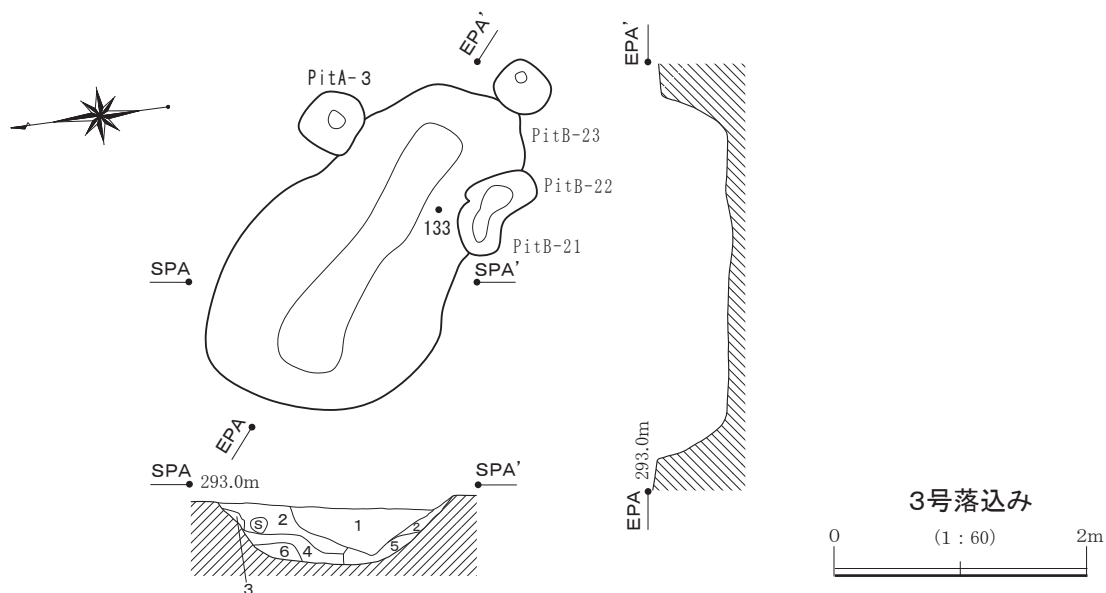


- 1、黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を含む 5mm 大の小礫を少量含む
- 2、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を含む 5mm 大の小礫を少量含む
- 3、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり強い 2層を微量に含む
- 4、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり強い
- 5、褐色土 (10YR4/4) 粘性あり しまり強い 1層を微量に含む

第 15 図 1号土坑・1号落込み

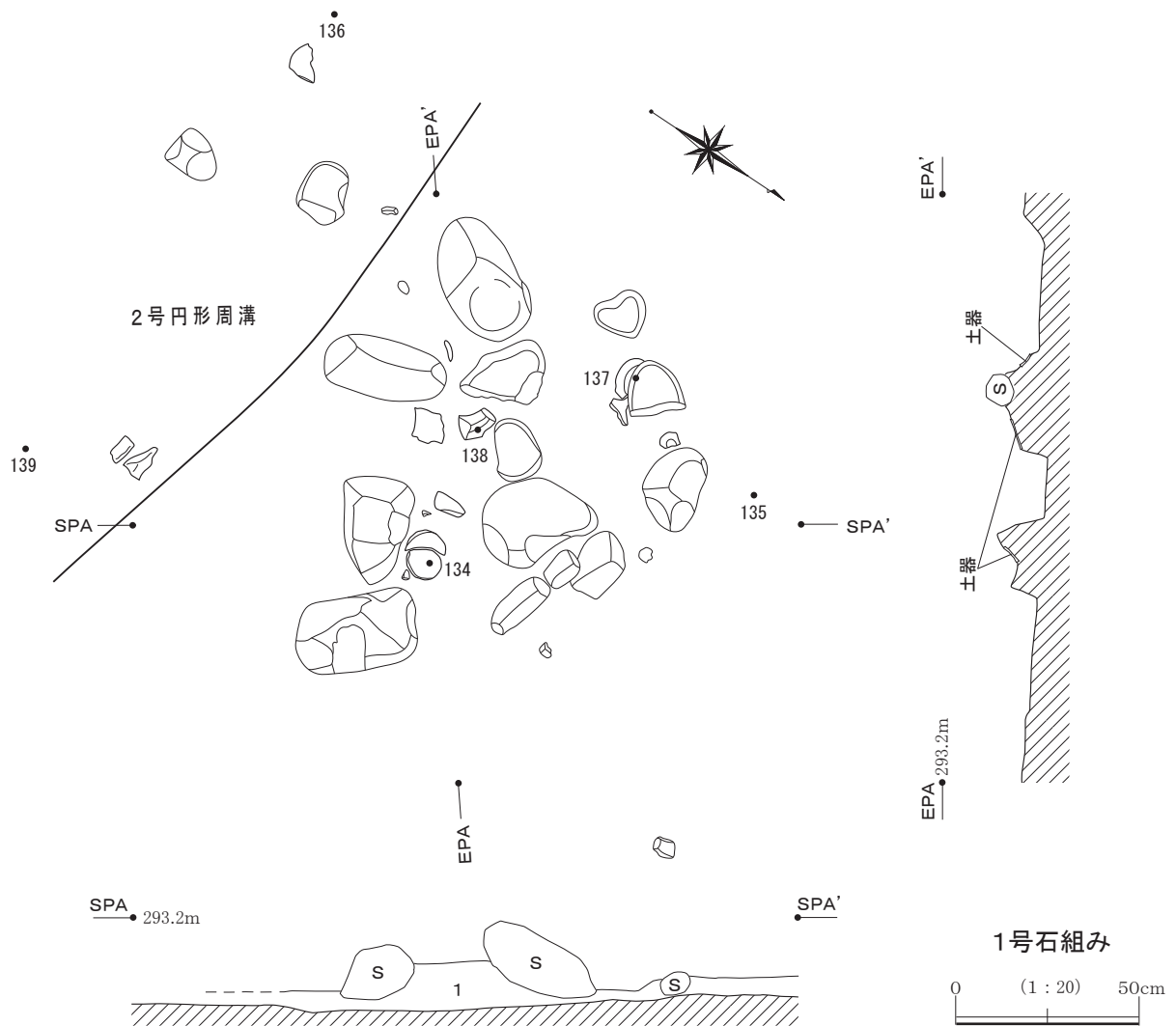


- 1、黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を多量に含む 炭化物を微量に含む
- 2、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を多量に含む 5mm 大の小礫を微量に含む
- 3、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を多量に含む 5mm 大の小礫を微量に含む
- 4、黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり しまり強い
- 5、1, 6層が混じる層 粘性あり しまり強い
- 6、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり しまりあり 雲母を多量に含む 細粒砂
- 7、褐色土 (10YR4/4) 粘性あり しまりあり 暗褐色土 (7.5YR3/4) を微量に含む

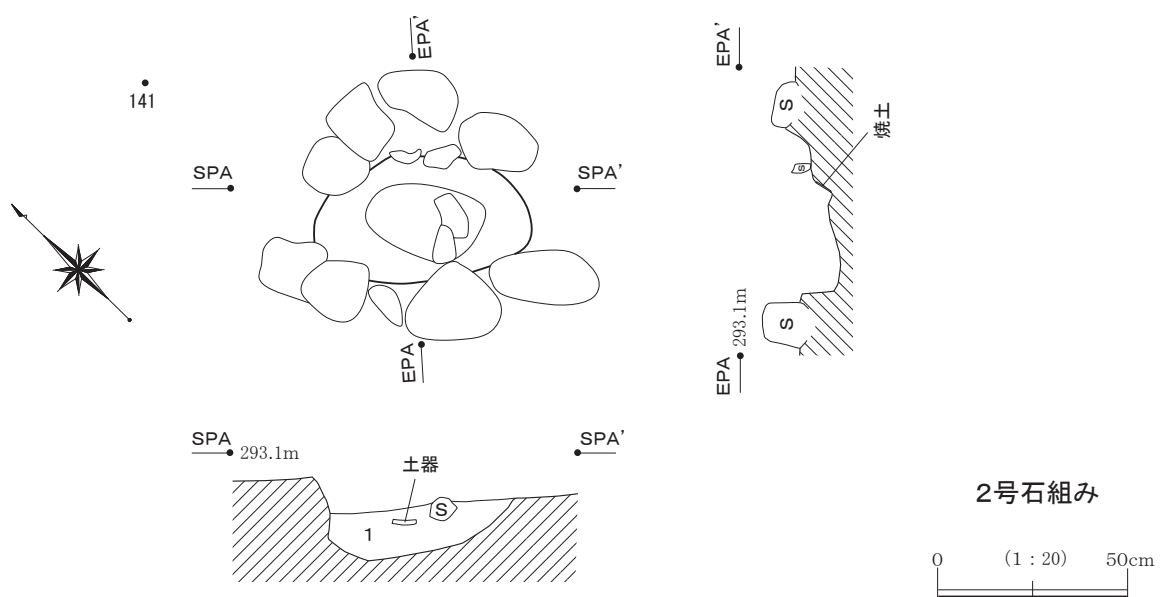


- 1、黒色土 (10YR2/1) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子、5mm 大の小礫を含む 炭化物と焼土粒を微量に含む
- 2、黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子、5mm 大の小礫を含む
- 3、2層とにぶい黄褐色土 (10YR4/3) をまばらに含む 粘性あり しまり強い
- 4、黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を少量含み5mm 大の小礫を微量に含む
- 5、暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまり強い にぶい黄褐色土 (10YR4/3) をまばらに含む
- 6、にぶい黄褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまり強い 4層をまばらに含む

第 16 図 2号及び3号落込み

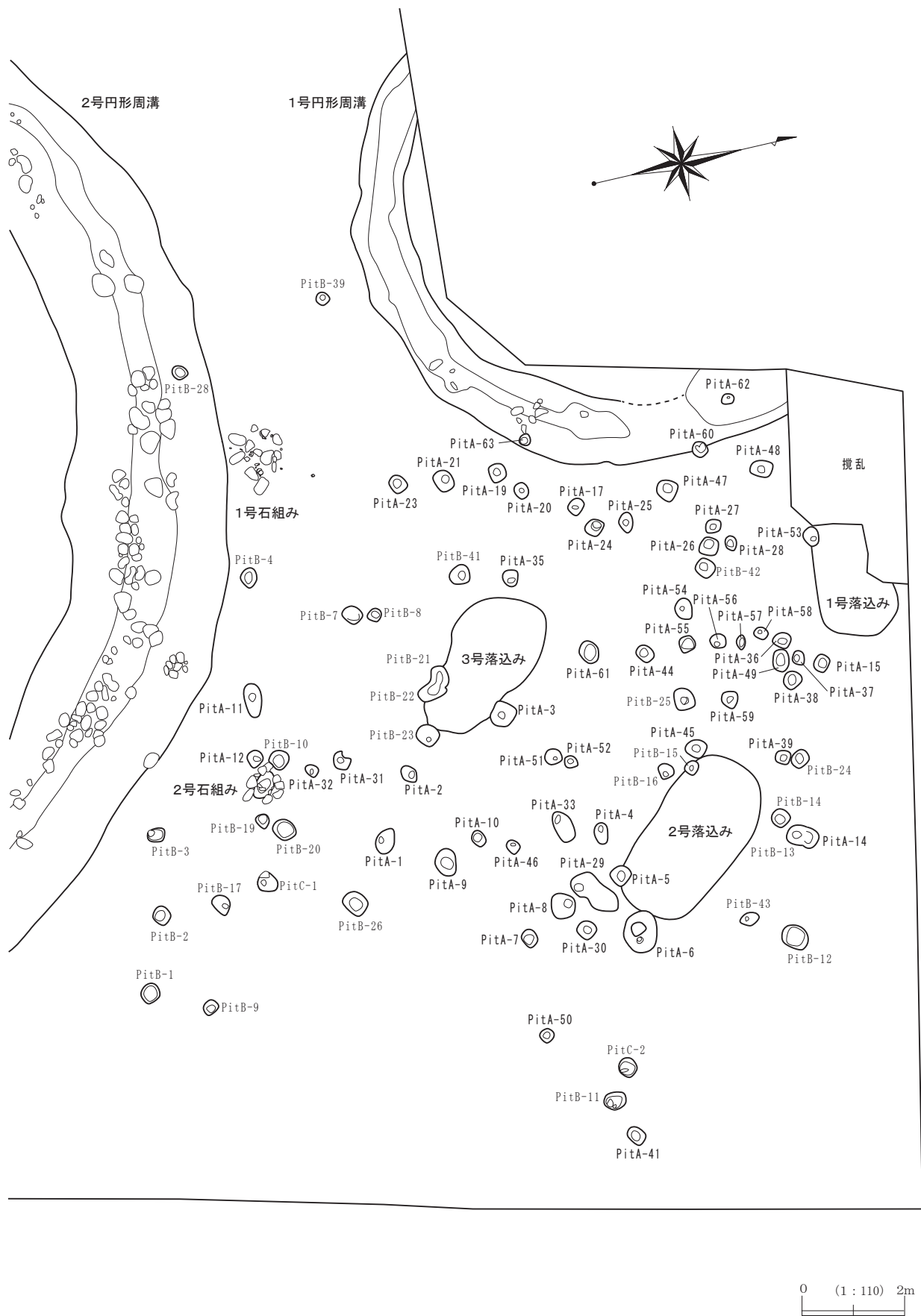


1、暗褐色土 (10YR3/4) 粘性強い しまり強い 1mm 大の小礫を含む 雲母を少量含む

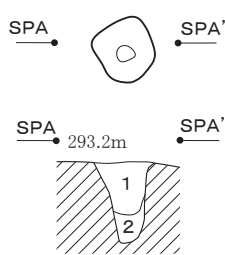
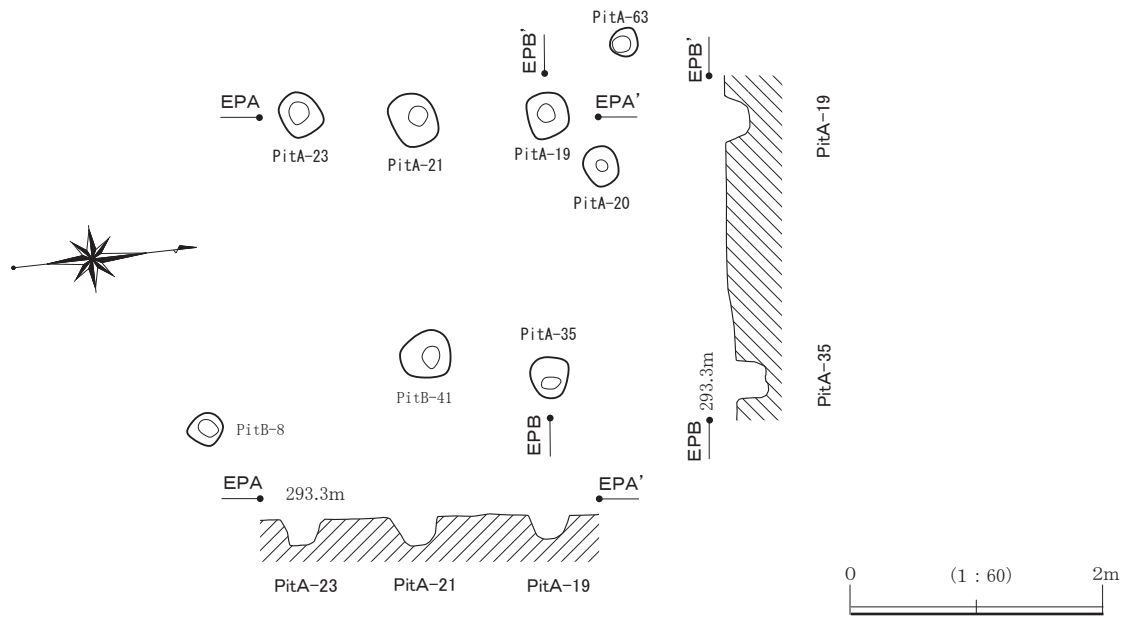


1、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり しまり強い 1mm 大の白色粒子を含む 炭化物を少量含む

第 17 図 1号及び2号石組み

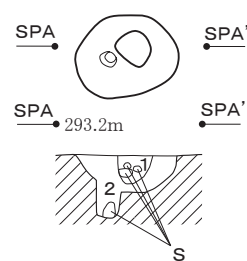


第 18 図 ピット群①



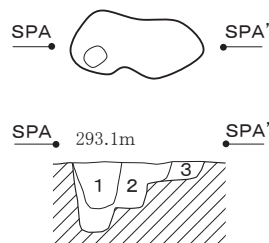
PitA-3

- 1、暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまりとても強い
褐色土 (10YR4/4) が混じる
- 2、黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり しまり強い



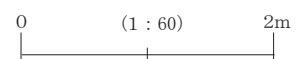
PitA-6

- 1、暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまり強い
礫を4点程含む 柱根
- 2、褐色土 (10YR4/4) まだら 粘性あり しまり強い
地山と1層が混じる



PitA-29

- 1、褐色土 (10YR4/6) 粘性強い しまり非常に強い
粘土質 ロームブロック少量混じる
- 2、灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性あり しまり強い
- 3、暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり しまり強い



第 19 図 ピット群②

第1表 Pit A 一覧表

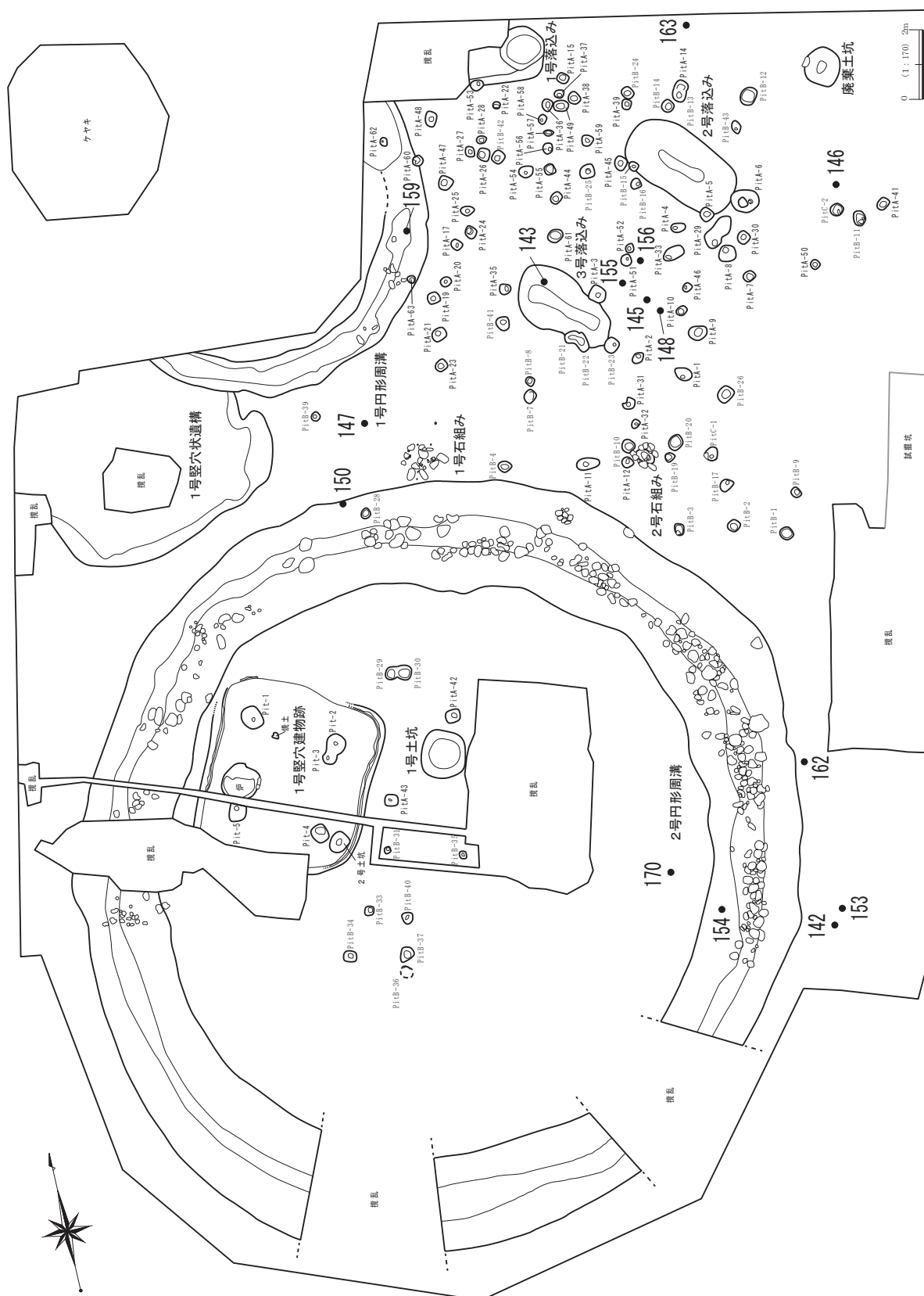
単位：cm

ビット名	土層説明	平面形	断面形	粘性	しまり	長径	短径	最大深度	その他
PitA- 1	暗褐色土、上層は地山がまだらに混じる	楕円形	丸底	あり	強い	50	35	34.5	下層壁に円礫あり
PitA- 2	中心部は褐色土と暗褐色土、片側は暗褐色土	円形	丸底	あり	強い	34	32	25	褐色土は柱抜き取り後に埋めた土か
PitA- 3	上層は暗褐色土に褐色土が混じる、下層は黒褐色土	第19図参照		あり	強い	54	48	65	検出面から棧瓦片出土、第19図参照
PitA- 4	中心部はにぶい褐色土、片側は暗褐色土	楕円形	丸底	あり	強い	38	24	34.5	褐色土は柱抜き取り後に埋めた土か
PitA- 5	中心部はにぶい褐色土と暗褐色土、他は暗褐色土	円形	丸底	あり	強い	43	38	42	中心部は柱穴であろう
PitA- 6	中心部：暗褐色土、礫4点程含む それ以外：褐色土と暗褐色土が混じる	第19図参照		①あり ②あり	①強い ②強い	79	61	38	中心部は柱穴であろう。柱穴径24、30、21.5cm
PitA- 7	上層中心部は褐色土、周辺部は暗褐色土	円形	平底	あり	強い	33	30	27	
PitA- 8	暗褐色土、褐色土少量、白色粒子少量	円形	丸底	あり	強い	46	46	35	
PitA- 9	暗褐色土	楕円形	丸底	あり	強い	50	39	39.5	
PitA-10	上層はにぶい褐色土、下層は暗褐色土が混じる	円形	平底	あり	強い	29	25	50.5	下層に礫あり
PitA-11	にぶい褐色土	楕円形	丸底	あり	強い	61	32	43	
PitA-12	にぶい褐色土	円形	丸底	あり	強い	35	30	37.5	
PitA-13	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitA-14	上層はにぶい褐色土、下層は暗褐色土が混じる	(円形)	(平底)	あり	強い	41	26	18	PitB - 13 に切られる
PitA-15	上層にぶい褐色土、下層暗褐色土	円形	平底	あり	強い	34	34	15.5	
PitA-16	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitA-17	暗褐色土に白色粒子が混ざる	円形	丸底	あり	強い	35	31	17.5	下層壁に円礫あり
PitA-18	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitA-19	暗褐色土に白色粒子が混ざる	円形	丸底	あり	強い	38	34	19.5	
PitA-20	暗褐色土	円形	丸底	あり	強い	32	28	18.5	
PitA-21	暗褐色土に白色粒子が混ざる	円形	丸底	あり	強い	44	34	21	
PitA-22	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitA-23	暗褐色土に白色粒子が混ざる	円形	平底	あり	強い	34	33	20	
PitA-24	暗褐色土に白色粒子が混ざる	円形	丸底	あり	強い	36	31	21.5	中層に円礫あり、石までの深さは10.5cm
PitA-25	暗褐色土、白色粒子を含む	円形	丸底	あり	強い	38	27	38.5	
PitA-26	暗褐色土、白色粒子を含む	円形	丸底	あり	非常に強い	37	36	29.5	壁面に灰色砂質土あり、底面に硬化部分あり
PitA-27	暗褐色土、白色粒子を含む	円形	丸底	あり	非常に強い	34	29	31.5	
PitA-28	暗褐色土、白色粒子を含む	円形	丸底	あり	非常に強い	26	23	22.5	
PitA-29	上層褐色土、以下暗褐色土	第19図参照		あり	強い	100	48	54	第19図参照
PitA-30	暗褐色土に少量褐色土が混じる	円形	丸底	あり	強い	34	34	29	
PitA-31	暗褐色土とにぶい黄褐色土	不整形	丸底	あり	強い	34	34	33	
PitA-32	暗褐色土、白色粒子を含む	円形	丸底	あり	強い	23	22	26	
PitA-33	暗褐色土	楕円形	丸底	あり	あり	63	32	37.5	
PitA-34	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitA-35	中心部は褐色土、周辺部は暗褐色土が混じる	円形	丸底	あり	強い	34	30	25	
PitA-36	暗褐色土ににぶい褐色土が混じる	円形	丸底	あり	あり	34	29	20	
PitA-37	黒褐色土	円形	丸底	あり	強い	29	22	19	
PitA-38	暗褐色土ににぶい褐色土が混じる	円形	丸底	あり	強い	33	32	42.5	やや掘りすぎ
PitA-39	暗褐色土に褐色土が混じる、片側は黒褐色土	円形	丸底	あり	強い	28	28	20	
PitA-40	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitA-41	暗褐色土	楕円形	丸底	あり	あり	44	36	29	
PitA-42	暗褐色土、下層はにぶい黄褐色土が混ざる	円形	丸底	あり	強い	42	40	19.5	
PitA-43	中心部は褐色土、周辺部は暗褐色土が混じる	円形	丸底	あり	強い	39	36	49	
PitA-44	暗褐色土	円形	丸底	あり	強い	34	30	22	
PitA-45	黒褐色土	円形	丸底	あり	強い	39	30	11	
PitA-46	中心部は褐色土、周辺部は暗褐色土が混じる	円形	丸底	あり	強い	28	26	27.5	
PitA-47	暗褐色土に白色粒子が混じる	円形	丸底	あり	強い	43	38	18.5	
PitA-48	褐色土（地山）を主に暗褐色土がまだらに混じる	円形	丸底	あり	強い	42	38	19	
PitA-49	暗褐色土	楕円形	平底	あり	強い	39	29	22	
PitA-50	暗褐色土	円形	平底	あり	強い	25	25	13	検出面から近代の棧瓦出土
PitA-51	暗褐色土に地山が混じる	円形	丸底	あり	強い	34	27	24	
PitA-52	暗褐色土、下層は地山が混じる	円形	丸底	あり	あり	26	25	10	土器片3点混入
PitA-53	暗褐色土、下層は地山が混じる	円形	丸底	あり	あり	36	27	30	1号落ち込みを切る
PitA-54	暗褐色土、下層は地山が混じる	円形	丸底	あり	強い	41	33	16	
PitA-55	暗褐色土に白色粒子が混じる、中心に礫	円形	平底	あり	強い	34	33	45	
PitA-56	暗褐色土に白色粒子が混じる	円形	丸底	あり	強い	32	30	19.5	底面に硬化部分あり
PitA-57	暗褐色土に地山が混じる	楕円形	丸底	あり	あり	26	20	16.5	
PitA-58	暗褐色土、下層は地山が多く混じる	円形	丸底	あり	強い	28	23	24.5	
PitA-59	にぶい黄褐色土	円形	丸底	あり	あり	31	28	20.5	
PitA-60	暗褐色土に白色粒子が混じる	円形	不整形	あり	強い	31	28	19	
PitA-61	暗褐色土に地山が混じる	円形	平底	あり	あり	44	38	6	
PitA-62	暗褐色土	円形	丸底	あり	あり	23	22	15.5	1号円形周溝の底で検出
PitA-63	暗褐色土	円形	平底	あり	あり	34	31	19.5	1号円形周溝の底で検出

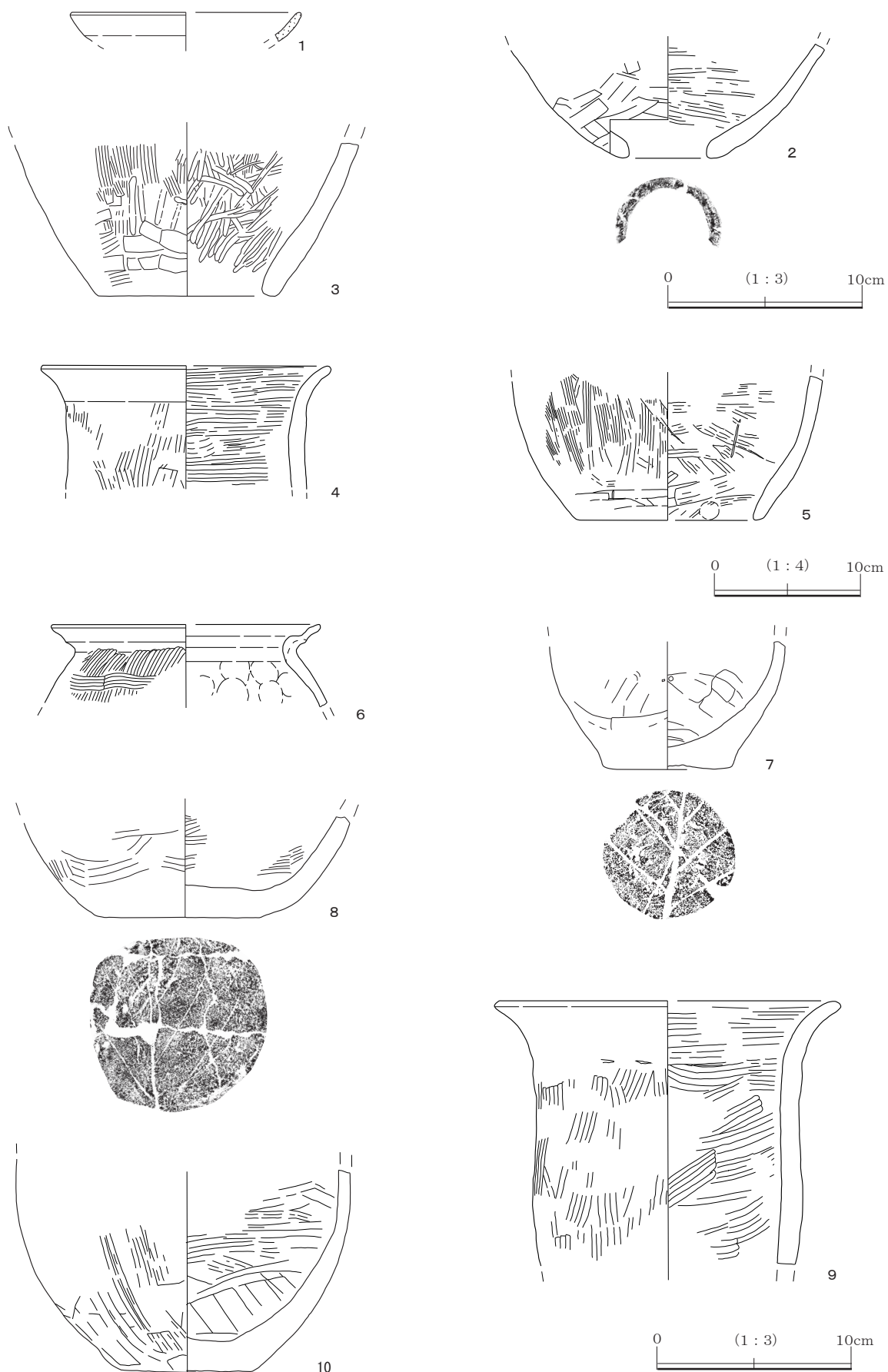
第2表 Pit B・Pit C 一覧表

単位：cm

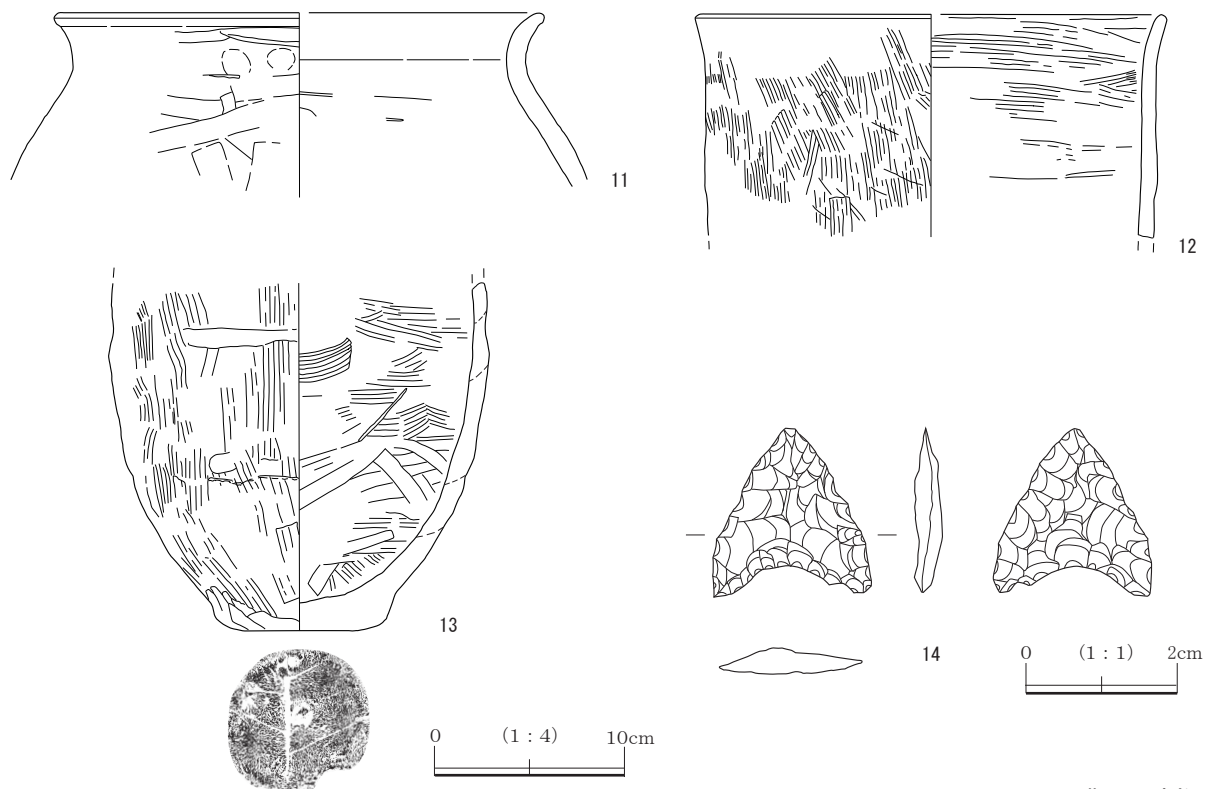
ピット名	土層説明	平面形	底形	粘性	しまり	長径	短径	最大深度	その他
PitB- 1	にぶい黄褐色土、炭化物を含む	円形	平底	あり	非常に強い	39	35	3	検出面が特にしまり強い
PitB- 2	にぶい黄褐色土、炭化物を含む	円形	平底	あり	非常に強い	35	32	18	検出面が特にしまり強い
PitB- 3	にぶい黄褐色土、炭化物を含み暗褐色土微量を含む	円形	平底	あり	非常に強い	38	33	11	検出面が特にしまり強い、礫あり
PitB- 4	にぶい黄褐色土、炭化物を含み暗褐色土微量を含む	円形	平底	あり	非常に強い	36.5	29	10	
PitB- 5	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitB- 6	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitB- 7	黒褐色土	円形	平底	あり	強い	40	35	22.5	中層壁面に灰釉陶器片
PitB- 8	黒褐色土に地山が少量混じる	円形	平底	あり	強い	25	23	19	
PitB- 9	鈍い黄褐色土、炭化物多量を含む	円形	平底	あり	非常に強い	41	39	8	検出面が特にしまり強い
PitB-10	にぶい黄褐色土、炭化物を含み暗褐色土微量を含む	円形	平底	あり	非常に強い	35	35	29	
PitB-11	鈍い黄褐色土、暗褐色土を微量に含む	楕円形	平底	あり	非常に強い	46	32	24	上層の礫は根固めの石か
PitB-12	にぶい黄褐色土、炭化物を含み暗褐色土微量を含む	円形	平底	あり	非常に強い	48	45	11.5	
PitB-13	鈍い黄褐色土、暗褐色土を微量に含む	円形	丸底	あり	あり	40	33	11.5	PitA - 14 を切る
PitB-14	にぶい黄褐色土に地山が少量混じる	円形	平底	あり	あり	37	35	23	
PitB-15	にぶい黄褐色土、炭化物を含み暗褐色土微量を含む	円形	丸底	あり	非常に強い	26	25	16	
PitB-16	にぶい黄褐色土、炭化物を含み暗褐色土微量を含む	円形	丸底	あり	非常に強い	33	26	15.5	
PitB-17	鈍い黄褐色土、炭化物多量を含む	円形	丸底	あり	非常に強い	36	35	8.5	
PitB-18	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitB-19	にぶい黄褐色土、炭化物を含み暗褐色土微量を含む	円形	平底	あり	非常に強い	30	25	9	
PitB-20	暗褐色土	円形	平底	あり	非常に強い	43	41	3.5	
PitB-21	暗褐色土に地山がまばらに混じる	不整形	(丸底)	あり	強い	(38)	35	37	上層から近代の棧瓦出土
PitB-22	暗褐色土	不整形	(丸底)	あり	強い	(37)	36	38	
PitB-23	暗褐色土	円形	丸底	あり	強い	41	39	28.5	検出面から近代の五寸釘出土
PitB-24	にぶい黄褐色土	円形	丸底	あり	非常に強い	37	32	15	検出面が特にしまり強い
PitB-25	暗褐色土、下層は地山が混じる	円形	丸底	あり	強い	42	40	18	底面に人頭台の礫あり
PitB-26	上層暗褐色土、下層暗褐色土と地山が混じる	円形	平底	あり	非常に強い	45	45	32	
PitB-27	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitB-28	上層にぶい黄褐色土、下層暗褐色土	円形	平底	あり	非常に強い	26	24	10.5	検出面は2円溝より上層
PitB-29	暗褐色土	円形	平底	あり	強い	48	37	18.5	
PitB-30	暗褐色土	円形	平底	あり	強い	42	41	6	Pit B -29 に切られる
PitB-31	黒褐色土	円形	平底	あり	あり	22.5	19	11	
PitB-32	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitB-33	上層は黒褐色土、下層は暗褐色土と地山混じり	円形	平底	あり	あり	25	19	5.5	底面に硬化部分あり
PitB-34	上層は黒褐色土、下層は暗褐色土と地山混じり	円形	平底	あり	あり	38	32	17.5	
PitB-35	黒褐色土に白色粒子が混じる	円形	平底	あり	強い	21	19.5	11	
PitB-36	黒褐色土に白色粒子が混じる	(円形)	平底	あり	強い	(38)	14.5	11	
PitB-37	黒褐色土	不整形	丸底	あり	強い	37.5	34	17	
PitB-38	欠番	-	-	-	-	-	-	-	欠番
PitB-39	暗褐色土	円形	丸底	あり	強い	23	20	16	
PitB-40	暗褐色土	円形	丸底	あり	強い	34	29	29.5	
PitB-41	暗褐色土	円形	丸底	あり	強い	40	36	27.5	
PitB-42	検出面黒褐色土、覆土灰黄褐色土	円形	丸底	あり	あり	—	—	—	計測漏れ
PitB-43	暗褐色土に地山がまばらに混じる	楕円形	丸底	あり	あり	32	24	17	
PitC- 1	暗褐色土に地山がまばらに混じる	円形	丸底	あり	強い	42	40	32	中層に細長い礫あり
PitC- 2	暗褐色土に地山がまばらに混じる	円形	平底	あり	強い	39	35	9	



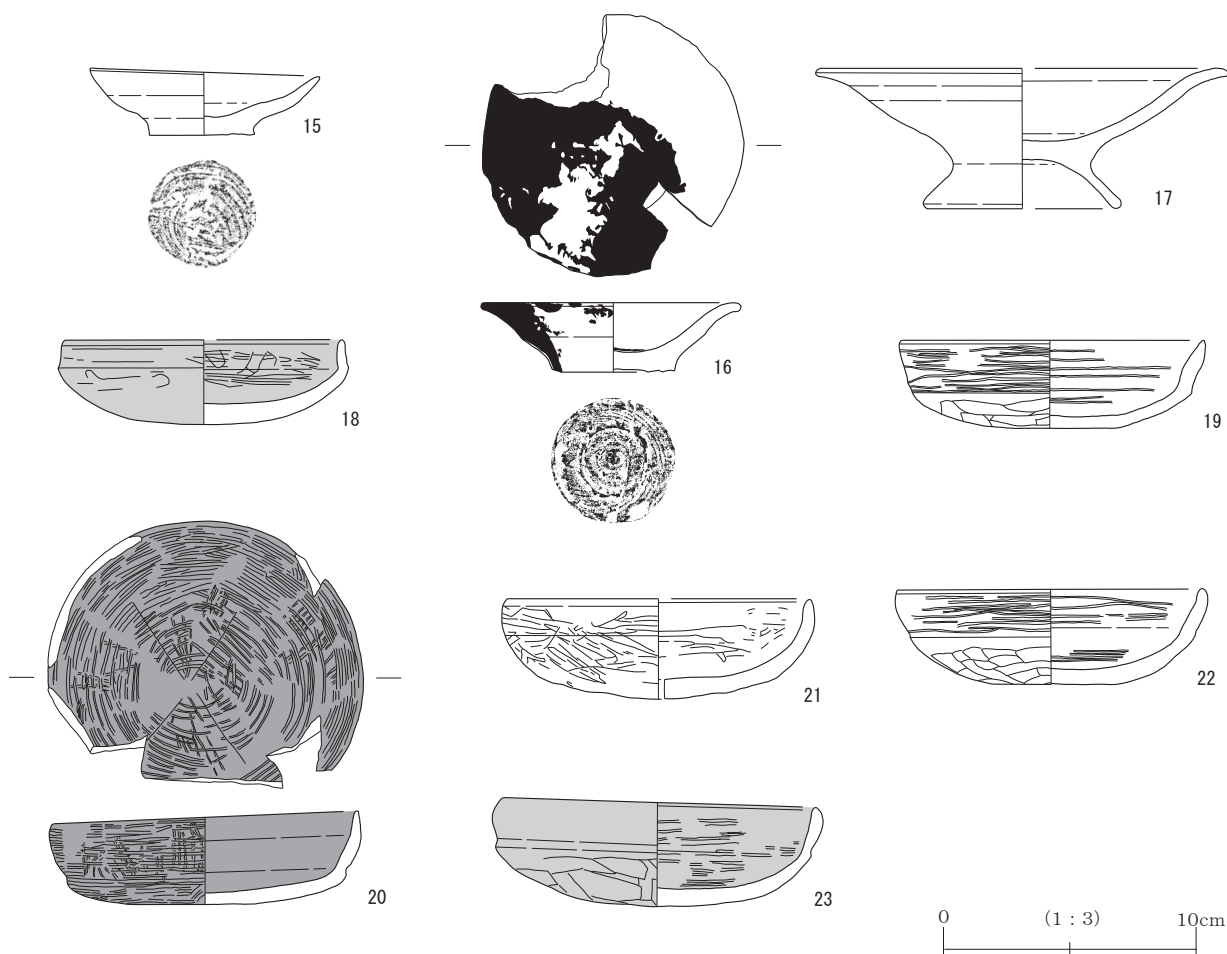
第 20 図 遺構外出土遺物出土位置



第 21 図 1号円形周溝出土遺物①



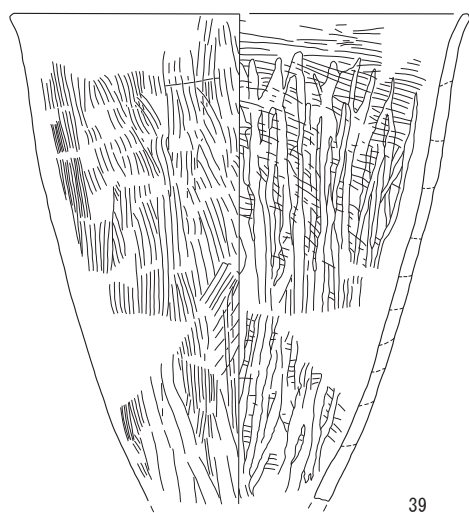
1号円形周溝出土遺物



第 22 図 1号円形周溝出土遺物②・2号円形周溝上層出土遺物①



第 23 図 2号円形周溝上層出土遺物②

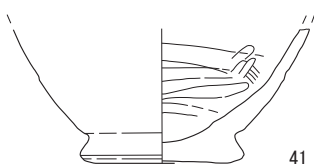


39

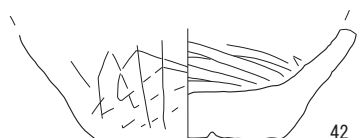


40

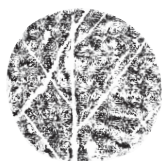
0 (1 : 4) 10cm



41



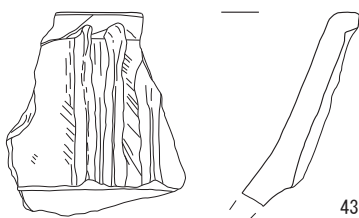
42



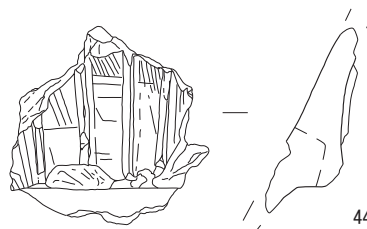
43



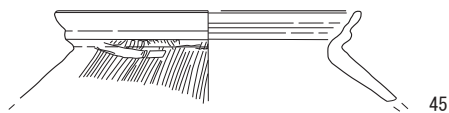
44



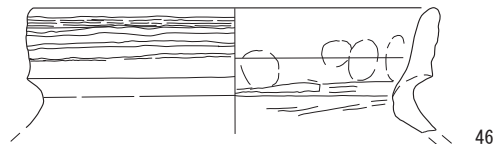
43



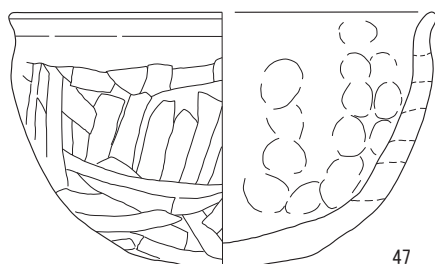
44



45



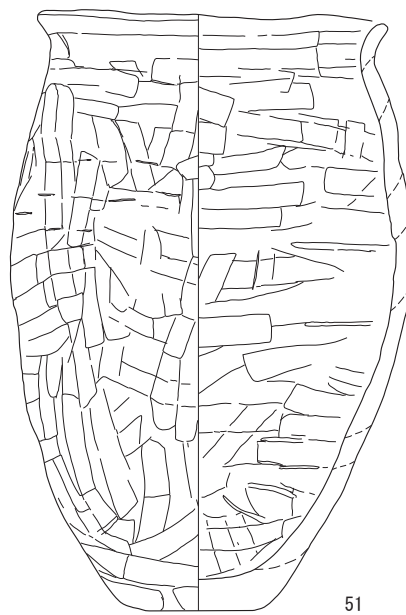
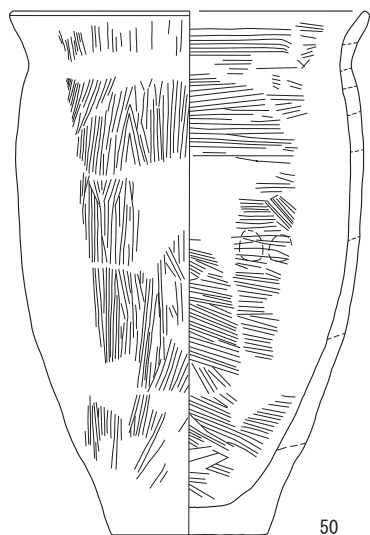
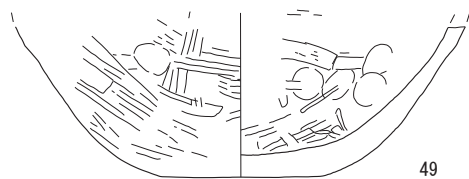
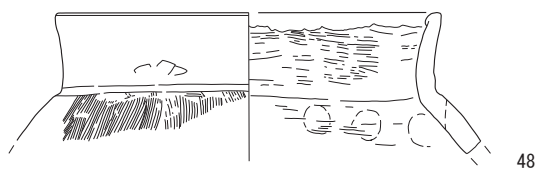
46



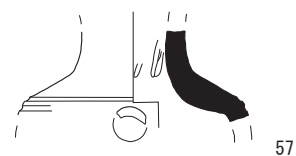
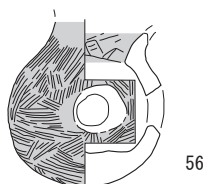
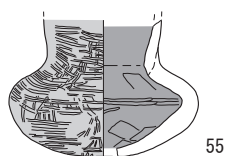
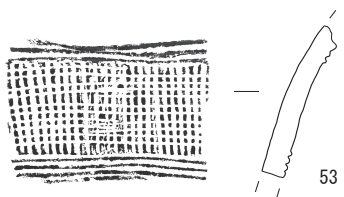
47

0 (1 : 3) 10cm

第 24 図 2号円形周溝上層出土遺物③

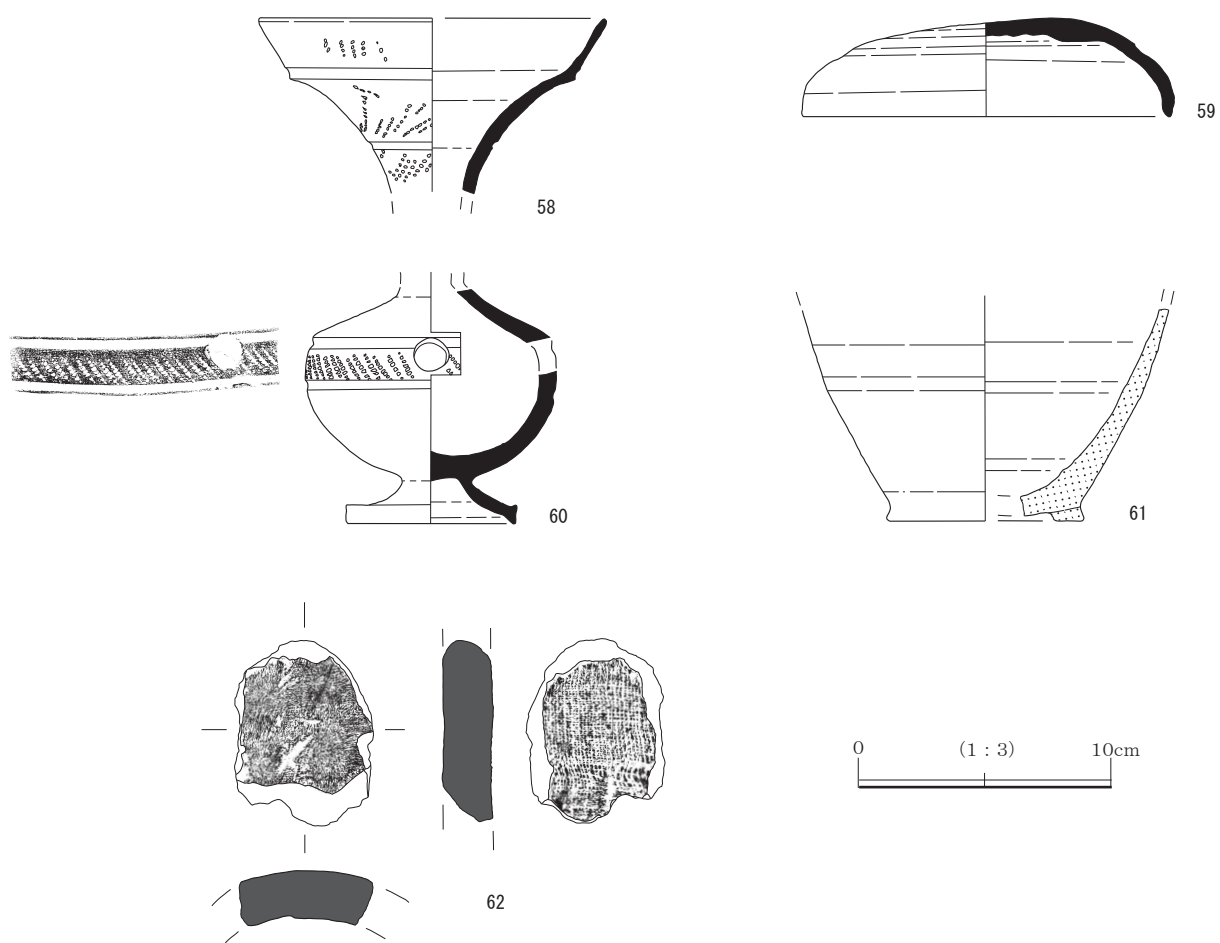


0 (1 : 4) 10cm

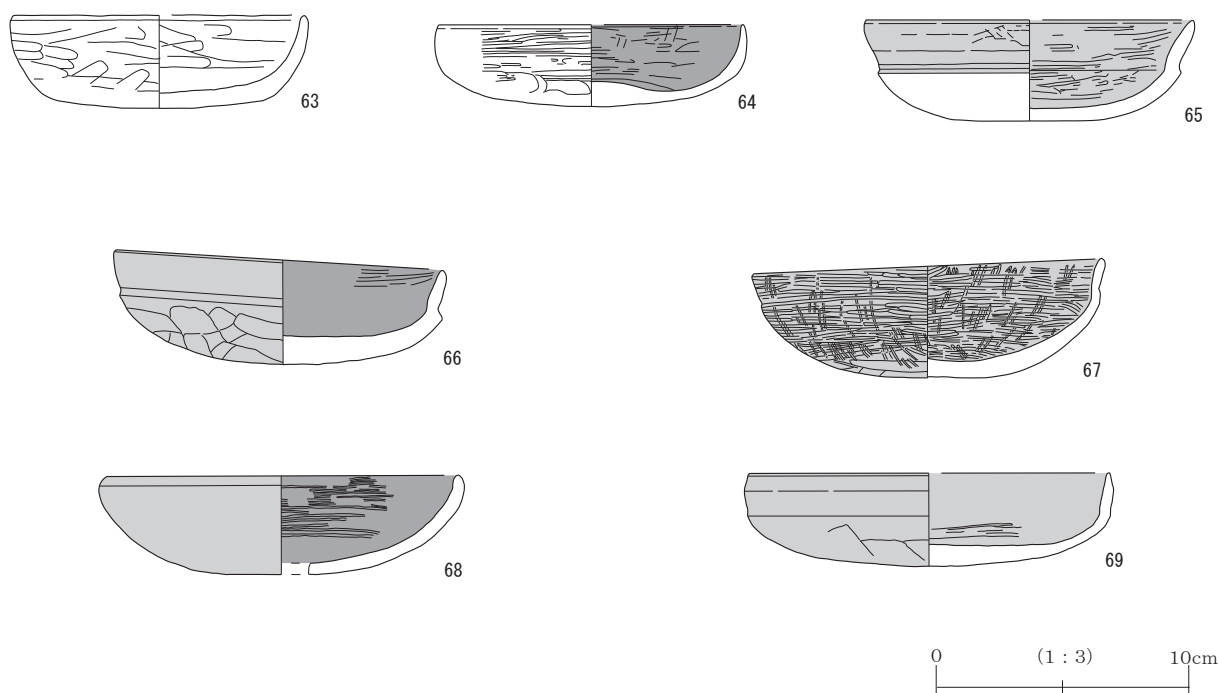


0 (1 : 3) 10cm

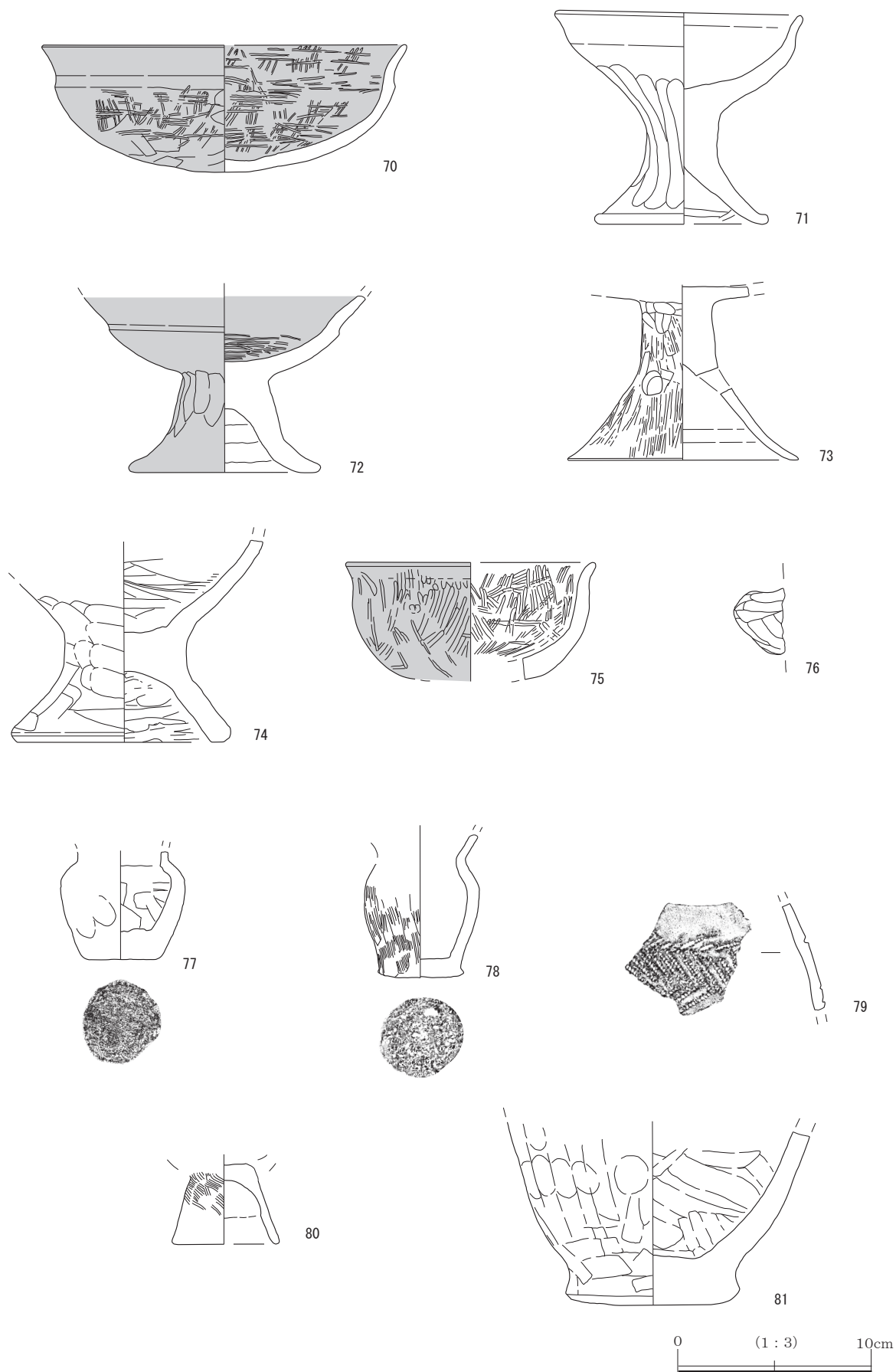
第 25 図 2号円形周溝上層出土遺物④



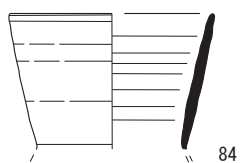
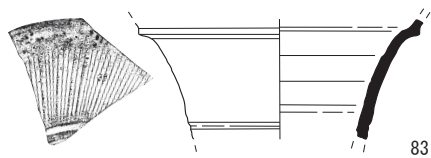
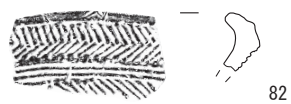
2号円形周溝上層出土遺物



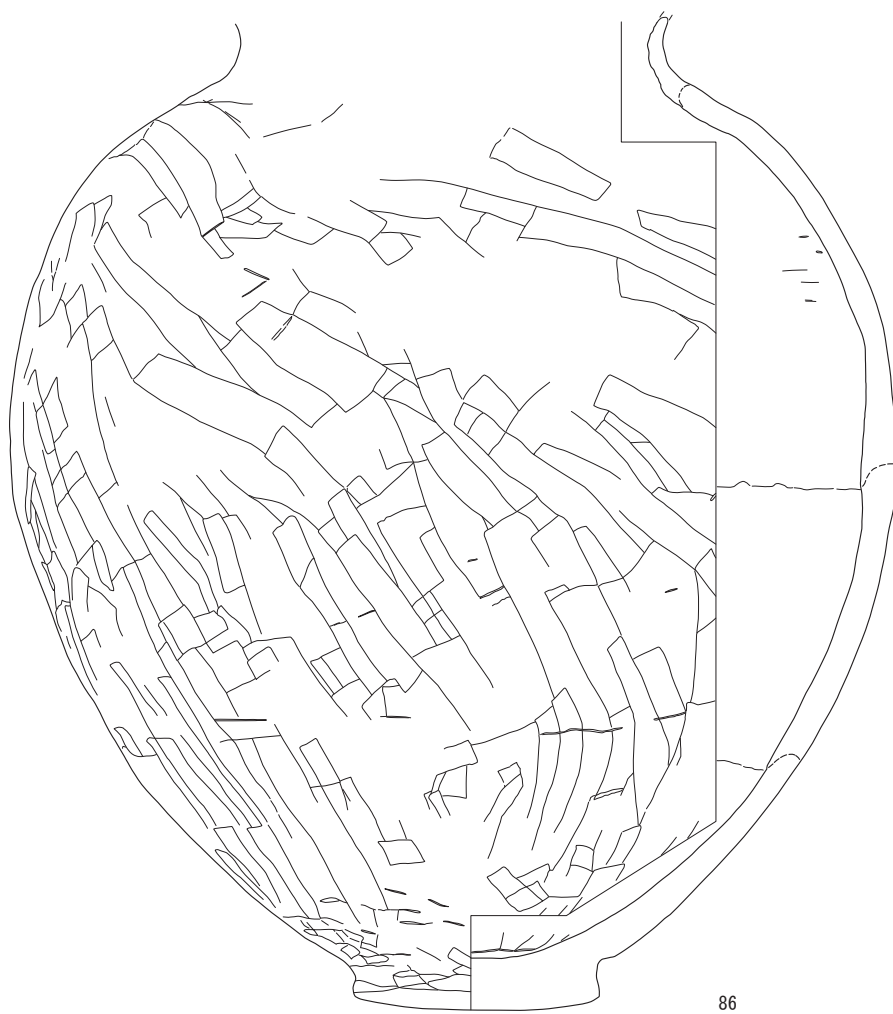
第 26 図 2号円形周溝上層出土遺物⑤及び下層出土遺物①



第 27 図 2号円形周溝下層出土遺物②

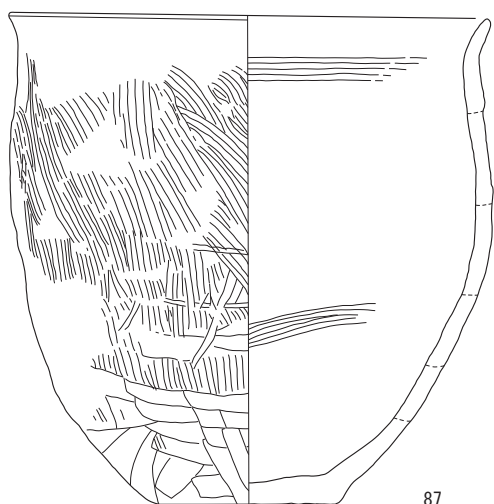


0 (1 : 3) 10cm

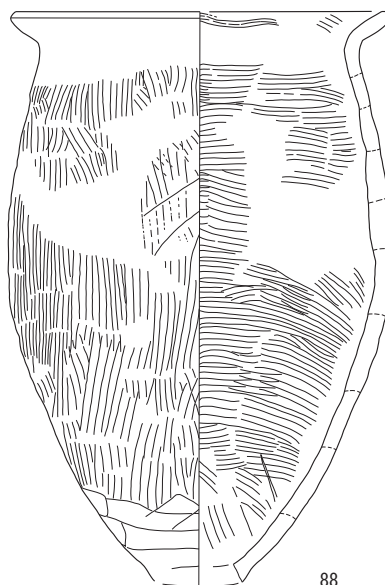


0 (1 : 4) 10cm

第 28 図 2号円形周溝下層出土遺物③



87

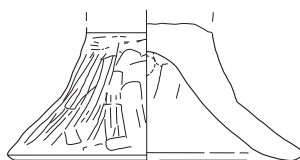
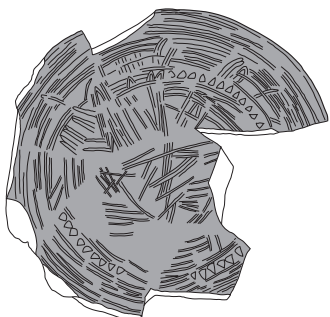


88

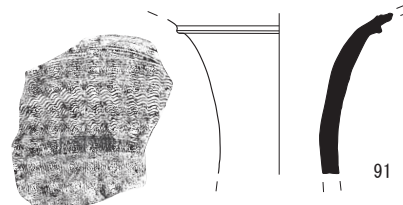


0 (1 : 4) 10cm

2号円形周溝下層出土遺物

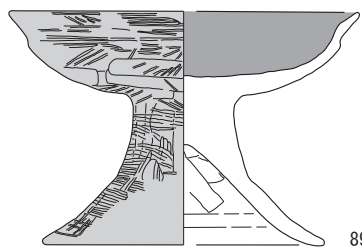


90



91

0 (1 : 3) 10cm



89

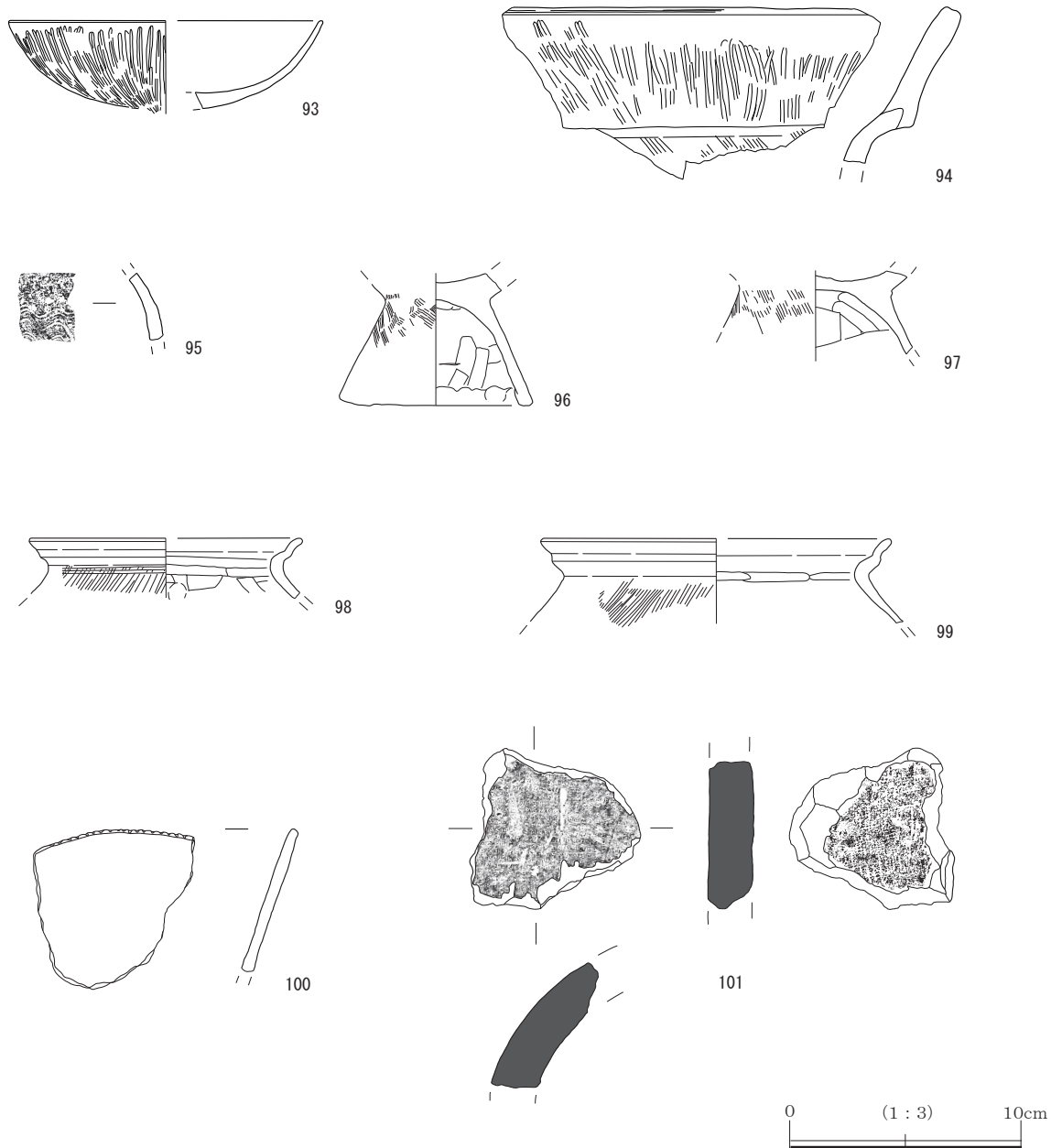


92

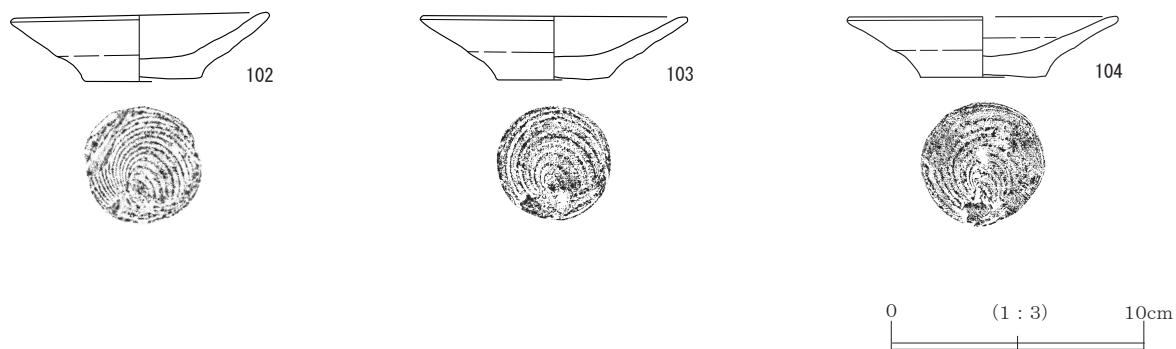


0 (1 : 4) 10cm

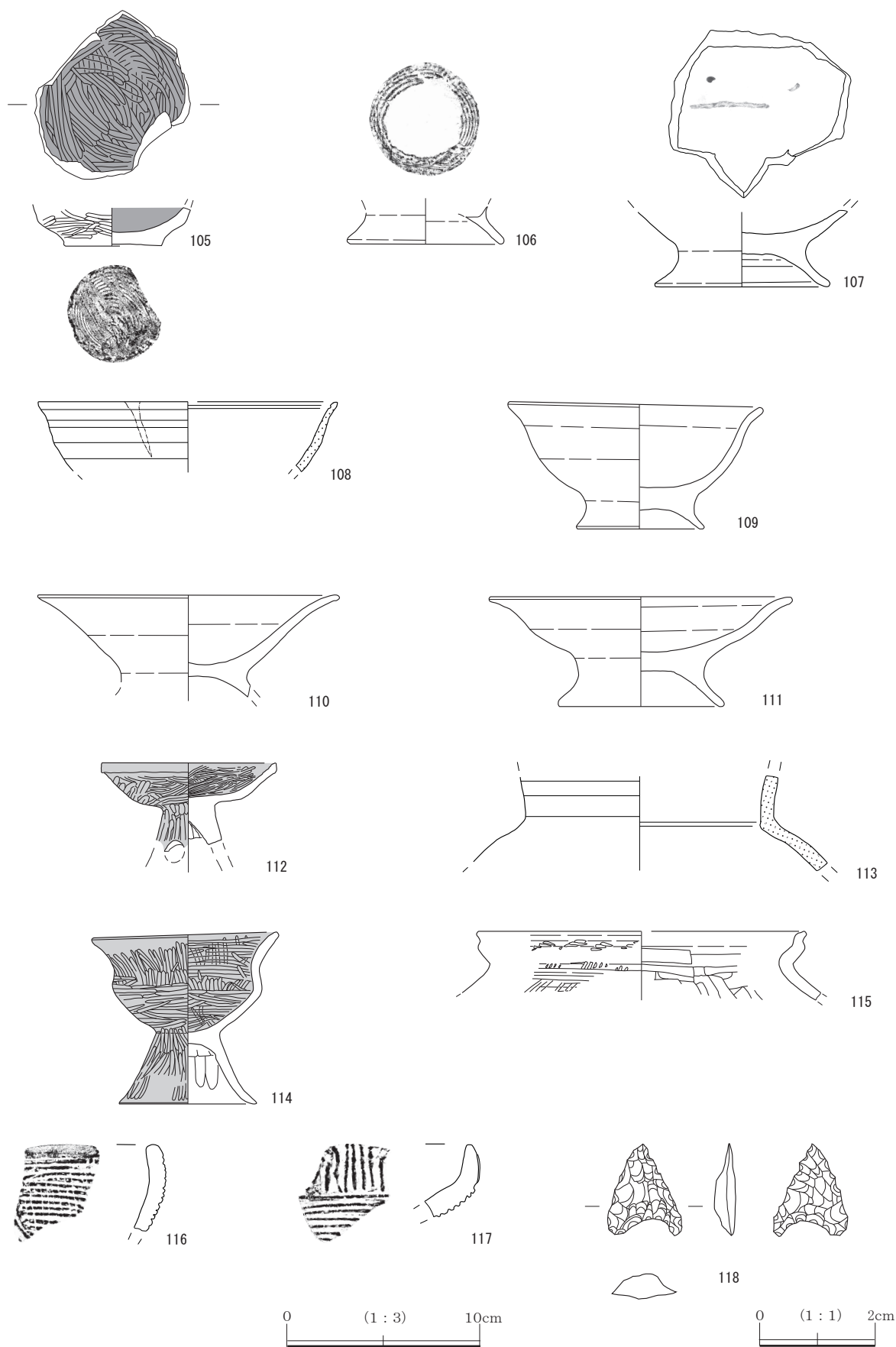
第 29 図 2号円形周溝下層出土遺物④及び一括出土遺物



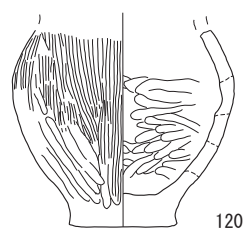
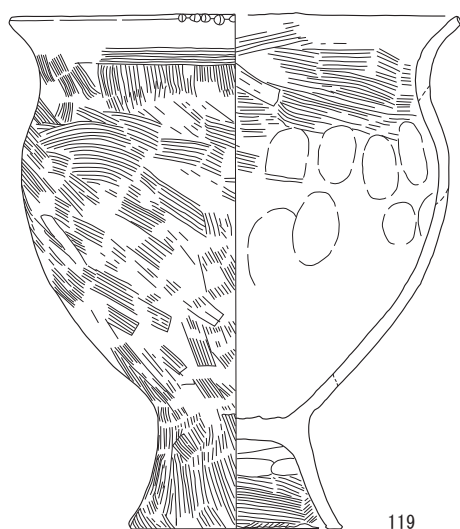
1号竖穴建物跡出土遺物



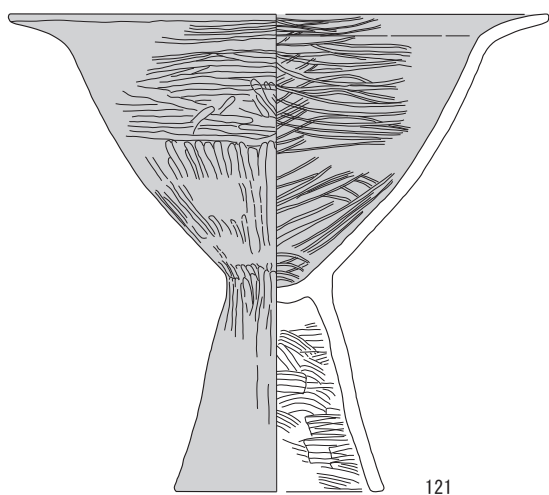
第 30 図 1号竖穴建物跡・1号竖穴状遺構出土遺物①



第 31 図 1号竖穴状遺構出土遺物②

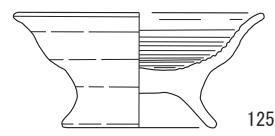
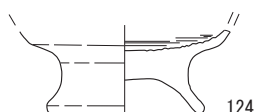
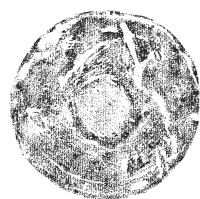
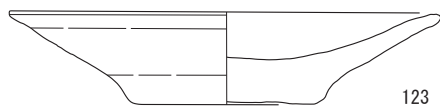


0 (1 : 3) 10cm



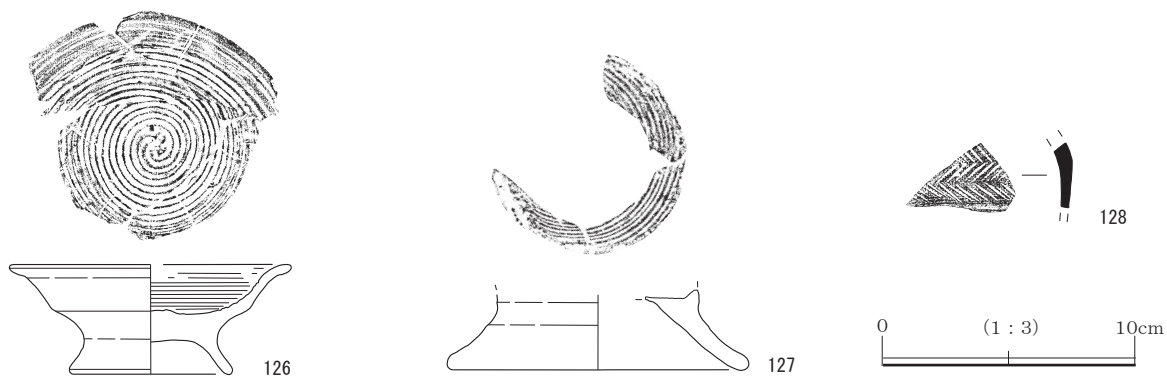
0 (1 : 4) 10cm

廃棄土坑出土遺物

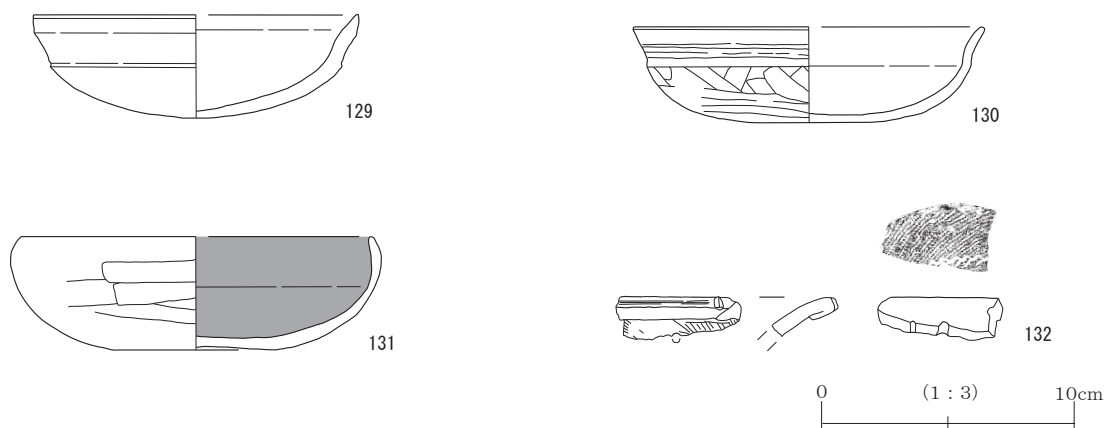


0 (1 : 3) 10cm

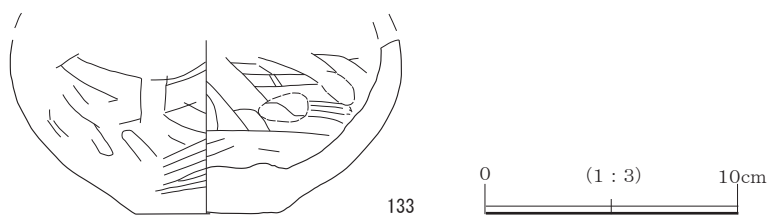
第 32 図 廃棄土坑・1号落込み出土遺物



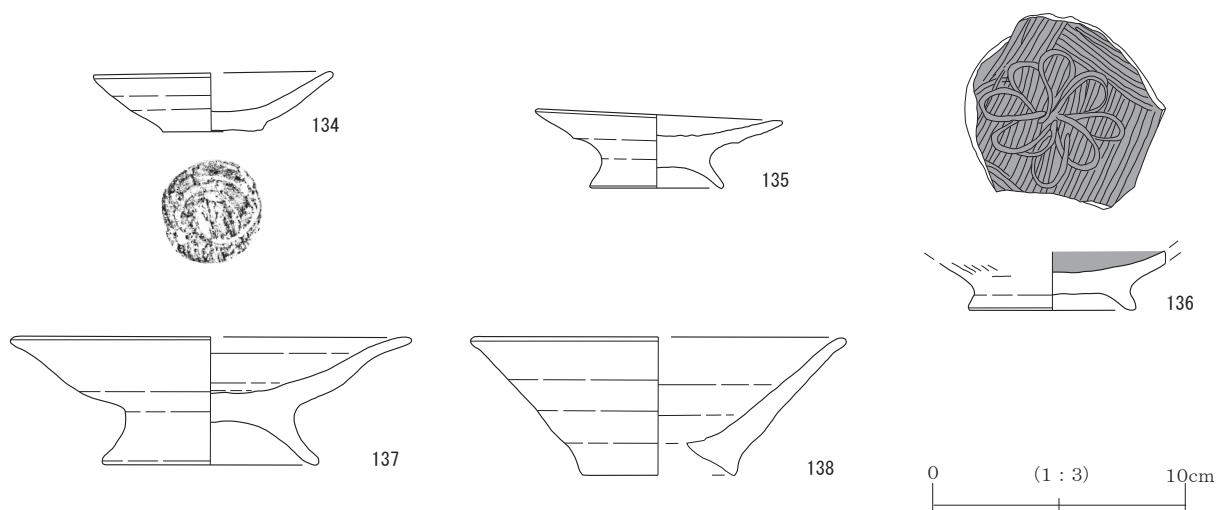
1号落込み出土遺物



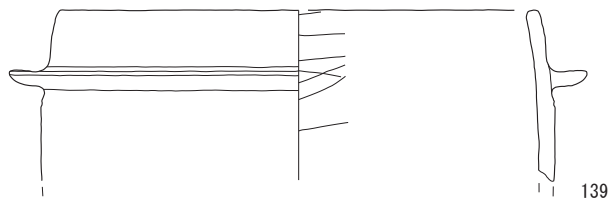
2号落込み出土遺物



3号落込み出土遺物

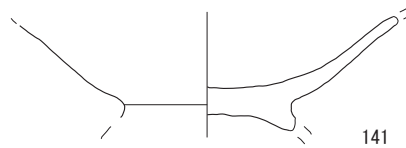
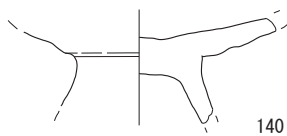


第 33 図 1号～3号落込み・1号石組み出土遺物



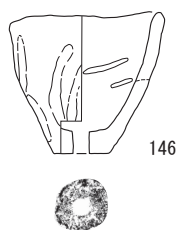
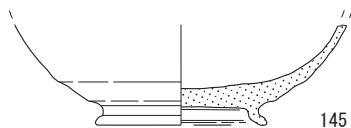
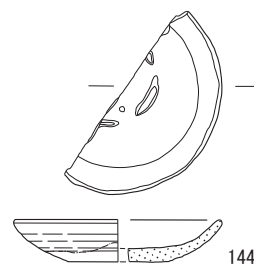
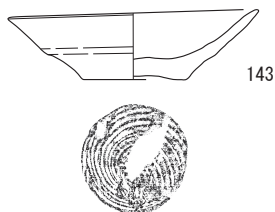
0 (1 : 4) 10cm

1号石組み出土遺物

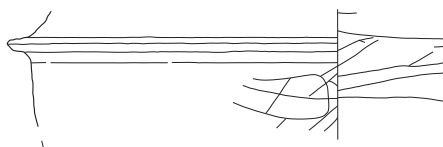
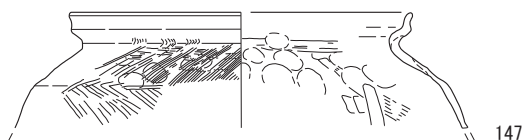


0 (1 : 3) 10cm

2号石組み出土遺物

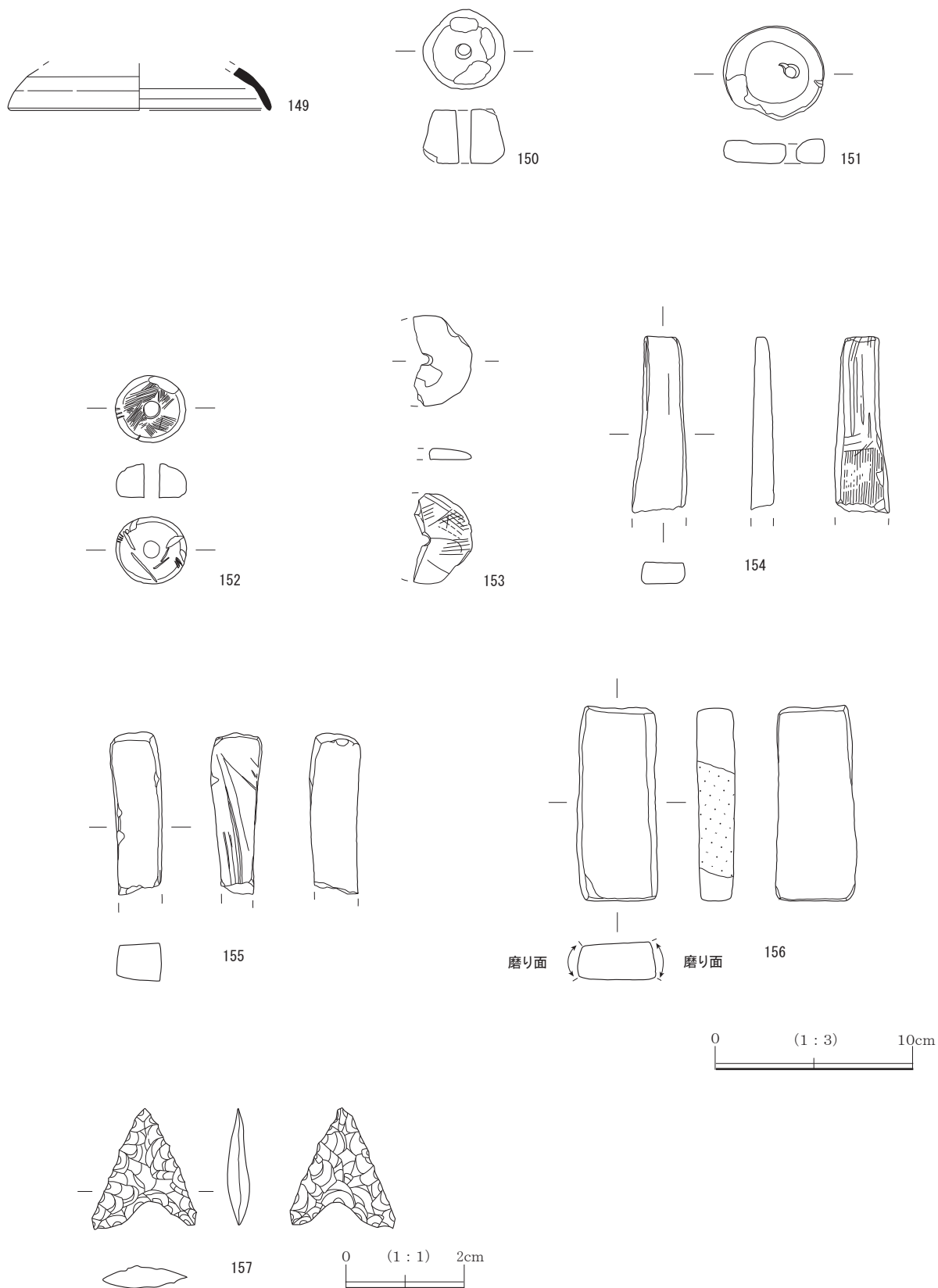


0 (1 : 3) 10cm

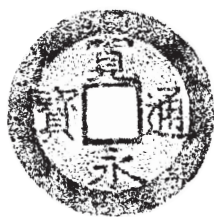


0 (1 : 4) 10cm

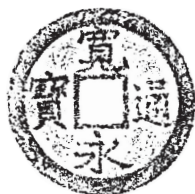
第 34 図 1号及び2号石組み・遺構外出土遺物①



第 35 図 遺構外出土遺物②



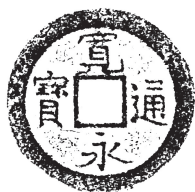
158



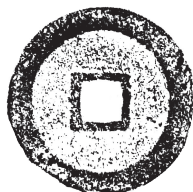
159



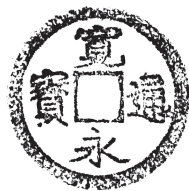
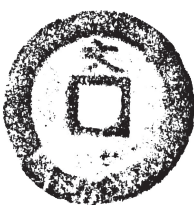
160



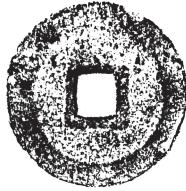
161



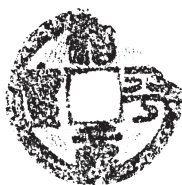
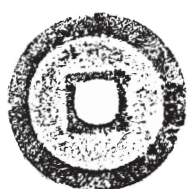
162



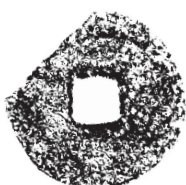
163



164



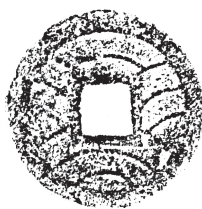
165



166



167



168

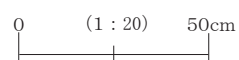
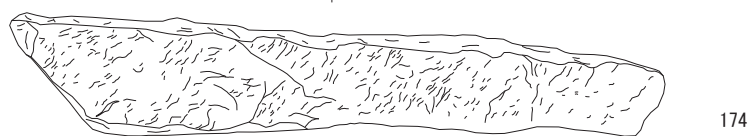
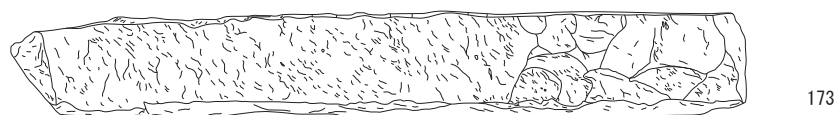
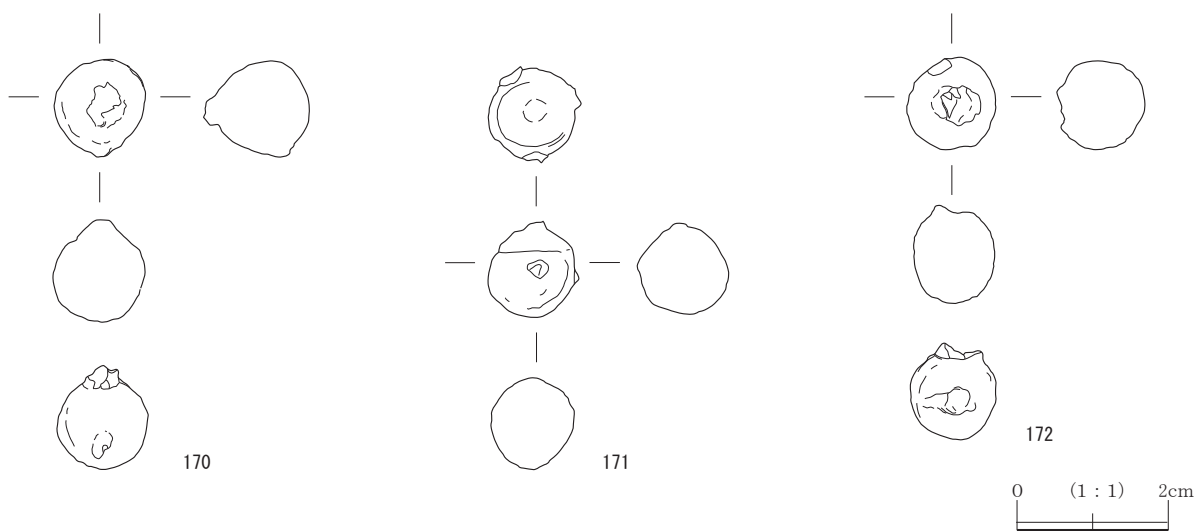


169



0 (1 : 1) 2cm

第 36 図 遺構外出土遺物③



第 37 図 遺構外出土遺物④

第3表 出土遺物観察表

遺構名	挿図 番号	遺物 番号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	注記記号
1号円形周溝	第21図	1	陶器	皿	残 1.5	(11.6)	—	明黄褐 (2.5Y7/6)	緻密	良好	F16-1 周 P51
		2	土師器	甗	残 5.9	—	4.2	明赤褐 (5YR5/6)	緻密 白色粒子含む	良好	F16-1 周一括
		3	土師器	甗	残 7.9	—	(9.0)	橙 (5YR6/6)	キメ細かい 長石・石英・赤色粒子	良好	F16-1 周土集一括
		4	土師器	甗	残 8.6	(19.6)	—	明赤褐 (5YR5/6)	緻密 白色粒子を含む	良好	F16-1 周土集一括
		5	土師器	甗	残 9.9	—	(12.0)	橙 (5YR6/6)	緻密 黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子含む	良好	F16-1 周一括
		6	土師器	S字状口縁 台付甗	残 4.2	(13.8)	—	にぶい橙 (7.5YR7/4)	緻密 赤色粒子・金雲母含む	良好	F16-1 周上層一括
		7	土師器	甗	残 6.6	—	6.7	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	長石・赤色粒子をまば らに含む	良	F16-1 周土集一括
		8	土師器	甗	残 5.2	—	9.0	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	長石・石英・小石	良	F16-1 周土集一括
		9	土師器	甗	残 13.6	(17.4)	—	明赤褐 (5YR5/6)	緻密 赤色粒子・黒色粒子・ 白色粒子・金雲母含む	良好	F16-1 周一括
		10	土師器	(小型) 甗	残 10.5	—	6.8	明赤褐 (2.5YR5/6)	緻密 白色粒子を含む	良好	F16-1 周土集 P13
	第22図	11	土師器	甗	残 9.2	(25.6)	—	明赤褐 (2.5YR5/6)	緻密 白色粒子含む	良好	F16-1 周土集一括
		12	土師器	甗 or 甗	残 12.2	(24.4)	—	明褐 (7.5YR5/8)	緻密	良好	F16-1 周一括
		13	土師器	甗	残 18.4	—	7.0	外面にぶい赤褐 (5YR4/3) 内面赤褐 (5YR4/8)	やや粗い 白色粒子・赤色粒子含 む	良好	F16-1 周一括
		14	石器黒	石鎌	最大長 2.2	最大幅 2.1	最大厚 0.4	—	石質 黒曜石	—	F16-1 周上層
2号円形周溝 上層	第22図	15	土師質土器	皿	2.7	9.0	4.2	にぶい赤褐 (5YR5/4)	金雲母を多く含む	良好	F16- 周㊦ P56
		16	土師質土器	灯明皿	2.8	10.0	4.9	灰黄褐 (10YR6/2)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16- 周㊦ P58
		17	土師質土器	脚高高台皿	5.6	(16.0)	(7.4)	橙 (5YR6/6)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16- 周㊦ P2
		18	土師器	坏	3.4	11.0	2.0	明赤褐 (5YR5/6)	赤色粒子・長石を含む	良好	F16- 周㊦上層一括
		19	土師器	坏	3.5	12.0	5.0	にぶい黄橙 (10YR5/3)	キメ細かく緻密 赤色粒子を多く含む	良好	F16- 周㊦上層一括
		20	土師器	坏	3.7	12.1	—	褐灰 (10YR4/1)	緻密 赤色粒子を含む	良好	F16- 周㊦上層
		21	土師器	坏	残 4.0	(12.0)	—	明赤褐 (2.5YR5/6)	キメ粗い 長石・赤色粒子	良	F16- 周㊦上層一括
		22	土師器	坏	3.8	12.2	5.0	にぶい黄褐 (10YR5/3)	キメ細かい 赤色粒子を多く含む	良好	F16- 周㊦上層一括
		23	土師器	坏	4.3	12.3	—	赤 (10YR4/6)	緻密 赤色粒子・白色粒子・ 黒色粒子	良好	F16- 周㊦上層一括
	第23図	24	土師器	坏	4.2	13.0	2.0	外面赤 (10R5/6) 内面黒褐 (2.5Y3/1)	赤色粒子を少量含む	良好	F16- 周㊦上層一括
		25	土師器	坏	3.9	13.05	2.6	明赤褐 (2.5YR5/6)	キメ細かく緻密 金雲母	良好	F16- 周㊦上層一括
		26	土師器	坏	4.6	13.2	—	明赤褐 (2.5YR5/6)	緻密	良好	F16- 周㊦上～中層一括
		27	土師器	坏	4.5	13.4	4.6	赤褐 (2.5YR4/6)	キメ細かく緻密 長石・石英	良好	F16- 周㊦上層一括
		28	土師器	坏	4.1	(13.8)	5.6	にぶい赤褐 (5YR4/4)	キメやや粗い 長石・石英	良好	F16- 周㊦上層一括
		29	土師器	坏	3.5	14.0	—	にぶい褐 (7.5YR6/3)	緻密	良好	F16- 周㊦上～中層一括
		30	土師器	高坏	残 8.05	—	(11.3)	橙 (7.5YR6/6)	緻密 赤色粒子を多量に含む	良好	F16- 周㊦上層一括
		31	土師器	高坏	残 7.5	23.8	—	橙 (5YR6/8)	緻密 赤色粒子含む	良好	F16- 周㊦ P3
		32	土師器	甗	残 2.8	—	(5.0)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	緻密 白色粒子を含む	良好	F16- 周㊦上層一括
		33	土師器	甗	残 4.4	—	7.4	にぶい橙 (7.5YR7/4)	緻密 白色粒子・赤色粒子を 含む	良好	F16 シ㊦-4 ト㊦ P9
		34	土師器	甗	残 4.8	—	7.6	赤褐 (5YR4/8)	緻密 白色粒子を多量に含む	良好	F16- 周㊦ P12
		35	土師器	甗	残 3.5	—	8.0	赤褐 (2.5YR4/6)	キメやや粗い 長石・石英・赤色粒子	良好	F16- 周㊦上層一括
		36	土師器	甗	残 6.1	—	2.8	橙 (5YR6/6)	緻密 赤色粒子を含む	良好	F16- 周㊦上～中層一括

遺構名	挿図 番号	遺物 番号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	注記番号
2号円形周溝 上層	第23図	37	土師器	甗	残 10.9	—	—	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石・赤色粒子を含む 金雲母を少量含む	良好	F16- 周ⅰ上層一括
		38	土師器	甗	13.3	18.0	4.5	橙 (5YR6/6)	緻密	良好	F16- 周ⅰ中層
	第24図	39	土師器	甗	残 25.9	(24.0)	—	にぶい黄橙 (10YR6/3)	キメ細かい 長石・石英・赤色粒子	良好	F16- 周ⅰ上層一括
		40	土師器	甗	21.5	26.6	8.0	橙 (5YR6/6)	緻密	良好	F16- 周ⅰ上～中層一括
		41	土師器	甗か	残 5.4	—	5.4	橙 (7.5YR6/6)	キメ粗い 長石・赤色粒子・石英・ 雲母を含む	良好	F16- 周ⅰ上層一括
		42	土師器	甗か	残 4.4	—	7.4	明赤褐 (5YR5/6)	長石・赤色粒子を含む	良	F16- 周ⅰ上層一括
		43	土師器	複合口縁壺	残 7.7	—	—	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石を少量含む 赤色粒子を含む	良好	F16- 周ⅰ P30
		44	土師器	壺	残 7.4	—	—	浅黄橙 (10YR8/4)	長石・石英・赤色粒子 を含む	良好	F16- 周ⅰ上～中層一括
		45	土師器	S字状口縁 台付甗	残 3.6	(12.0)	—	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石・金雲母・赤色粒 子をまばらに含む	良好	F16- 周ⅰ上層一括
		46	土師器	壺	残 4.9	16.0	—	橙 (5YR7/6)	緻密 金雲母・長石を含む	良好	F16- 周ⅰ上～中層一括
		47	土師器	埴	10.1	(16.6)	(7.4)	赤褐 (2.5YR4/6)	緻密 白色粒子を含む	良好	F16- 周ⅰ上～中層一括
		48	土師器	球胴甗	残 7.5	(20.0)	—	にぶい黄橙 (10YR6/4)	緻密 長石を含む	良好	F16- 周ⅰ上層一括
	第25図	49	土師器	球胴甗	残 9.5	—	8.6	赤褐 (2.5YR4/8)	緻密 長石・赤色粒子・金雲 母含む	良好	F16- 周ⅰ上層一括
		50	土師器	長胴甗	27.5	18.6	8.2	にぶい橙 (7.5YR6/4)	白色粒子・雲母	良好	F16- 周ⅰ P71 F16- 周ⅰ上層一括
		51	土師器	甗	31.8	17.8	(6.0)	明赤褐 (2.5YR65/6)	緻密	良好	F16- 周ⅰ P65 F16- 周ⅰ P66
		52	縄文土器	(深鉢)	残 3.3	—	—	にぶい黄橙 (10YR6/3)	黒雲母・長石をまばら に含む	良好	F16- 周ⅰ上層一括
		53	縄文土器	(深鉢)	残 6.0	—	—	にぶい褐 (7.5YR5/4)	長石・雲母を含む	良好	F16- 周ⅰ上層一括
		54	土師器	小型手捏土器	2.6	2.7	2.0	にぶい橙 (5YR6/4)		良	F16- 周ⅰ P5
		55	土師器	小型丸底土器	残 5.4	—	—	赤 (10R5/6)	緻密 赤色粒子を含む	良好	F16- 周ⅰ下層一括 (出土位置は上層下層の 境界)
		56	土師器	小型丸底土器	残 6.5	—	—	赤 (10R5/8)	緻密 白色粒子を含む	良好	F16- 周ⅰ上層一括
		57	須恵器	甗	残 3.6	—	—	灰 (5Y5/1)	緻密	良好	F16- 周ⅰ上層一括
	第26図	58	須恵器	甗	残 7.0	(13.6)	—	灰 (N6/)	緻密 白色粒子含む	良好	F16 シツ -4 ト P18
		59	須恵器	蓋	4.3	14.6	—	灰 (5Y5/1)	緻密 長石含む	良好	F16- 周ⅰ一括
		60	須恵器	台付甗	残 9.4	—	6.5	灰 (N6/)	緻密 白色粒子含む	良好	F16 シツ -4 ト P18
		61	灰釉陶器	長頸壺	残 8.4	—	(7.7)	灰黄褐 (10YR6/2)	キメ細かく緻密	良好	F16 シツ -4 ト P3 F16 シツ -4 ト一括
		62	布目瓦	丸瓦 (男瓦)	最大長 6.2	最大幅 5.4	最大厚 1.9	にぶい黄橙 (10YR6/4)	やや粗い	良好	F16- 周ⅰ上～中層一括
2号円形周溝 下層	第26図	63	土師器	坏	3.7	(11.6)	3.0	にぶい褐 (7.5YR5/3)	長石を少量含む	良好	F16- 周ⅰ下層一括
		64	土師器	坏	3.3	(12.1)	2.0	外面にぶい赤褐 (5YR4/3) 内面黒褐 (2.5Y3/2)	赤色粒子・長石を少量 含む	良好	F16- 周ⅰ下層一括
		65	土師器	坏	4.1	(13.0)	(4.6)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	長石・黒雲母をまばら に含む	良好	F16- 周ⅰ下層一括
		66	土師器	坏	4.6	13.0	3.0	外面にぶい赤褐 (2.5YR4/4) 内面黒褐 (5YR2/1)	長石・石英	良好	F16- 周ⅰ P59
		67	土師器	坏	4.8	13.8	3.7	赤 (10R4/8)	緻密 黒色粒子・金雲母含む	良好	F16- 周ⅰ下層一括
		68	土師器	坏	3.9	14.0	(4.8)	外面にぶい赤褐 (5YR4/4) 内面黒 (10YR2/1)	キメやや粗い 長石・石英	良好	F16 シツ -4 ト P30 F16 シツ -4 ト中～下層一括 F16 シツ -4 ト上～中層一括
		69	土師器	坏	3.7	(14.3)	2.2	明赤褐 (2.5YR5/6)	キメ細かく緻密 白色粒子・赤色粒子・ 金雲母を含む	良好	F16- 周ⅰ下層一括
	第27図	70	土師器	坏	6.6	(18.8)	—	赤 (10R5/6)	緻密	良好	F16- 周ⅰ下層一括
		71	土師器	高坏	11.1	12.6	(8.6)	明赤褐 (5YR5/6)	キメ細かい 長石・石英・白色粒子 を含む	良好	F16- 周ⅰ P74
		72	土師器	高坏	残 9.2	—	9.5	赤褐 (2.5YR4/6)	キメ細かく緻密 長石・石英	良好	F16- 周ⅰ下層一括

遺構名	挿図 番号	遺物 番号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	注記番号
2号円形周溝 下層	第26図	73	土師器	高坏	残 9.0	—	11.8	橙 (7.5YR7/6)	緻密 白色粒子を含む	良好	F16- 周溝下層一括
		74	土師器	高坏	残 10.5	—	10.8	明赤褐 (2.5YR5/6)	長石・石英を含む	良好	F16 シツ-4 ト P40
		75	土師器	埴	残 6.1	(12.8)	—	にぶい橙 (7.5YR6/4)	緻密 長石含む	良好	F16- 周溝下層一括
	第27図	76	土師器	甗把手	残 3.3	—	—	にぶい赤褐 (5YR5/4)	赤色粒子を多く含む	良好	F16- 周溝下層一括
		77	土師器	小型手握土器	残 5.6	—	4.0	赤褐 (2.5YR4/6)	キメやや粗い 長石・石英・赤色粒子 を含む	良好	F16- 周溝 P57
		78	土師器	ミナツ土器	残 7.3	—	4.5	にぶい赤褐 (5YR5/4)	キメやや粗い 長石・石英を含む	良好	F16- 周溝 P67
		79	弥生土器	壺	残 5.5	—	—	明赤褐 (5YR5/6)	長石・赤色粒子・金雲 母をまばらに含む	良好	F16- 周溝下層一括
		80	土師器	台付甕の脚部	残 4.2	—	(5.2)	浅黄 (2.5Y7/3)	キメやや粗い 長石・石英・金雲母	良好	F16- 周溝 P60
		81	土師器	甕	残 9.9	—	9.0	明赤褐 (2.5YR5/8)	緻密 長石を含む	良好	F16- 周溝 P70
		82	縄文土器	深鉢	残 2.3	—	—	褐 (7.5YR4/4)	長石・雲母を微量に含む	良好	F16- 周溝下層一括
	第28図	83	須恵器	甕	残 4.8	—	—	褐灰 (10YR5/1)	長石をまばらに含む	良好	F16- 周溝下層一括
		84	須恵器	直口壺	残 5.4	(8.0)	—	灰 (N4/)	長石をまばらに含む	良好	F16- 周溝下層一括
		85	須恵器	蓋	残 3.9	(12.8)	—	外面灰 (5Y4/1) 内面黄灰 (2.5Y6/1)	キメ細かく緻密	良好	F16- 周溝下層一括
		86	土師器	甕	残 52.3	—	13.0	明赤褐 5YR5/6	粗砂粒含む 長石・石英・赤色粒子	良好	F16- 周溝下層
		87	土師器	甕	26.0	26.0	9.5	にぶい赤褐 (5YR5/4)	キメやや粗い 長石・石英	良好	F16- 周溝 P61
2号円形周溝一括	第29図	88	土師器	長胴甕	残 30.2	(19.4)	—	にぶい赤褐 (5YR5/4)	長石・石英・赤色粒子	良好	F16- 周溝下層一括 F16- 周溝最下層一括
		89	土師器	高坏	9.3	13.8	11.2	外面赤 (10R5/6) 内面黒褐 (2.5YR3/1)	緻密 赤色粒子を含む	良好	F16- 周溝上～下層一括
		90	土師器	高坏	残 5.5	—	(11.2)	橙 (2.5YR6/6)	長石・赤色粒子・雲母 を含む	良好	F16- 周溝一括
		91	須恵器	甕?	残 6.4	—	—	灰 (N5/)	長石	良好	F16- 周溝一括
		92	瓦	男瓦	最大長 11.9	最大幅 8.1	最大厚 1.95	にぶい褐 (7.5YR5/4)	キメやや粗い 小石を多く含む	良好	F16- 周溝カラン
1号竪穴建物跡	第30図	93	土師器	高坏	残 4.05	(13.6)	—	橙 (7.5YR6/6)	緻密 赤色粒子を含む	良好	F16-1 住 P24
		94	土師器	複合口縁壺	残 6.7	—	—	明褐 (7.5YR5/8)	緻密 長石を含む	良好	F16-1 住 P25 F16- 周溝上～中層一括
		95	弥生土器	甕 or 壺	残 3.0	—	—	明赤褐 (5YR5/6)	長石・石英を少量含む	良好	F16-1 住一括
		96	土師器	台付甕	残 5.7	—	8.2	橙 (5YR7/6)	緻密 細かい金雲母を多量に 含む	良好	F16-1 住 P23
		97	土師器	台付甕	残 3.6	—	—	橙 (5YR6/6)	緻密 金雲母・黒色粒子を含む	良好	F16 シツ-1 住 P2
		98	土師器	S字状口縁 台付甕	残 2.7	(11.6)	—	明褐 (7.5YR5/6)	緻密 赤色粒子・金雲母を含む	良好	F16-1 住カラン一括
		99	土師器	S字状口縁 台付甕	残 3.6	(15.0)	—	橙 (5YR6/6)	緻密 金雲母を含む	良好	F16-1 住カラン一括
		100	弥生土器	甕	—	(17.0)	—	橙 (7.5YR6/6)	1mm ～ 3mm 大の長石 を含む	良好	F16-1 住一括
		101	布目瓦	丸瓦 (男瓦)	最大長 6.8	最大幅 7.0	最大厚 1.95	にぶい黄橙 (10YR6/4)	キメやや粗い 長石・石英・赤色粒子	良好	F16-1 住カラン一括
		102	土師質土器	小皿	2.75	10.0	4.7	にぶい橙 (7.5YR6/4)	キメやや粗く緻密 多量の金雲母	良好	F16-1 ㌥ P52
1号竪穴状遺構	第30図	103	土師質土器	小皿	2.55	10.4	4.5	にぶい橙 (7.5YR6/4)	キメやや粗く緻密 多量の金雲母	良好	F16-1 ㌥ P46
		104	土師質土器	小皿	2.4	(10.6)	4.9	明赤褐 (5YR5/6)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16-1 ㌥上層一括
		105	土師器	坏	残 2.0	—	5.1	にぶい赤褐 (5YR4/3)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16-1 ㌥上層一括
	第31図	106	土師質土器	脚高台	残 2.0	—	7.8	にぶい赤褐 (5YR5/4)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16-1 ㌥ P53
		107	土師質土器	脚高高台埴	残 4.0	—	8.9	明褐 (7.5YR5/6)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16-1 ㌥ P63
		108	灰釉陶器	坏	残 3.6	(15.6)	—	灰白 (5Y7/1)	長石を含む	良好	F16-1 ㌥上層一括
		109	土師器	高台付坏	6.6	13.0	6.4	橙 (2.5YR6/8)	緻密 赤色粒子・黒色粒子含む 金雲母少量含む	良好	F16-1 ㌥ P62

遺構名	挿図番号	遺物番号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	注記記号
1号竪穴状遺構	第31図	110	土師器	脚高高台坏	残 5.3	15.5	—	橙 (5YR6/6)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16-1 ㍻ P8
		111	土師器	脚高高台坏	6.7	15.6	(8.4)	明赤褐 (5YR5/6)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16-1 ㍻ P47
		112	土師器	小型器台	残 4.6	9.0	—	にぶい赤褐 (5YR5/4)	長石・石英・赤色粒子	良好	F16-1 ㍻ P43
		113	灰釉陶器	甕	残 4.8	—	—	灰白 (10Y7/1)	キメやや粗い 長石を含む	良好	F16-1 ㍻ P9
		114	土師器	小型台付甕	8.95	9.5	7.1	赤 (10R4/6)		良好	F16-1 ㍻ P11
		115	土師器	S字型甕	残 3.6	(17.0)	—	橙 (2.5YR6/6)	緻密 白色粒子・黒色粒子を含む	良好	F16-1 ㍻下層一括
		116	縄文土器	(深鉢)	残 4.5	—	—	褐 (7.5YR4/4)	長石・黒雲母をまばらに含む	良好	F16-1 ㍻下層一括
		117	縄文土器	(深鉢)	残 3.8	—	—	にぶい黄橙 (10YR6/3)	長石・黒雲母をまばらに含む	良好	F16-1 ㍻下層一括
		118	石器	石鎌	最大長 1.5	最大幅 1.3	最大厚 0.4	—	石質 黒曜石	—	F16-1 ㍻上層一括
廃棄土坑	第32図	119	弥生土器	台付甕	20.4	(17.6)	7.4	明赤褐 (5YR5/8)	緻密 赤色粒子・白色粒子・ 金雲母含む	良好	F16- ㍻土坑一括
		120	弥生土器	小型甕	残 7.8	—	4.3	灰黄褐 (10YR4/2)	キメ細かい 長石・石英	良好	F16- ㍻土坑一括
		121	弥生土器	高坏	26.3	(28.4)	(10.3)	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	キメ細かい 多量の石英・少量の長 石を含む	良好	F16- ㍻土坑一括
		122	弥生土器	甕	38.3	(26.5)	(9.8)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	キメやや粗い 長石・石英・赤色粒子	良好	F16- ㍻土坑一括
1号落込み	第32図	123	土師質土器	皿	3.7	17.1	7.2	橙 (5YR6/8)	緻密 赤色粒子多量に含む	良好	F16- ㍻Ⅰ 1P49
		124	土師質土器	脚高高台小皿	残 3.2	—	6.0	橙 (5YR6/6)	緻密 赤色粒子を含む	良好	F16- ㍻Ⅰ 1 下層一括
		125	土師質土器	脚高高台小皿	4.55	(9.8)	6.0	橙 (5YR6/6)	緻密 赤色粒子・黒色粒子・ 金雲母含む	良好	F16- ㍻Ⅰ 1 一括
	第33図	126	土師質土器	脚高高台小皿	4.3	(11.0)	6.3	橙 (5YR6/6)	緻密 赤色粒子・黒色粒子含む	良好	F16- ㍻Ⅰ 1P48
		127	土師質土器	脚高高台坏	残 3.2	—	11.4	橙 (5YR6/6)	緻密 赤色粒子・黒色粒子多 量に含む 細かい金雲 母含む	良好	F16- ㍻Ⅰ 1 一括
		128	須恵器	甕か	残 2.6	—	—	灰 (5Y5/1)	長石を少量含む	良好	F16- ㍻Ⅰ 1 一括
2号落込み	第33図	129	土師器	坏	4.1	(13.0)	1.4	にぶい橙 (7.5YR6/4)	赤色粒子	良好	F16- ㍻Ⅱ 2 一括
		130	土師器	坏	3.8	(13.8)	5.0	にぶい黄橙 (10YR6/4)	緻密 赤色粒子を含む	良好	F16- ㍻Ⅱ 2P20
		131	土師器	坏	4.5	(14.0)	6.4	外面橙 (2.5Y6/8) 内面灰 (5Y4/1)	緻密 赤色粒子を含む	良好	F16- ㍻Ⅱ 2P50
		132	弥生土器	広口壺	—	—	—	橙 (5YR6/6)	緻密 黒色粒子・白色粒子を 含む	良好	F16- ㍻Ⅱ 2 一括
3号落込み	第33図	133	土師器	小型壺	残 6.9	—	(5.8)	橙 (5YR7/6)	長石・赤色粒子	良好	F16- ㍻Ⅱ 3P64
1号石組み	第33図	134	土師質土器	小皿	2.4	9.2	3.9	にぶい褐 (7.5YR5/4)	金雲母を多く含む	良好	F16- 石組 1P39
		135	土師質土器	脚高高台皿	2.9	9.8	5.2	赤褐 (5YR4/8)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16- 石組 1P14
		136	土師質土器	高台付皿	残 2.3	—	6.6	明赤褐 (5YR5/8)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16- 石組 1P15
		137	土師質土器	脚高高台皿	5.1	(15.7)	8.5	にぶい褐 (7.5YR5/4)	緻密 金雲母多量に含む	良好	F16- 石組 1P42
		138	土師質土器	碗	残 5.3	(14.6)	—	にぶい黄橙 (10YR6/4)	緻密 金雲母含む	良好	F16- 石組 1P37
	第34図	139	土師器	羽釜	残 9.1	(24.4)	—	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石・金雲母・赤色粒子	良好	F16- 石組 1P17
2号石組み	第34図	140	土師質土器	脚高高台坏	残 4.2	—	—	にぶい褐 (7.5YR5/3)	キメ細かく緻密 金雲母多量	良好	F16- 石組 2 一括
		141	土師質土器	脚高高台坏	残 4.5	—	—	にぶい褐 (7.5YR5/3)	キメ細かく緻密 金雲母多量	良好	F16- 石組 2P72
遺構外出土遺物	第34図	142	かわらけ	灯明皿	1.45	5.6	4.0	にぶい橙 (7.5YR5/4)	キメやや粗く緻密 白色粒子・雲母	良好	F16- 外 P10
		143	土師質土器	小皿	2.8	9.8	4.2	橙 (7.5YR6/6)	キメ子細かく緻密 金雲母	良好	F16- 黒色土 P34
		144	陶器	灯明皿	1.7	(8.1)	4.0	にぶい赤褐 (5YR4/3)	キメ細かく緻密	良好	F16- 代々一括
		145	灰釉陶器	碗	残 4.0	—	(6.8)	灰白 (2.5Y7/1)	長石を少量含む	良好	F16- 周Ⅱ P33

遺構名	挿図 番号	遺物 番号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	注記記号
遺構外出土遺物	第 34 図	146	土師器	ミナ17土器 (甗)	5.6	5.9	2.2	にぶい黄橙 (10YR7/3)	キメやや粗い 長石・金雲母を含む	良好	F16- 外 P26
		147	土師器	S 字状口縁 台付甗	残 6.1	(18.0)	—	橙 (5YR6/6)	緻密 白色粒子・石英含む	良好	F16- 外 P6
		148	土師器	羽釜	残 6.9	—	—	にぶい赤褐 (5YR4/3)	長石・金雲母を多く含む	良好	F16- 外 P45
	第 35 図	149	須恵器	蓋	残 2.2	—	(13.2)	外面暗灰 (N3/) 内面灰 (N5/)	長石を多く含む	良好	F16 シツ-4 ト中〜下層一括
		150	土製品	紡錘車	最大長 4.0	最大幅 4.1	最大厚 2.75	にぶい橙 (5YR6/4)	緻密 白色粒子・長石多量・ 5mm 大の小礫微量	良好	F16- 外 P4
		151	土製品	紡錘車か	最大長 4.8	最大幅 5.1	最大厚 1.2	にぶい橙 (7.5YR7/4)	キメ細かい 赤色粒子を含む	良好	F16 シツ-3 ト一括
		152	石製品	紡錘車	最大長 3.4	最大幅 3.6	最大厚 1.7	—	安山岩	—	F16 シツ-3 ト一括
		153	石製品	紡錘車	最大長 4.6	最大幅 2.0	最大厚 5.5	—	砂岩	—	F16- 周 功 S3
		154	石製品	砥石	最大長 9.0	最大幅 2.2	最大厚 1.2	—	凝灰岩	—	F16- 検出面 S1
		155	石製品	砥石	最大長 8.0	最大幅 2.5	最大厚 2.5	—	凝灰岩	—	F16- 黒色土 S5
		156	石製品	砥石	最大長 9.8	最大幅 4.0	最大厚 1.9	—	砂岩	—	F16- 黒色土 S4
		157	石製品	石鏃	最大長 2.0	最大幅 1.8	最大厚 0.4	—	黒曜石	—	F16- 遺構外
	第 36 図	158	金属製品	銭貨	長さ 2.8	幅 2.8	厚さ 0.1	—	寛永通宝 波銭 重量 3.8 g	—	保存No. 43005
		159	金属製品	銭貨	長さ 2.6	幅 2.6	厚さ 0.1	—	寛永通宝 背に「文」 重量 3.4 g	—	保存No. 43006
		160	金属製品	銭貨	長さ 2.2	幅 (1.8)	厚さ 0.1	—	寛永通宝 背に「元」 重量 1.2 g	—	保存No. 43007
		161	金属製品	銭貨	長さ 2.5	幅 2.5	厚さ 0.15	—	寛永通宝 重量 2.7 g	—	保存No. 43008
		162	金属製品	銭貨	長さ 2.6	幅 2.6	厚さ 0.1	—	寛永通宝 背に「文」 重量 2.17 g	—	保存No. 43009
		163	金属製品	銭貨	長さ 2.5	幅 2.5	厚さ 0.2	—	寛永通宝 重量 3.4 g	—	保存No. 43010
		164	金属製品	銭貨	長さ 2.4	幅 2.4	厚さ 0.1	—	寛永通宝 重量 2.7 g	—	保存No. 43011
		165	金属製品	銭貨	長さ 2.4	幅 2.4	厚さ 0.1	—	重量 1.9 g	—	保存No. 43012
		166	金属製品	銭貨	長さ 2.3	幅 2.3	厚さ 0.2	—	寛永通宝 重量 2.8 g	—	保存No. 43013 樋 (60) 付近から出土
		167	金属製品	銭貨	長さ 2.7	幅 2.7	厚さ 0.1	—	文久永宝 重量 2.9 g	—	保存No. 43014
		168	金属製品	銭貨	長さ 2.0	幅 2.0	厚さ 0.2	—	50 銭硬貨 重量 2.4 g	—	保存No. 43015
		169	金属製品	銭貨	長さ 2.2	幅 2.2	厚さ 0.1	—	寛永通宝 重量 1.8 g	—	保存No. 43019
	第 37 図	170	金属製品	鉛玉	長さ 1.3	厚さ 1.2	—	—	重量 8.7 g	—	シツ TR- 4 一括 保存 No. 43016
		171	金属製品	鉛玉	長さ 1.4	厚さ 1.3	—	—	重量 9.2 g	—	溝検出面 保存No. 43017
		172	金属製品	鉛玉	長さ 1.4	厚さ 1.3	—	—	重量 8.1 g	—	遺構外地山上 保存 No. 43018
		173	石材	(石橋)	最大長 190	中心幅 42	—	—	—	—	北西端のカクランから出土
		174	石材	(石橋)	最大長 173	中心幅 44	—	—	—	—	北西端のカクランから出土

写真図版



図版 1



調査前風景（平成26年度）



本調査前風景（平成29年度）



遺構検出状況



1号円形周溝 遺構検出状況（北から）



1号円形周溝 検出面出土遺物 清掃風景



1号円形周溝 完掘（東から）



1号円形周溝 完掘（南東から）



2号円形周溝 作業風景（北から）



2号円形周溝 遺物(86) 出土状況(東から)



2号円形周溝 遺物(86) 出土状況(北から)



2号円形周溝 遺物(87) 出土状況(西から)



2号円形周溝 遺物(60) 出土状況(試掘調査時)



2号円形周溝 溝底(北から)



2号円形周溝 溝底(東から)



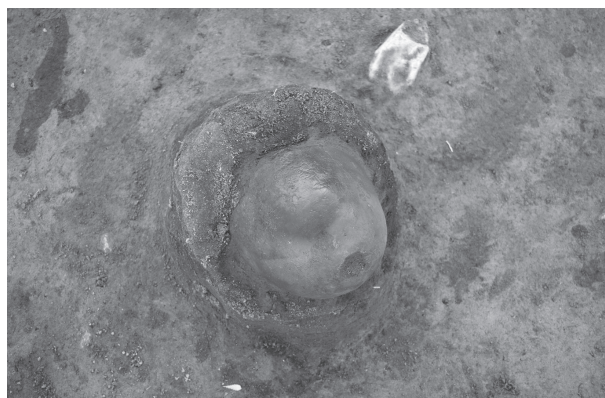
2号円形周溝他 検出作業風景



2号円形周溝 作業風景



2号円形周溝 南側 遺物(38)出土状況(東から)



2号円形周溝 南側 遺物(38)出土状況



2号円形周溝 南側 完掘(西から)



2号円形周溝 南側 溝底(南から)



2号円形周溝 南側 検出作業風景(西から)



2号円形周溝 南側 検出(南から)



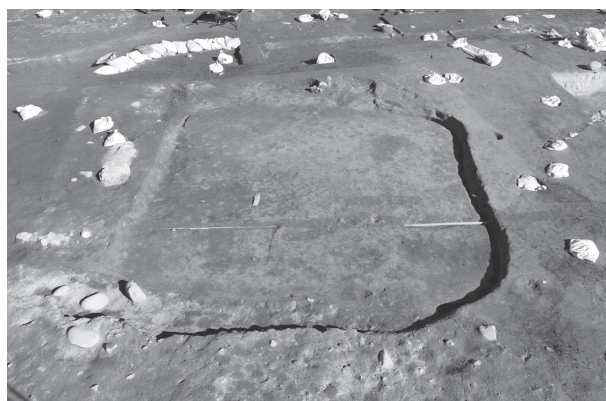
2号円形周溝 完掘（東から）



2号円形周溝 南側 完掘（東から）



1号竪穴建物跡 検出（試掘・西から）



1号竪穴建物跡 完掘前（南から）



1号竪穴建物跡 完掘（南から）



1号竪穴建物跡 完掘（南西から）



1号竪穴建物跡 炉跡 完掘（西から）



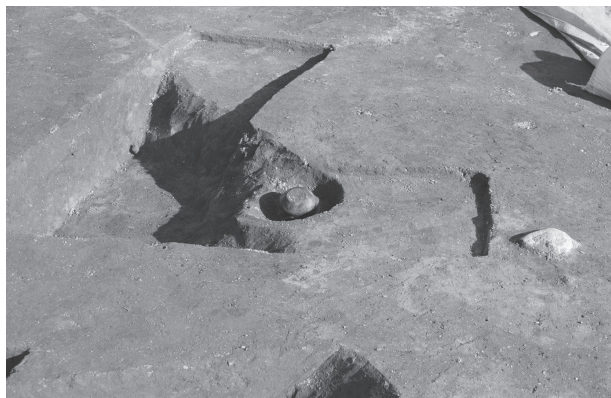
1号竪穴建物跡 周辺（西から）



1号竪穴状遺構 完掘（南西から）



1号竪穴状遺構 遺物(112)出土状況（南西から）



1号縦穴状遺構 遺物(114)出土状況(西から)



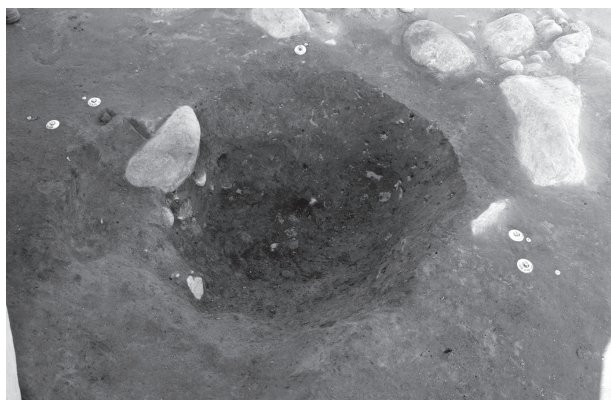
1号縦穴状遺構 遺物(114)出土状況(北から)



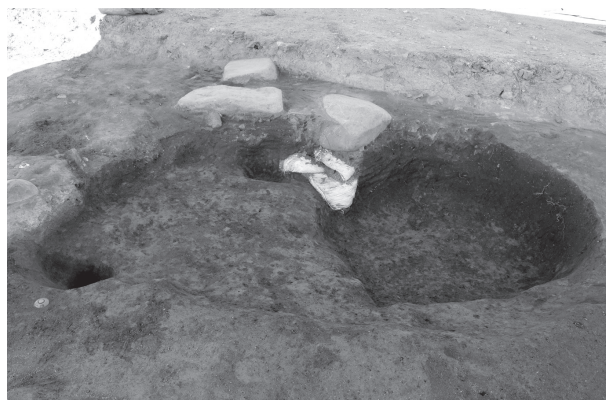
廃棄土坑 検出(南から)



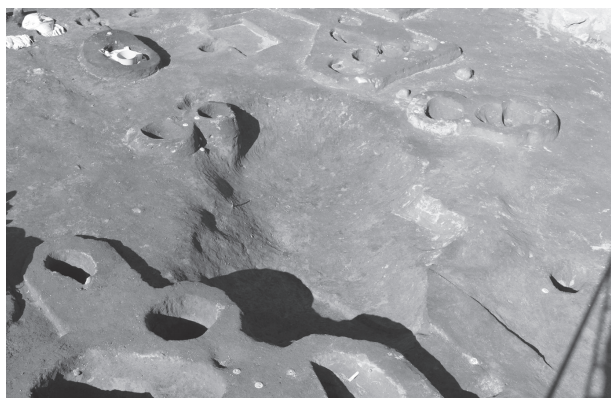
廃棄土坑 遺物出土状況(東から)



廃棄土坑 完掘(南から)



1号落込み 完掘(南から)



2号落込み 完掘(南西から)



3号落込み 完掘(北西から)



1号石組み 完掘（北東から）



2号石組み 完掘（南東から）



ピット群 完掘

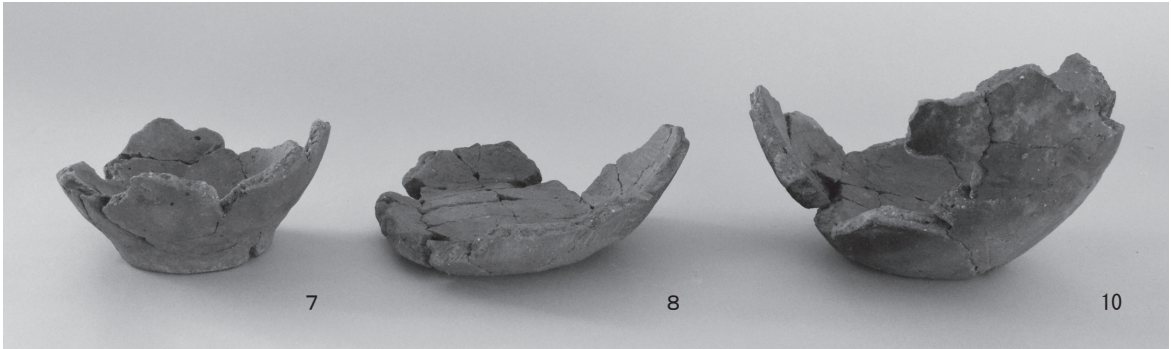
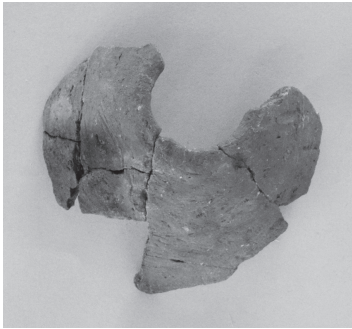
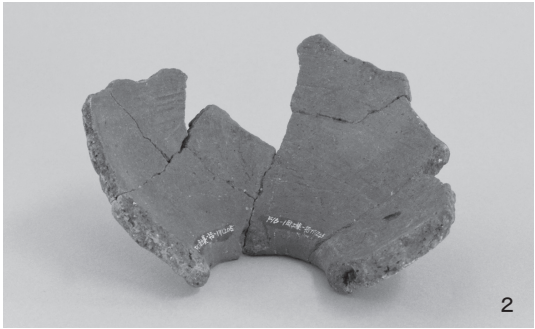


石材（173・攪乱から出土）

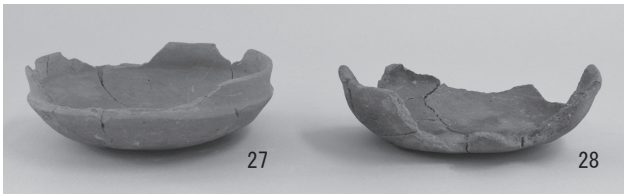
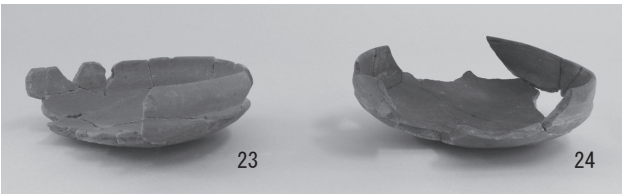
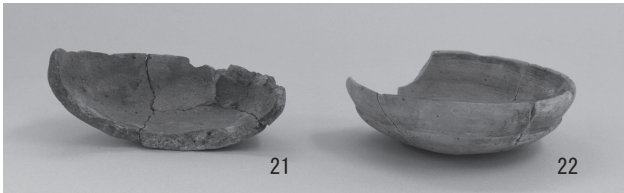
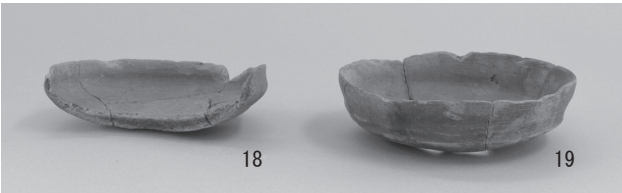


石材（174・攪乱から出土）

図版 9 1号円形周溝・2号円形周溝上層出土遺物

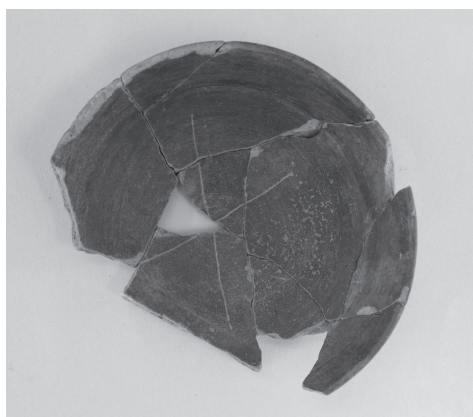


1号円形周溝

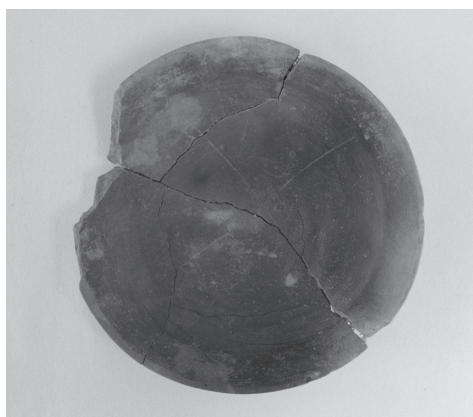


2号円形周溝上層

図版 10 2号円形周溝上層出土遺物



|



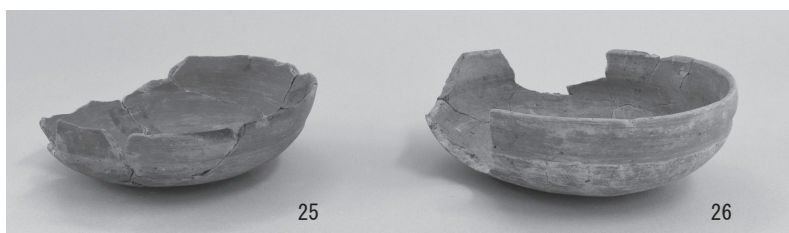
|



20



29

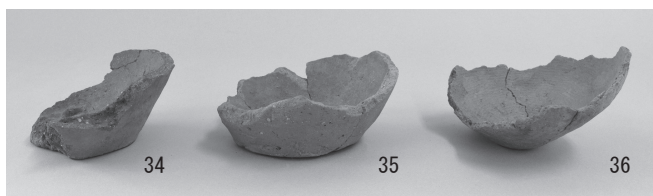


25

26



30

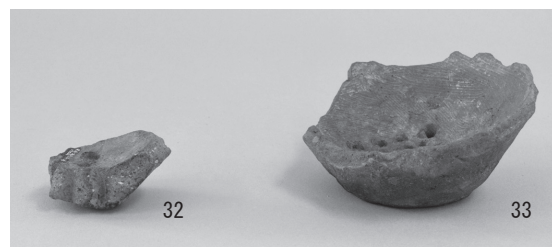


34

35

36

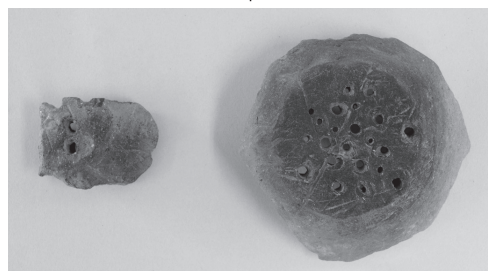
|



32

33

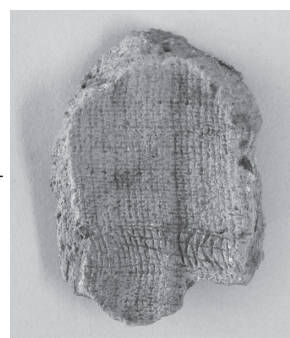
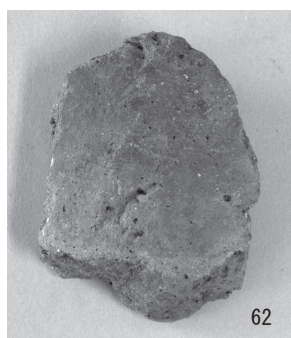
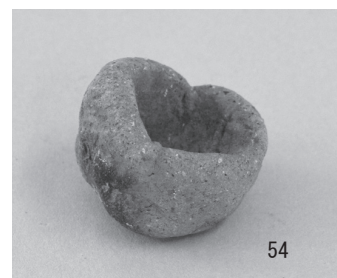
|



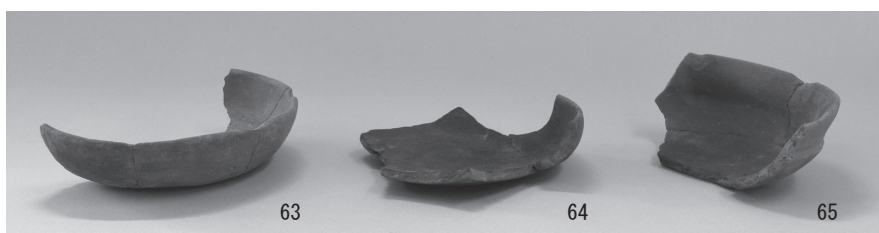
47



31

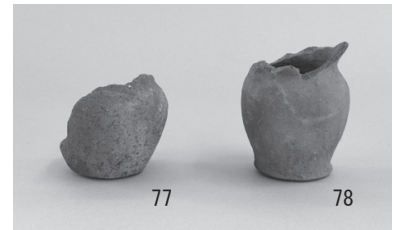
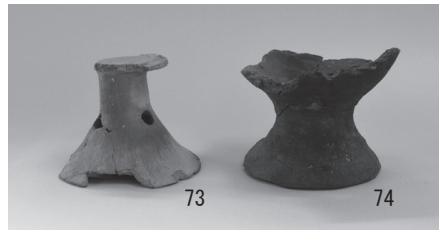
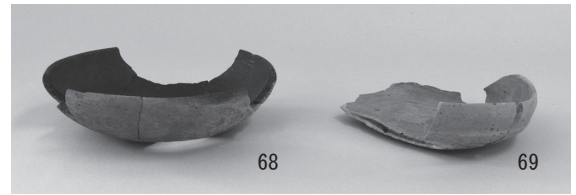
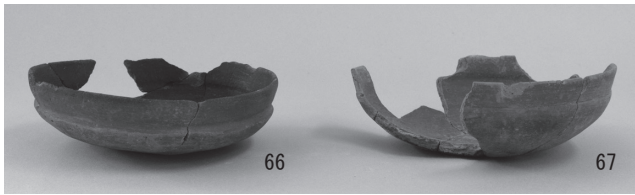


2号円形周溝上層

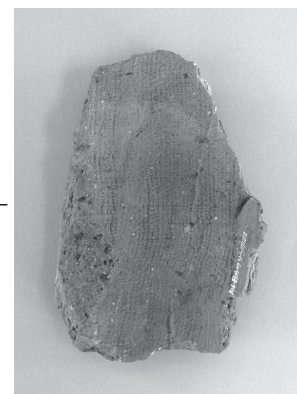
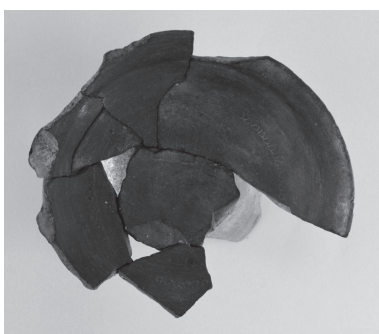


2号円形周溝下層

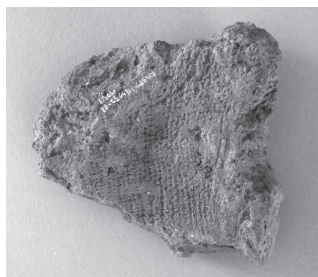
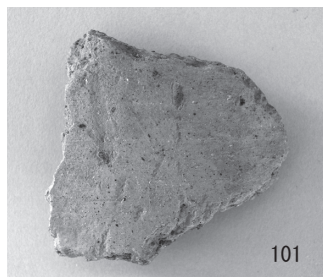
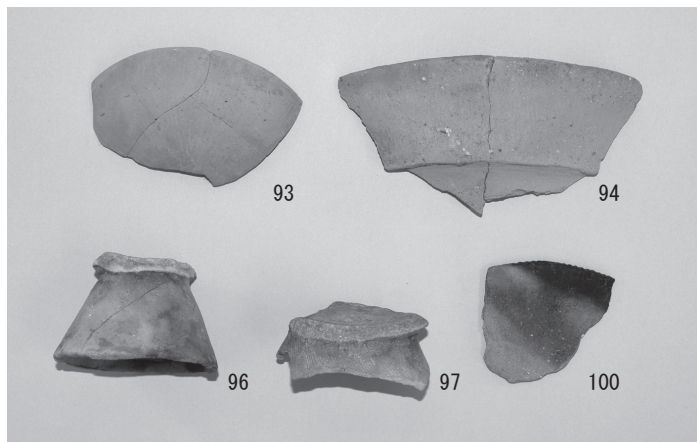
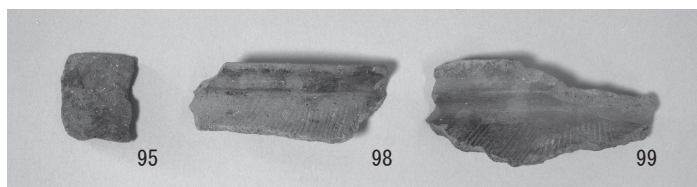
図版 12 2号円形周溝下層・一括出土遺物



2号円形周溝下層



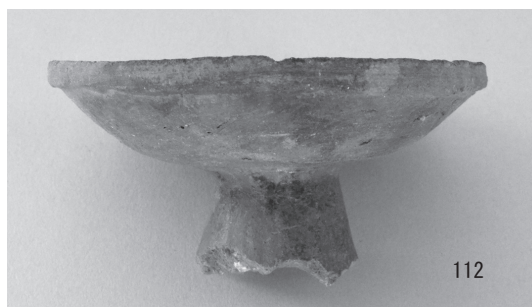
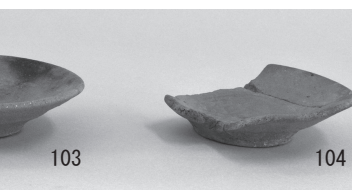
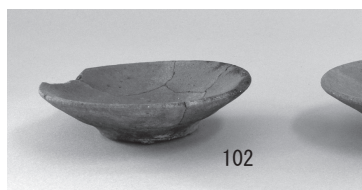
2号円形周溝一括



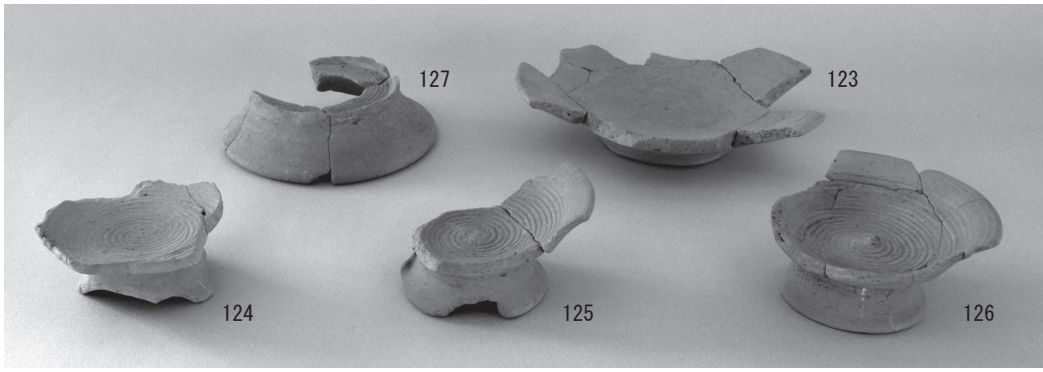
1号竖穴建物跡



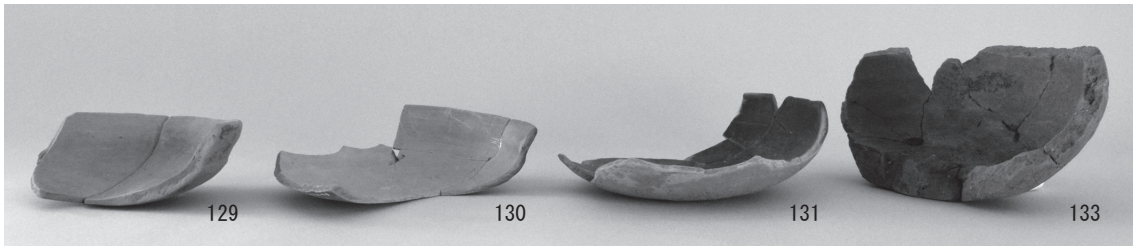
廃棄土坑



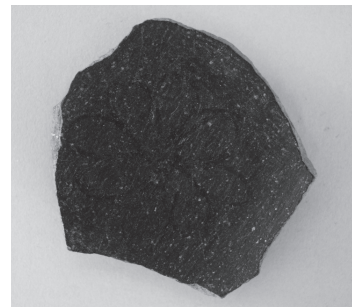
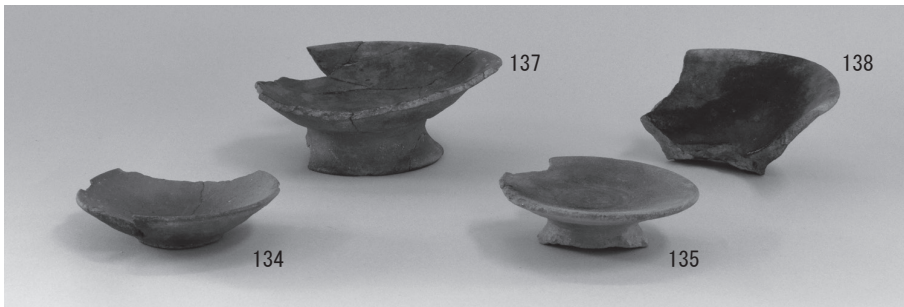
1号竖穴状遺構



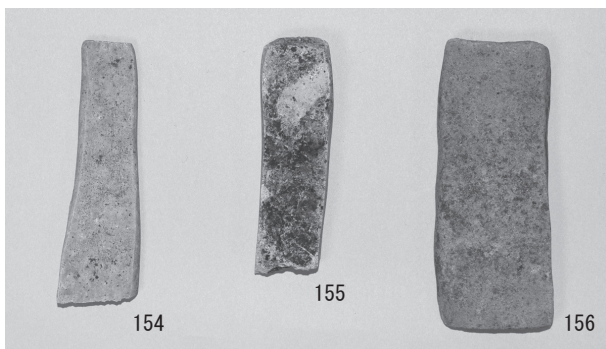
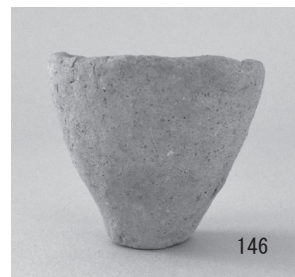
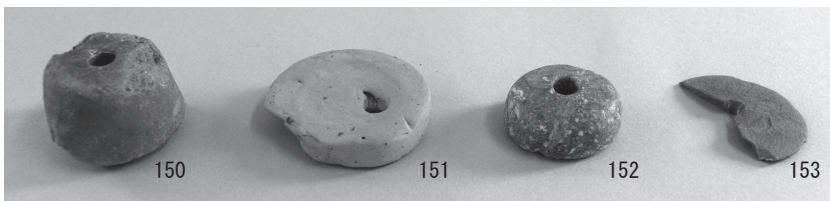
1号落込み



2号・3号落込み



1号石組み



遺構外

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ま つ の お い せ き							
書 名	松 ノ 尾 遺 跡 16							
副 書 名	保育園建設に伴う古墳・平安時代等の発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	甲斐市文化財調査報告書							
シリーズ番号	30							
編 著 者 名	長谷川 哲也							
編 集 機 関	甲斐市教育委員会							
所 在 地	〒400－0192 山梨県甲斐市篠原2610							
発行年月日	令和 2 年 〔西暦2020年〕 3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘調査 期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まつ 松ノ尾遺跡	山梨県 甲斐市 中下条地内	19210	敷－18	35度40分 40秒	138度31分 48秒	平成29年 10月17日 ～ 平成30年 2月16日	750㎡	保育園建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松ノ尾遺跡	集落跡	古墳 平安	竪穴建物跡 円形周溝 ピット群	土師器 土師質土器	古墳時代初頭の竪穴建物跡を1軒検出し、古墳時代後期に円形周溝が2基造られた。円形周溝は削平された後期古墳の周溝の可能性もある。その後、松尾神社に関連すると思われるピット群が造られた。神社旧境内地の土地利用を考察する上でも貴重な調査成果を得た。			

甲斐市文化財調査報告 第30集

松 ノ 尾 遺 跡 16

発行日 令和 2 年 (2020) 3月30日

発 行 甲斐市教育委員会

山梨県甲斐市篠原2610

TEL (055) 278－1697

印 刷 山梨県甲府市丸の内1-10-1

株式会社 峡南堂印刷所

